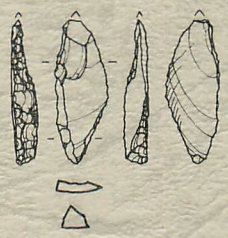
熊本県文化財調査報告　第125集

久保遺跡



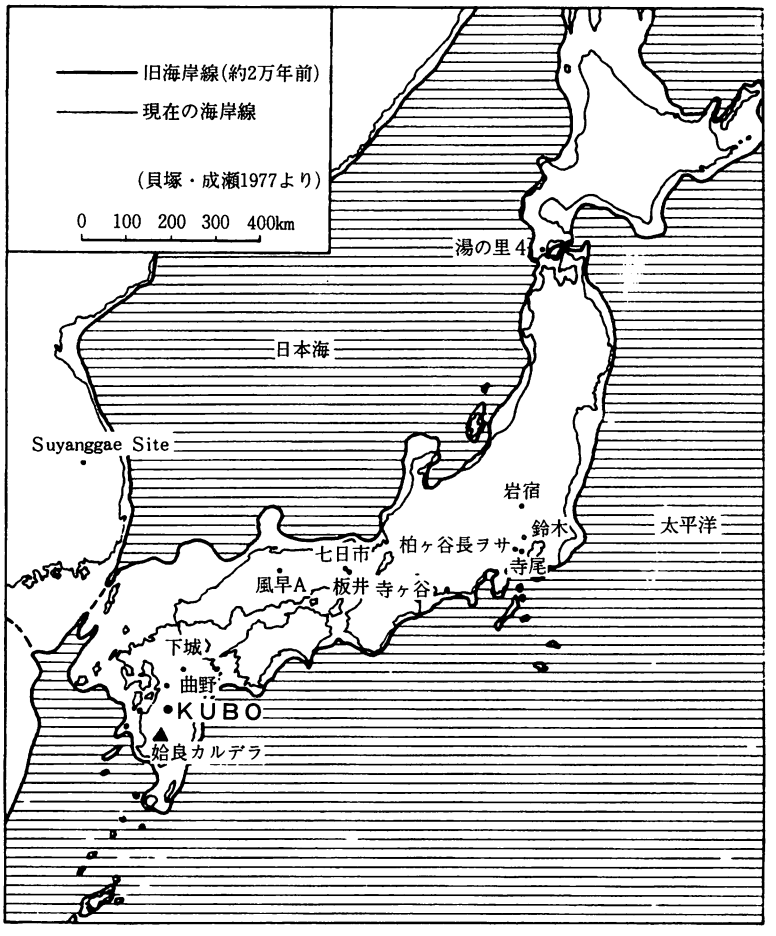
1993.3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第125 集

久保（くぼ）遺跡

—熊本県球磨郡球磨村大字三ヶ浦字久保所在の遺跡—



1993．3

熊本県教育委員会

序　　文

農業の近代化をめざす県営農業基盤整備事業は，県下各地で実施されていますが，施工面積が広範囲におよぶため，その区域内に文化財が含まれることが多くなってきています．熊本県教育委員会としましては，その文化財の取扱いを事前に地元や農政部局と協議し，保存できるものについては極力保存に努めていますが，やむを得ず破壊される場合には発掘調査を実施し，記録保存の措置をとっております．

ここに報告する久保遺跡は，昭和63年度県営農免農道整備事業（大無田地区）に伴って発掘調査を実施したものであります．発掘に先立ち試掘調査をおこない，その結果をもとに関係部局と協議を重ねて，発掘調査を実施しました．

調査の結果，先土器時代から鎌倉時代までの多種多様な遺構や遺物が出土しました．中でも，姶良Tn火山灰の下から発見された先土器時代の遺物は九州内でも調査例が稀で，その結果が全国的にも注目を集めるものと思われます．

調査成果を報告するにあたり，この成果が学術的研究のみならず，広く県民の皆様に活用され，文化財愛護などに役立てられることを願って止みません．

最後に，発掘調査などについて終始ご協力いただいた県農政部，県球磨事務所耕地課，球磨村，球磨村教育委員会および地元の方々に対し，心から感謝の意を表します．

平成５年３月10日

熊本県教育長　　道　越　　温

例　　言

1　本書は，県営農免農道整備事業（大無田地区）に伴い，事前に実施した埋蔵文化財調査の調査報告書である．

2　発掘調査は，熊本県球磨郡球磨村大字三ケ浦字久保に所在する久保遺跡が対象で，熊本県農政部耕地第二課の依頼を受けて，熊本県教育委員会がおこなった．

3　当遺跡の発掘調査は昭和63年度に実施し，本書は平成４年度に整理をおこなった成果である．

4　本書は，古い時代から順に記載している．

5　本書に使用した地形図は，熊本県農政部耕地第二課から提供を受けた．

6　現地調査に関する実測および写真撮影は，調査員がおこない，一部浦田信智（文化課嘱託）の協力を得た．また，遺構の製図は木﨑康弘がおこない．地形図は中田弥生（文化課臨時職員）がおこなった．遺物の実測・製図は木﨑がおこなったが，縄文の石器の一部は中田の協力を得た．

7　本書の執筆は，以下に示す分担でおこなった．

第Ⅰ章　第１節	島津義昭執筆
第Ⅰ章　第２節	中原幸博調査員の調査メモを基に木﨑執筆
第Ⅱ章，第Ⅲ章，第Ⅳ章	木﨑執筆

なお，英文要旨は，木﨑が起稿し，その加筆・訂正を熊本大学甲元眞之先生と熊本県国際課畠田経久先生にお願いした．ハングル文要旨は，島津が作成した．

8　本書の編集は，熊本県教育委員会文化課で，木﨑がおこなった．

凡　　例

1　現地での実測図は，２号土壙と集石を10分の１，１号土壙と遺物分布図を20分の１でおこなった．

2　遺跡分布図の記号は，古墳を◓として，他のものはすべて●としている．

3　遺構の方位は，すべて磁北である．

4　出土した遺物の番号は，それぞれの時代ごとに１番から順に付している．縮尺は，次のとおりである．

石器は，石核を２分の１，磨石を３分の１とし，他の石器はすべて３分の２である．土器は３分の１で，中世の土師器は２分の１である．

5　出土遺物の解説は本文中に記したが，石器の法量については計測表として掲載した．

本 文 目 次

序文
例言
第Ⅰ章　調査の概要 ……………………………… 1
第1節　調査に至る経緯 ……………………… 1
第2節　調査の方法と経過 …………………… 3
第Ⅱ章　遺跡の概要 ……………………………… 5
第1節　遺跡の環境 …………………………… 5
1　地理的環境 …………………………… 5
2　歴史的環境 …………………………… 7
第2節　遺跡の概要 …………………………… 12
第3節　遺跡の層位と包含層 ………………… 13
第Ⅲ章　調査の成果 ……………………………… 14
第1節　先土器時代の遺物 …………………… 14
1　久保Ⅰ石器文化の遺物 ……………… 14
2　久保Ⅱ石器文化の遺物 ……………… 24
3　まとめ ………………………………… 25
第2節　縄文時代の遺構と遺物 ……………… 26
1　遺構とその位置 ……………………… 26
2　出土遺物 ……………………………… 30
3　まとめ ………………………………… 40
第3節　中世の遺構と遺物 …………………… 42
1　遺構と遺物 …………………………… 42
2　まとめ ………………………………… 42
第Ⅳ章　総括 ……………………………………… 44
1　先土器時代の久保遺跡 ……………… 44
2　縄文時代の久保遺跡 ………………… 47
3　中世の久保遺跡 ……………………… 48
参考文献 ………………………………………… 50
図版

挿　図　目　次

第１図　農免農道路線図・・・・・・・・・1
第２図　地形図・・・・・・・・・・・・・3
第３図　球磨川流域の石器石材分布・・・6
第４図　遺跡分布図・・・・・・・・・・・8
第５図　地形断面図・・・・・・・・・・・12
第６図　土層図　・・・・・・・・・・・・13
第７図　石器実測図・・・・・・・・・・・15
第８図　石器実測図・・・・・・・・・・・17
第９図　石器実測図・・・・・・・・・・・18
第10図　石器実測図・・・・・・・・・・・19
第11図　石器実測図・・・・・・・・・・・20
第12図　石器実測図・・・・・・・・・・・21
第13図　石器実測図・・・・・・・・・・・24
第14図　遺構配置・遺物分布図・・・・・26
第15図　１号集石実測図・・・・・・・・・27
第16図　２号集石実測図・・・・・・・・・28
第17図　３号集石実測図・・・・・・・・・29
第18図　土器実測図・・・・・・・・・・・30
第19図　石器実測図・・・・・・・・・・・33
第20図　石器実測図・・・・・・・・・・・34
第21図　石器実測図・・・・・・・・・・・35
第22図　石器実測図・・・・・・・・・・・36
第23図　石器実測図・・・・・・・・・・・37
第24図　遺構・遺物実測図・・・・・・・43
第25図　編年図　・・・・・・・・・・・・45
第26図　狸谷遺跡早期集落概念図・・・・47

表　目　次

第１表　遺跡地名表・・・・・・・・・・・9
第２表　久保Ⅰ石器文化石器組成表・・・14
第３表　石器計測表・・・・・・・・・・・22
第４表　石器計測表・・・・・・・・・・・25
第５表　縄文時代石器組成表・・・・・・32
第６表　石器計測表・・・・・・・・・・・38

図 版 目 次

図版１　遠望・近景
　　１　遠望
　　２　近景
図版２　近景
　　１　近景
　　２　近景
図版３　久保Ⅰ石器文化の石器
　　１～14　ナイフ形石器
図版４　久保　石器文化の石器
　　16～19　ナイフ形石器
　　21　掻器
　　23　彫器
　　24・25　抉入石器
図版５　久保Ⅰ石器文化の石器
　　22　削器
　　26・27　抉入石器
　　28　敲石
図版６　久保Ⅰ石器文化の石器
　　29・30　二次加工ある不定形石器
　　31～36　使用痕ある剥片
図版７　久保Ⅰ石器文化の石器
　　37～44　使用痕ある剥片
図版８　久保Ⅰ石器文化の石器
　　45～48　使用痕ある剥片
図版９　久保Ⅰ石器文化の石器
　　49～53　石核
図版10　久保Ⅰ石器文化の石器
　　54～57　石核
図版11　久保Ⅱ石器文化と縄文時代の遺物
　　1　細石核
　　2　細刃器
　　3　彫器
　　1～4　平栫式土器
図版12　縄文時代の遺物
　　5～7　条痕土器
図版13　縄文時代の遺物
　　8　条痕土器
　　10　円筒形条痕土器
　　11　轟Ｂ式土器
図版14　縄文時代の遺物
　　12　轟Ｂ式土器
　　14・15　出水式系土器
図版15　縄文時代の遺物
　　1～20　石鏃
図版16　縄文時代の遺物
　　21～24　石鏃
　　25・26　石槍
　　27～29　削器
　　30・31　石錐
図版17　縄文時代の遺物
　　32～35　楔形石器
　　36　磨製石斧
図版18　縄文時代の遺物
　　37・38　磨石・敲石
図版19　縄文時代の遺物
　　39～41　磨石・敲石

図版20　縄文時代の遺物
42～48　二次加工ある不定形石器
49～55　使用痕ある剥片
図版21　縄文時代の遺物・中世の土器
57～65　石核
下段　土師器
図版22　遺跡の周辺
現在の大無田集落
図版23　遺跡の周辺
1　観音堂
2　地蔵堂
図版24　遺跡の周辺
1　弁天堂
2　大無田阿蘇神社
図版25　周辺遺跡の遺物
1・2　宮の前遺跡
図版26　周辺遺跡の遺物
1・2　宮の前遺跡
図版27　周辺遺跡の遺物
1・2　片城遺跡
図版28　周辺遺跡の遺物
1　佐土野遺跡
2　タブノキ遺跡
図版29　周辺遺跡の遺物
1・2　長迫遺跡

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

昭和63年度，高生産性農業実現の基礎的条件整備の一環としておこなわれている農道整備事業として熊本県球磨郡球磨村の農免道路整備が計画された（第１図）．文化課では耕地第二課（当時）と協議の上，工事施工予定地の踏査をおこない，遺跡立地条件の有無および表面採集を実施した．その結果、予定地内に３箇所の遺跡分布可能地を認めた．さらに包含層の有無の確認や、その広がりを知るため試掘をおこない，球磨郡球磨村大字三ケ浦字大無田久保遺跡を本調査の対象遺跡として取り上げた．調査は球磨村教育委員会および球磨村文化財保護委員会の協力のもと，熊本県文化課が直営した．

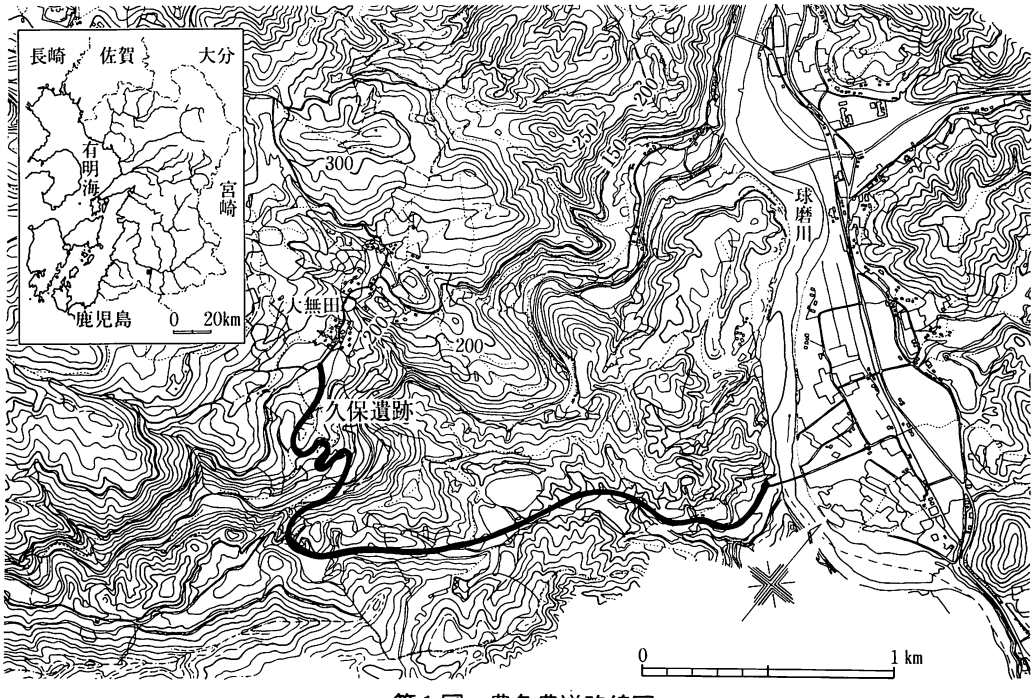
調査の組織

調査主体　　熊本県教育委員会

発掘調査，昭和63年度

調査総括　　江崎　正（文化課長）

林田敏嗣（文化課課長補佐）



第１図　農免農道路線図

	隈昭志（文化課課長補佐）
	松本健郎（文化財調査第一係長）
調査担当	野田拓治（主任学芸員，試掘担当）
	中原幸博（文化財保護主事，調査担当）
調査事務	松崎厚生（文化課主幹）
	上村裕司（文化課主事）
	泉野順子（文化課主事）
農政関係	井上　勇（球磨事務所耕地課長）
	淵田　正（　〃　開発係長）
	松本安治（　〃　担当者）
地元教育委員会	富永正人（球磨村教育長），大無田正明（同村文化財保護委員長）

報告書作成，平成4年度

調査総括	大塚正信（文化課長）
	隈昭志（教育審議員，文化課課長補佐）
	松崎厚生（文化課課長補佐）
	島津義昭（文化財調査第一係長）
調査担当	木崎康弘（文化財保護主事）
調査事務	木下英治（文化課主幹，経理係長）
	高浜保子（文化課参事）
	相馬治久（文化課参事）
農政関係	守田定伸（球磨事務所耕地課長）
	東　隆義（　〃　開発係長）
	野入正憲（　〃　担当者）
地元教育委員会	池下清一郎（球磨村教育長），大無田正明（同村文化財保護委員長）

調査指導及び協力者

織笠昭（東海大学），亀田直美（早稲田大学），白木原和美・甲元眞之・山下志保（熊本大学），橋昌信（別府大学），宮坂清（下諏訪町教育委員会），山下秀樹（京都文化博物館），山口譲治・杉山富雄・小畑弘己（福岡県教育委員会），松尾吉高（佐賀県大和町教育委員会），下川達弥（長崎県美術博物館），萩原博文（長崎県平戸市教育委員会），新東晃一，長野真一・宮田栄二・富田逸郎（鹿児島県教育委員会），三島格（肥後考古学会長），畠田経久（熊本県国際課），前田志磨江・六田育子（熊本県文化課嘱託），中田弥生・藤原ゆり子（熊本県文化課臨時職員）

第２節　調査の方法と経過

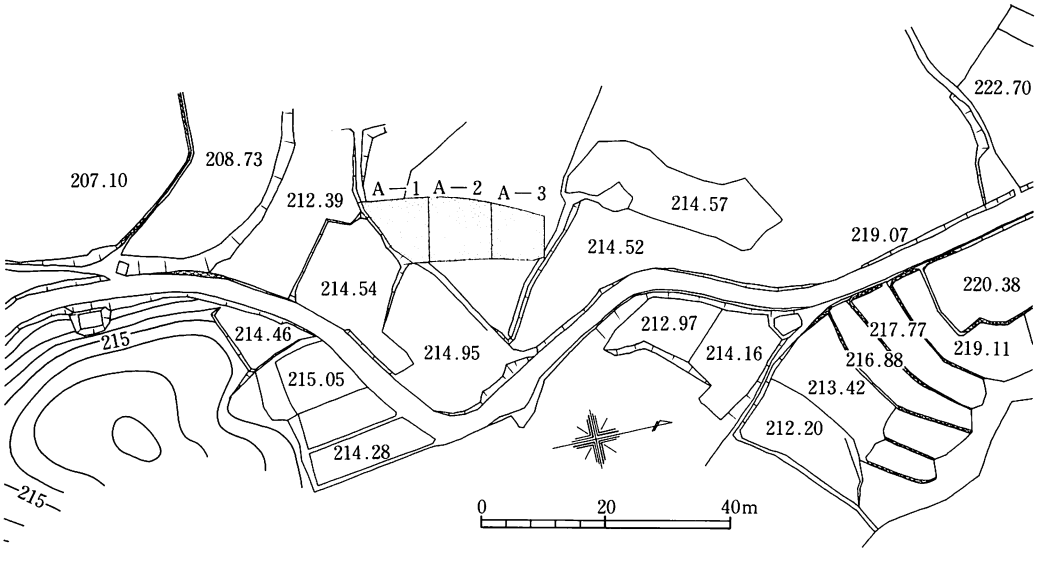
調査は，重機による表土剥ぎ及び調査区の清掃から始めた．その後，実測図や遺物分布図の作成に給するための基準として，グリッド設定をおこなった．グリッドは，10m×10mを一単位に，道路路線にそって調査区を３区に分離した．その名称は，南側よりA-1区・A-2区・A-3区とした（第２図）．

土壙は，平面形や切り合いの状況を考慮しながら確認をおこなった．発掘は，その確認の後に土層の堆積を観察するための土手を残しておこなった．記録は，平面および断面の実測図作成と写真撮影でおこなった．実測図の縮尺は，10分の1 である．集石は，埋め土を除去して石の集積状況を露呈させる作業から開始した．作業が終了すると，引き続いて写真撮影をおこない，また平面形の実測に取りかかった．平面実測終了後は，石を取り除きながらの断面図作成である．集石調査は，下部構造（土坑）の検出とその実測・写真撮影をおこなって終了する．縮尺は，10分の1 である．

包含層は，遺物を残しながら掘り下げをおこなった．アカホヤ火山灰の堆積状況が不安定だったので，層ごとに分けての発掘はおこなえなかった．遺物の取り上げは，出土状態の写真撮影の後，20 分の1 の平面図に地点とレベルを記録しながら，順次おこなっていった．

次に，調査の経過を示していこう．

調査の開始は，３月６日で調査事務所の設置と器材の搬入をおこなった．次の７日には，重機による表土剥ぎ作業をおこなった．この日は，雪が舞う寒い日だった．



第２図　地形図

８日は，調査の作業員の方々を加え，本格的な調査開始の日である．作業手順の概括的な説明の後に，調査区の清掃を始めた．その際に石鏃や石斧などが出土した．10日には，A-2区の掘り下げを始めた．

14日は，A-2区の他，A-3区まで掘り下げ作業を広げた．１号集石の実測と写真撮影，試掘坑の土層観察をおこなった．また、遺物の取り上げも一部おこなった．15日には，さらに発掘区域をA-1区にまで広げた．16日には，中世の土壙も発掘をおこなった．

28日は，調査区の掘り下げを継続した．また，２号・３号集石の写真撮影と実測作業も開始した．29日には，シラス層の除去作業を始め，その際にシラスの直下層から石器類が検出されるようになった．ＡＴ下位の石器文化の検出である．30日もこの層の発掘を継続し，多くの石器類が顔を出した．

調査は，新年度に入ってもしばらくおこなった．４月12日，シラス下の石器文化の検出を進め，また，集石の調査も継続した．18日には，縄文時代の遺物取り上げとシラス下の先土器時代の遺物出土状況の写真撮影をおこない，一部取り上げ作業もおこなった．この取り上げ作業は，次の19日以降に本格化し，25日までおこなった．

調査の終了は，25日である．残務整理として，地層の断面図を作成して，午後に調査区の埋め戻しをおこなった．次の26日に器材撤収，関係機関への挨拶，27日に周辺調査をおこなってすべての予定を終了した．

調査は，３月６日に開始し，その間新年度事務処理のためにしばらくの休止期間もあったが，４月末日に無事終了することができた．その間，シラスの下の層から先土器時代の遺物が出土するなど，その成果は目を見張るものがあり，今後の先土器時代研究に大きく寄与をするものと期待される．

第Ⅱ章　遺 跡 の 概 要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

九州島は，地形上で大きく四つに区分される．それは，福岡県・佐賀県及び長崎県北半の北部山地，大分県・熊本県北半と長崎県南半の中部火山地域，宮崎県・熊本県南半の中部山地，そして鹿児島県を中心とした南部火山地域の４地域である．そして，これらの地域は，それぞれに地形的特徴を異にしている．例えば，北部山地は広い平野部と険しい山地であるし，中部火山地域は阿蘇山や雲仙岳のように活発に活動する火山群と熊本平野，南部火山地域は広いシラス台地と多くの活火山群を擁している．では，ここで報告する久保遺跡が所属する中部山地は，どのような地形的特徴を示しているのであろうか．

中部山地は，九州山地と呼ばれ，祖母山・国見山・市房山などの1,700ｍ級の山々が連なる高山地帯である．平野部は狭く，西の不知火海沿岸や東の太平洋岸，そして山地内に大きく口を開く人吉盆地にあるのみである．従って中部山地は，1,700ｍ級から０ｍまでという激しい高低差があり，しかも高山地帯の山間をぬうように大小の川が流れて谷を作るなど，極めて起伏に富んだ地形をしていることになる．そうした山間を流れる川の一つに，球磨川がある．日本三急流に数えられるほどに流れの速い川である．

球磨川は，人吉盆地を東西に貫流すると，急激に流れを北にかえ，中部山地の谷間を蛇行しながら不知火海へと注ぎ込んでいる．その間の支流は80本を数え，流域面積は1,880㎡に及んで熊本県総面積の25％を占めている．まさに熊本県最大規模の河川であるが，人吉盆地での地形の広がりの中心もなしている．それは，球磨川を中心にしての沖積地→台地・丘陵地→山地という展開である．沖積地，台地・丘陵地，山地ごとに概観してみよう．

沖積地は，球磨川とその支流の流路にそってみられ，特に中球磨と呼ばれる人吉盆地の中央部で広く発達している．台地・丘陵地は，その広さからも人吉盆地の中心をなしているが，やはり盆地の中央部でよく発達している．しかし，球磨川の北と南とでは，その地形的な特徴に違いが認められ，生成の違いを伺わせる．その違いとは，球磨川の南岸が白髪岳を初めとする九州山地の麓に形成された複合扇状地一色であるのに対して，北岸は球磨川の支流川辺川によって作られた扇状地と共に，阿蘇溶結凝灰岩や入戸火砕流を基盤とする丘陵部がその両側に広がる，という点である．換言すれば，とても平坦な南岸に対して起伏に富んだ北岸と，その特徴を表現することができよう．

次に，山地に目を移そう．球磨・人吉地方は，人吉盆地とその周りに広がる山地を含む範囲

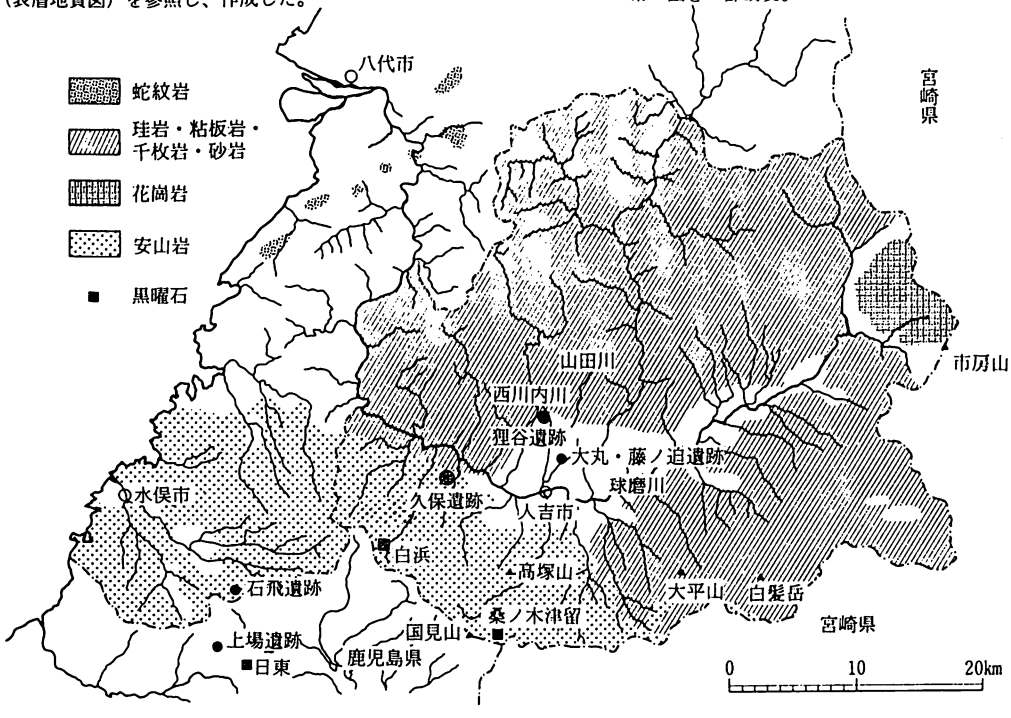
である．しかも，その山地は，盆地の平坦部とは比較にならないほど広く，そこには多くの種類の岩石・岩層がみられる．石器時代にあっては，道具の中心が石器であり，その石材が球磨・人吉で産するものなのかそうではないのかは，とても重要な問題である．そこで，山地における岩石・岩層の分布をみてみることにしたい．

黒曜石は，人吉市桑ノ木津留と球磨村の白浜で産出が知られている．桑ノ木津留のものは，ほとんど気泡を含まず，飴色で透明感がある，とても良質な黒曜石である．原石は，小さい．白浜例は，気泡の粒子を多く含んで，表面がザラついた黒曜石である．よく似たものに大口市日東産があるが，白浜産のほうが黒みが強くて光沢をもっている．チャートは，人吉盆地の北側山地に岩脈がある．入手は容易で，北側の山地を流れる河川や川辺川の扇状地の礫層中でも多くみつけることができる．また，安山岩も入手が容易で，盆地南西に広がる山地の表層をなしており，河川には多くの転石がみられる．この他，砂岩・千枚岩・花崗岩も山地中にみられる石で，石器石材に利用されている．

このように，球磨・人吉地方の山地には，多種多様な岩石の産出地があり，石器石材の入手にはとても便利な地域であったことがわかる（第３図）．

熊本県発行の「球磨川流域地域環境利用ガイド」（表層地質図）を参照し、作成した。

熊本県文化財調査報告第90集『狸谷遺跡』所収の第２図を一部改変。



第３図　球磨川流域の石器石材分布

2　歴史的環境

（１）先土器時代

球磨・人吉地方の先土器時代遺跡は，今日までに42箇所が確認されている．その所属時期は，ナイフ形石器文化以前２遺跡（深田村中里遺跡他），ナイフ形石器文化27遺跡，細石器文化12跡，不明６遺跡である．ただし，多くの遺跡が表面採集によって確認されているもので，その内容を具体的に知ることはできない．

ナイフ形石器文化の中でもっとも古い石器文化では，山江村狸谷遺跡で見つかった狸谷Ｉ石器文化が有名である（木崎・隈1987）．ナイフ形石器，掻器，削器，抉入石器，彫器，磨石・敲石等の多くの石器が出土した．この石器文化は，その出土層位からみて入戸火砕流直下に出土位置があり，姶良Tn火山灰降灰（以後，ＡＴとする）直前の段階とすることができる．今回報告する久保遺跡でもこの時期に相当する石器文化が見つかっているので，ＡＴ直前の様相を知る上で貴重な資料を提供したことになる．

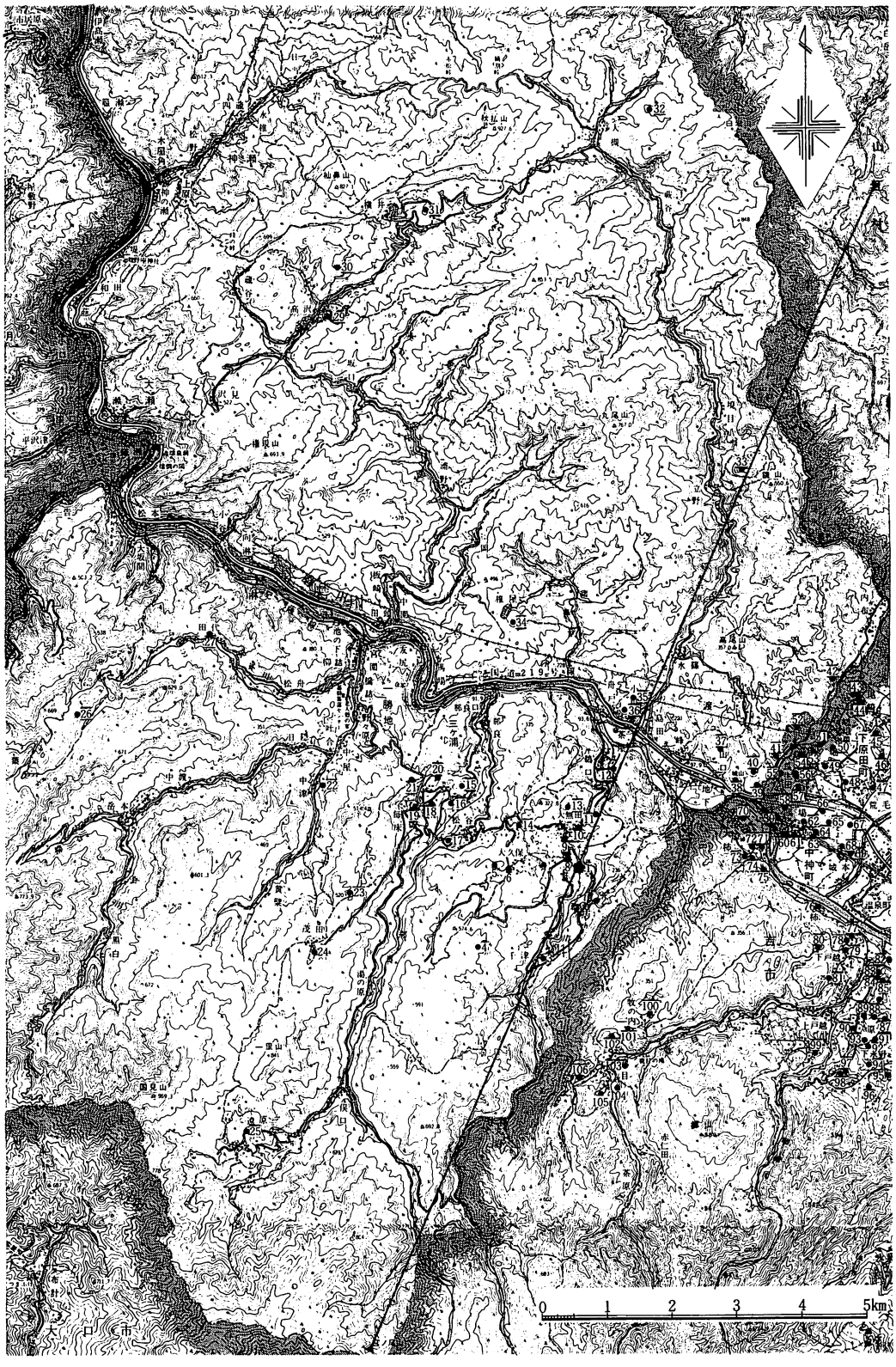
ＡＴ以後のナイフ形石器文化は，残念ながら久保遺跡でみつけることはできなかった．また，周辺の遺跡を遺跡分布図・地名表で提示することもできなかった．ただ，少し広げて概観すれば，幾つかの遺跡を拾うことができる．久保遺跡の近くを流れる鵜川の最上流にある人吉市鵜川Ｂ遺跡では黒曜石製の剥片尖頭器が採集されている．人吉市白鳥平遺跡でも剥片尖頭器や三稜尖頭器が発掘されている．同じく人吉市天道ケ尾遺跡，同市鼓ケ峰遺跡，同市村山・闇谷遺跡，山江村大丸・藤ノ迫遺跡，狸谷遺跡でも関係する石器文化が検出されている．

久保遺跡では，細石器文化関係の遺物が表面採集されている．発掘調査でその石器文化の出土層位などを明らかにすることはできなかったが，採集された細石核や細刃器は，久保遺跡の中に細石器文化があったことを証明するものである．遺跡の周辺では，人吉市高山遺跡（81）で，細石核と細刃器が表面採集されている．

（２）縄文時代

久保遺跡では，早期，前期及び後期に属すると考えられる遺物が出土した．しかし，その出土点数は，少ない．また，久保遺跡が所在する球磨村の遺跡は，そのほとんどが縄文時代遺跡である．

早期の遺跡では，球磨村大瀬洞穴遺跡（28）と同村高沢洞穴遺跡（29）が有名である．いずれも石灰岩地帯にある鍾乳洞が住居に利用されたものであり，骨や貝殻などの保存に適した条件を備えている．大瀬洞穴では学術調査が実施され，鹿の骨の他，アワビ・ハマグリなどの海の貝殻が発掘されている．また，高沢洞穴遺跡でも正式な調査がおこなわれていないが，鹿の骨とともにハマグリの貝殻がみつかっている．この二つの洞穴から海との関係を示唆する貝殻が出土したことは，縄文時代早期の社会を探る上でとても重要である．この他，人吉市三日ケ



第４図　遺跡分布図

第1表　遺跡地名図

番号	遺跡名	所在地	時代
1	久保	球磨郡球磨村三ケ浦久保	先・縄・中
2	梅木鶴	〃　〃　〃　梅木鶴	縄
3	千津	〃　〃　〃　千津	縄
4	上の千津	〃　〃　〃　上の千津	縄
5	松谷	〃　〃　〃　松谷	縄
6	大久保	〃　〃　〃　大久保	縄
7	久保	〃　〃　〃　久保	縄
8	片城	〃　〃　〃　片城	縄
9	宮の前	〃　〃　〃　宮の前	縄
10	大無田	〃　〃　〃　大無田	縄
11	タブノキ	〃　〃　〃　タブノキ	縄
12	鵜口	〃　〃　〃　鵜口	縄
13	永迫	〃　〃　〃　永迫	縄
14	佐渡野	〃　〃　〃　佐渡野	縄
15	立山	〃　〃　〃　立山	縄
16	迎	〃　〃　〃　迎	縄
17	山神	〃　〃　〃　山神	縄
18	堂山	〃　〃　〃　堂山	縄
19	堂山古墳	〃　〃　〃　〃	古墳
20	夏桐	〃　〃　〃　夏桐	縄
21	西目	〃　〃　〃　西目	縄
22	中津	〃　〃　一勝地中津	中世
23	サキッチョ	〃　〃　〃　茂田	縄
24	茂田	〃　〃　〃　茂田	縄
25	遠原	〃　〃　三ケ浦遠原	縄
26	譲葉	〃　〃　一勝地譲葉	縄
27	一勝地窯跡	〃　〃　〃　田代	近世
28	大瀬洞穴	〃　〃　大瀬大瀬川	縄早
29	高沢洞穴	〃　〃　神瀬高沢	縄早
30	高沢窯跡	〃　〃　〃　〃	近世
31	横井	〃　〃　〃　横井	縄
32	大槻	〃　〃　〃　大槻	縄
33	立野	〃　〃　渡立野	縄
34	椎屋	〃　〃　〃椎屋	縄
35	小川1	〃　〃　〃小川	縄
36	小川2	〃　〃　〃〃	縄
37	近江原	〃　〃　〃近江原	縄晩
38	渡利城跡	〃　〃　〃城山	中世
39		〃　〃　〃	縄
40		〃　〃　〃	縄
41		〃　〃　〃	縄
42	原田城跡	〃　〃　〃西門	中世
43	尾崎	人吉市上原田町尾崎	縄
44	清来寺	〃　〃　清来寺	縄
45	天宝	〃　〃　天宝	縄
46	八王子	〃　〃　八王寺	縄
47	馬場平	〃　下原田町馬場平	縄
48	荒毛	〃　〃　小国・角ノ前	弥・古墳
49	堀	〃　〃　堀・久保園	縄
50	野間	〃　〃　野間	縄
51	山仁田	〃　〃　山仁田	縄
52	原田城跡	〃　〃　栗ノ平	中世
53	井龍	〃　〃　井龍	縄
54	西門	人吉市下原田町西園・西ノ前	縄
55	西ノ前	〃　〃　西ノ前	縄
56	アンモン山	〃　〃　高千穂	縄晩・古墳
57	若宮	〃　〃　若宮	縄
58	瓜生田	〃　〃　瓜生田平草	縄
59	別府	〃　中神町別府	縄・弥
60	久保横穴群	〃　〃　八久保	古墳
61	石坂	〃　〃　石坂	縄
62	段	〃　〃　段	縄
63	中原横穴群	〃　〃　大木	古墳
64	平田	〃　〃　平田	古墳
65	上ノ段	〃　〃　上ノ段	縄
66	無田原	〃　〃　無田原	縄
67	山王	〃　〃　山王	縄
68	石原	〃　〃　石原	縄
69	桜ノ前	〃　〃　桜ノ前	縄
70	八龍	〃　〃　大柿八龍	縄
71	宮本A	〃　〃　〃　宮本	縄
72	寺田	〃　〃　〃　寺田	縄
73	宮本B	〃　〃　〃　宮本	縄
74	大谷	〃　〃　〃　大谷	縄
75	湯ノ谷	〃　〃　〃　湯の谷	縄
76	中堂	〃　〃　中堂	縄後・晩
77	三日ケ原	〃　下戸越町三日ケ原	縄早・後
78	三日ケ原城跡	〃　〃　〃	中世
79	今村	〃　〃　今村	縄
80	中尾	〃　〃　中尾	先？縄？
81	高山	〃　〃　高山	先・縄
82	唐渡神横穴群	〃　〃　唐渡神	古墳
83	内ノ原横穴群	〃　〃　内ノ原	古墳
84	内ノ原B	〃　〃　〃	縄早
85	内ノ原A	〃　〃　〃	縄
86	高栗栖	〃　〃　高栗栖	縄
87	瓜生迫	〃　下永野町瓜生迫	縄
88	永葉	〃　上戸越町永葉	縄早・晩
89	戸越城跡	〃　下戸越町古城	中世
90	大原	〃　上戸越町大原	先・縄
91	門木	〃　下永野町門木	縄・中世
92	東耳取C	〃　〃　東耳取	縄・中世
93	耳取	〃　〃　〃	縄
94	東耳取B	〃　〃　〃	縄
95	文珠の前	〃　〃　文珠の前	弥
96	斧研	〃　〃　斧研	縄
97	東耳取A	〃　〃　東耳取	縄
98	八峰	〃　〃　八峰	縄前
99	笹淵	〃　上戸越町笹淵	縄
100	棚平	〃　中神町棚平	縄　曽畑式
101	新地ノ下	〃　鹿目町新地ノ下	縄・弥
102	橋本	〃　〃　橋本	縄
103	野田大野	〃　〃　野田・大野	縄
104	鹿ノ中園	〃　〃　鹿ノ中園	縄
105	元屋敷	〃　〃　元屋敷	縄
106	鹿ノ中尾	〃　〃　鹿ノ中尾	縄

原遺跡（77），内の原Ｂ遺跡（84），永葉遺跡（88）で押型文土器が採集されている．前期では，人吉市八峰遺跡で块状耳飾りが採集されている．伴出土器は，轟式土器が予想される．曽畑式土器は，人吉市棚平遺跡（100)で採集されている．中期の遺跡は，はっきりしない．後期では，人吉市中堂遺跡（76）がある．辛川式土器，三万田式土器，天城式土器の時期の集落遺跡として著名である．なお，この遺跡では晩期になっても集落は継続し，古閑式土器や黒川式土器の住居跡も発見されている．主な出土遺物では，十字形石器や円盤状石器など後期末から晩期にかけての特徴的な石器，長崎翡翠製の玉類，及び生業関係の石錘（漁業）や打製石斧がみつかっている．この遺跡に関係するといえば，十字形石器や打製石斧が採集されている人吉市三日ケ原遺跡がある．晩期では，上記した中堂遺跡の他，人吉市アンモン山遺跡（56）がある（椎葉・松舟ほか1985）．黒川式土器のほぼ単純な遺跡で，打製石斧も発掘されている．また，球磨村近江原遺跡（37）では，石刀の柄の部分が採集されている．

（３）弥生時代

球磨村では弥生時代の遺跡が見つかってはいないが，近隣の人吉市荒毛遺跡（48）では，中期初め頃の城ノ越式土器や後期のＶ字溝が発掘されていると共に，多数の重弧文土器が採集されている．また，球磨村近くの人吉市八王寺遺跡（46），別府遺跡（59），湯ノ谷遺跡（75）でも，時期不明であるが弥生式土器の出土が知られている．このことからすると，人吉市に近い渡周辺でこの時代の遺跡が発見される可能性は，立地条件との絡みでも相当に高いと判断される．また，球磨村の山地部でも，人吉市や五木村の山地部から弥生式土器が出土しているので，今後の調査如何によっては遺跡確認が期待される．

（４）古墳時代

球磨・人吉地方の中で大型の古墳は，錦町や免田町など中球磨に集中し，その縁辺部には小型の古墳が目立っている．球磨村にもその１例として堂山古墳（19）がある．また，荒毛遺跡では地下式板石積石室墓群が発掘されていて，多量の鉄製武器が検出されている．また，人吉市には，八久保横穴群（60），中原横穴群（63），唐渡神横穴群（82），内ノ原横穴群（83）もある．

集落遺跡としては，アンモン山遺跡で６世紀に属する竪穴式住居跡が２基発見されている．南九州系統の成川式土器を伴うもので，当時の文化基盤を考える上で貴重な資料となっている．また，人吉市平田遺跡（64）でも土師器が採集されており，集落跡の可能性が高い．

（５）歴史時代

古代における球磨・人吉地方の中心地域は，依然として盆地中央部にあったと考えられる．このことは，須恵器や瓦の古窯跡（高山古窯跡・下り山古窯跡など），古瓦出土遺跡（久鹿寺田遺跡），蔵骨器出土遺跡などが多くこの地域に分布していることからもわかる．ただ，時代が下るに従って人吉市周辺も中心地域の一つに成長していったことは，中世の段階で重要地域

一つになっていることからもわかる．ただ，それがどの時期なのかは，まだまだ資料不足のため言及できない．

球磨村の当時の状況についても，まったく資料が無くて不明である．ただし，鎌倉時代初期1191年（建久２）に，平川師高が「所領譲状案」を作成していて，その中に村内の地域名が記されている．「渡之村」「尾瀬之村」「高野瀬之村」がそれで，「渡」「大瀬」「神瀬」にそれぞれ対応できそうである．この文書は，相良氏の入国以前の年代であり，鎌倉時代以前の状況を暗示する資料として極めて貴重である．

この文書は，師高からその嫡子師貞に譲渡する目録であり，各地域の石高などが明記されている．それには，「渡之村」は「田地五町十九石九貫」，「尾瀬之村」は「さつし十束・くす五升・いた五十」，「高野瀬之村」は「さつし廿束・あつかミ三帖・いた百・くす五升」と記されている．渡では狭いながらも水田経営が行われていたのに対して，大瀬や神瀬では山での生産物が年貢の対象となっている．当時の生産の状況を暗示するものでもあり，さらに古い奈良・平安時代への投影ができそうな資料である．古代の遺跡を検出すると同時に，立地と生産活動とを関係づける作業が必要である．

なお，球磨村一勝地の阿蘇神社の御神体が海獣葡萄鏡があったということが言われている．現在では見ることができないが，事実とするならばその出自が問題となろう．

久保遺跡では，中世の遺構と遺物が検出されていて，大無田地区に当時の集落の存在が予想される．また，遺跡の周辺にも中世の遺跡がある．中世城がそれで，球磨村では人吉市との境にある渡利城跡（38），人吉市では原田城跡（52），三日ケ原城跡（78），戸越城跡（89）がある．また，滑石製の石鍋が採集されている球磨村中津遺跡（22）も重要である．

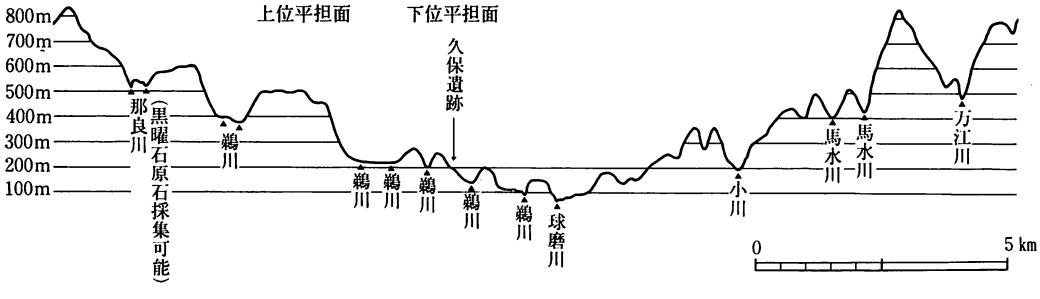
第２節　遺跡の概要

遺跡は，熊本県球磨郡球磨村大字三ケ浦字久保に所在する．盆地の西端のくびれ部近くの球磨川左岸の起伏に富んだ丘陵上（第１図）にあり，球磨川の支流である鵜川左岸の丘陵に立地している．標高は，210m～220mを測る．

宮尾山（877．１）や国見山（969.３）など鹿児島県との県境の山々は，急激に標高を下げながら球磨川へと多くの支脈をのばしている．その一つで，盆地の西端くびれ部へのびる支脈には，標高を違える二つの平坦面が造られている．600m～500m（仮称，上位平坦面）と400m～200m（仮称，下位平坦面）の部分である（第５図）．この二つの平坦面は，太古の昔から人間の生活舞台として利用されていたようで，幾つかの縄文時代遺跡が確認されている．例えば，上位平坦面に立地する上の千津遺跡であり，大無田地区の下位平坦面に立地する遺跡群である．今後の遺跡研究で立地を問題とする際の恰好なモデルとなろう．

久保遺跡は，下位平坦面にある大無田地区の遺跡群の一つである．丘陵上の立地場所は，下位平坦面の先端部で鵜川に面した丘陵の縁にある．周辺は比較的急な傾斜地で，縦断勾配は下りの27.5％で傾斜角は15°を測る．遺跡の立地から察するかぎり，大規模な集落遺跡の存在を予想するのは不可能であろう．

調査では，先土器時代と縄文時代と中世の資料が見つかった．先土器時代の資料は，ＡＴ下位のナイフ形石器文化と上位の細石器文化関係である．下位のナイフ形石器文化の資料は，県下での調査例が阿蘇郡小国町下城遺跡・下益城郡松橋町曲野遺跡・球磨郡山江村狸谷遺跡のみという現状から，相当に高い価値を持っていると思われる．細石器文化関係の資料は数点だったが，調査地点以外の箇所に中心があるのかもしれない．縄文時代の資料も少ない．層の堆積が未発達なため，アカホヤ火山灰との関係で早期と前期・後期を層的に分離することができていない．ただ，早期の面から集石が確認されており，早期の集落としては安定していたことを伺わせた．中世では墓が調査対象であった．その墓壙の数からすると，墓場のほんの一部を調査したにすぎないが，大無田集落の成立を考える上では貴重な資料となろう．



第５図　地形断面図

第３節　遺跡の層位と包含層

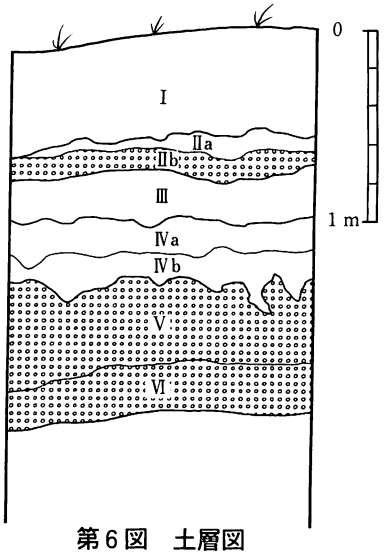
遺跡では，姶良カルデラ給源の入戸火砕流（シラス）をⅤ層として，６枚の土層が確認された．以下，各層ごとに説明していく．

第Ⅰ層　表土層（耕作土）

この層の下には，本来ならば中世の遺構埋土の中心をなす黒色土があるはずであるが，調査地点ではその堆積を認めることはできなかった．

第Ⅱ層　黄褐色土層

アカホヤ火山灰である．層の状態によって二つの亜層に分けることができる．ⅡａとⅡｂである．



第６図　土層図

Ⅱａ層は，アカホヤ火山灰が二次的に堆積した層である．粒子は細かくてサラサラでしまりがない．層の残りは悪くて，ブロック状に広がっていた．縄文時代前期と後期の包含層である．

Ⅱｂ層は，アカホヤ火山灰の一次堆積層である．粒子が細かくて密であるために，層自体は非常に硬くしまっている．遺物の上下移動に伴って縄文時代の遺物が入り込んでいるが，基本的には無遺物層である．

第Ⅲ層　黒褐色土層

縄文時代早期の遺物の包含層である．しまりがあって粒子も細かい．調査区全域に分布が認められた．

第Ⅳ層　褐色土層

シラスが土壌化して，再堆積した層で，わずかに粘性を帯びている．この層の上部が細石器文化の包含層に相当しようが，調査区では遺物を検出することはできなかった．土壌化が進んだⅣａ層とそれほど進んでいないⅣｂ層に分層される．

第Ⅴ層　黄色火山灰層

入戸火砕流（シラス）の二次堆積層である．粒子が荒いが均質で，極めて硬くしまっている．無遺物層である．

第Ⅵ層　暗褐色粘質土層

人吉盆地では，入戸火砕流の直下に例外無く認められる層である．粒子は細かいが，砂粒を多く含んでいる．ナイフ形石器文化の包含層である．下部へいくにしたがい，安山岩の大小さまざまな角礫が多くなっていく．

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　先土器時代の遺物

１　久保Ⅰ石器文化の遺物

久保Ⅰ石器文化の遺物は，第Ⅵ層（暗褐色粘質土）に包含されていた．この層は，前章でものべているように入戸火砕流（第Ⅴ層）の下にあるので，この石器文化を表現する時，先土器時代研究の特別の言い回しからすると「ＡＴ下位の石器文化」ということになる．

出土位置を示す遺物分布は，調査段階で作成されていた図面の行方がわからなくなっているために，今回の報告では提出することができなかった．これについては，後日，図面の行方がわかりしだい早急に公にしたい．その際には，遺物整理作業で石材の固体別分類もおこなっているので，その資料も併せて提出したいと思う．

【石器組成】

出土した遺物は，すべて石器関係の資料であり，その総数は417点を数える（第２表）．内訳は，ナイフ形石器20点，掻器１点，削器１点，抉入石器４点，彫器１点，敲石１点，二次加工ある不定形石器２点，使用痕ある剥片18点，石核９点，剥片・砕片360点である．石材は，チャート125点，黒曜石264点，頁岩17点，安山岩８点，砂岩３点である．

【ナイフ形石器】（第７図）

ナイフ形石器は，20点出土している．石材ごとの内訳は，黒曜石11点，チャート９点であった．石器分類に耐えうるだけの資料点数ではないので，久保Ⅰ石器文化によく類似している狸谷Ⅰ石器文化の分類基準（木崎・隈1987）にあてはめて整理してみよう．

第２表　久保Ⅰ石器文化石器組成表

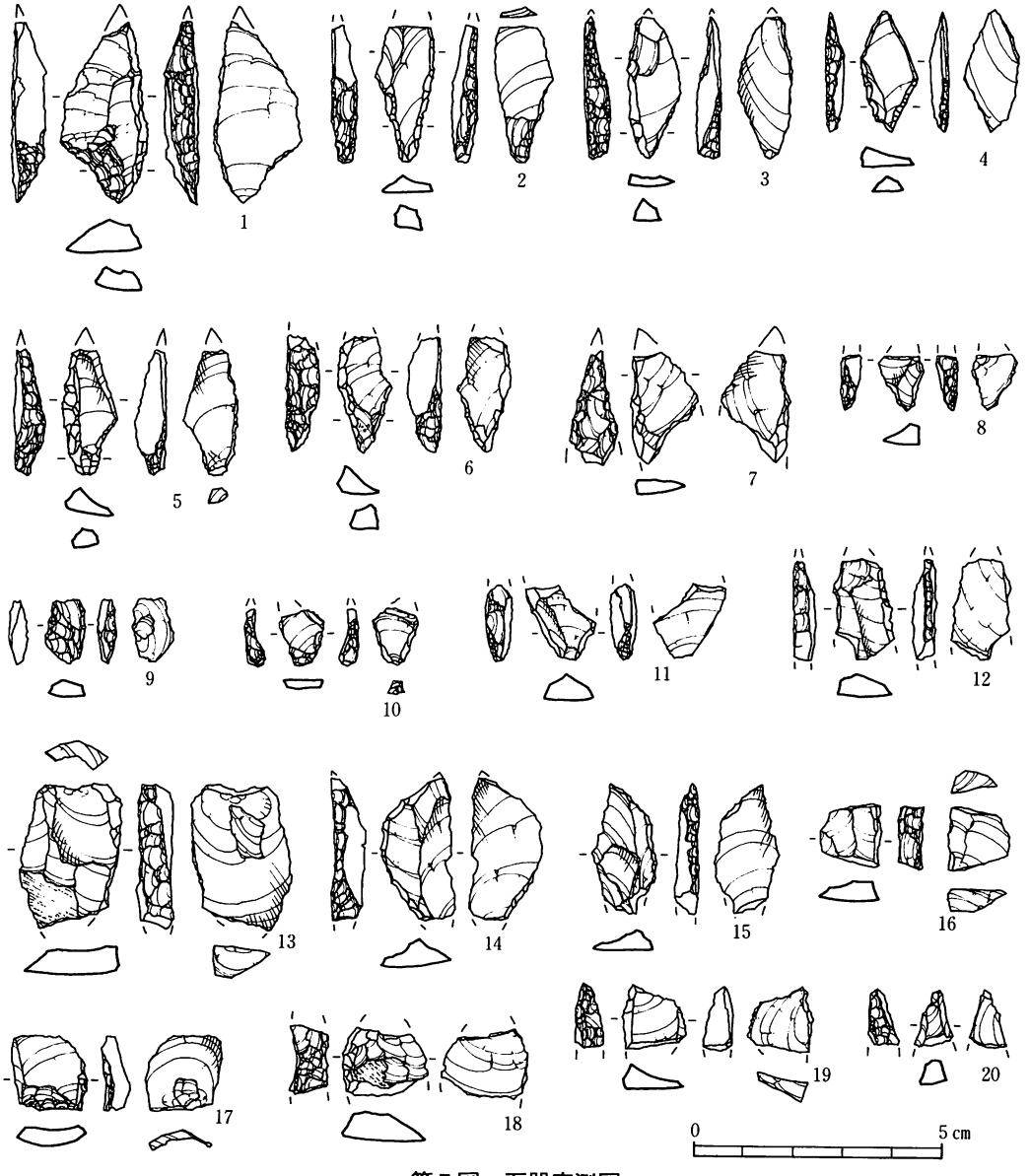
器種	計（％）	チャート	黒曜石	安山岩	砂岩	頁岩
ナイフ形石器	20 (42)	9 (45)	11 (55)	——	——	——
掻器	1 (2)	——	1 (100)	——	——	——
削器	1 (2)		1 (100)	——	——	——
彫器	1 (2)	——	——	——	——	1 (100)
抉入石器	4 (8)	2 (50)	1 (25)	——	——	1 (25)
敲石	1 (2)	——	——	——	1 (100)	——
二次加工ある不定型石器	2 (4)	1 (50)	1 (50)	——	——	——
使用痕ある剥片	18 (38)	5 (28)	10 (55.5)	——	1 (5.5)	2 (11)
石器総計	48 (12)	17 (35.5)	25 (52)		2 (4)	4 (8.5)
石核	9 (2)	——	6 (67)	——	1 (11)	2 (22)
剥片・砕片	360 (86)	108 (30)	233 (65)	8 (2)	——	11 (3)
総計	417	125 (30)	264 (63.3)	8 (2)	3 (0.7)	17 (4)

第１類（１～12）

第１類のナイフ形石器は，石器本体の二側縁に刃潰し加工が施されるものである．資料点数は12点で，さらに石器の平面形態の特徴によってａ～ｃの三つに細分される．

１ａ類（１～８）は，茂呂（九州）型と呼称されるナイフ形石器である．石器の形状は，片側縁か両側縁が丸みをもった柳葉形を基本にして，やや幅広のもの（１・７）と細身のものがある．

１ｂ類（10・12）は，切出し状に近い形状をとるものである．台形石器に似た小振りのものと12のように大振りのものがある



第７図　石器実測図

１ｃ類（９）は，狸谷Ⅰ石器文化のナイフ形石器形態組成に無い類型で，台形石器と呼ばれるものに相当する．両側縁の加工は，左側縁が刃潰し加工で，右側縁が平坦加工である．

第２類（13～19）

第２類は、一つの側縁ないし縁辺の一部に刃潰し加工が施されたナイフ形石器である．資料点数は７点で，加工の量や部位によってａとｂの二つに細分される．

１ａ類（13～16・18・19）は，側縁全体にわたって加工がみられるナイフ形石器である．側縁の状態には二様あり，ほぼ直線をとるもの(13・16・19)と曲線的なもの(14・15・18)がある．また，14や15のように先端を尖らせたもの（14・15）とそうではないもの（13・19）とがある．

２ｂ類（17）は，素材となる縁辺の一部に加工があるナイフ形石器である．資料は，17の１点のみで，剥片の左縁辺頭部側に細かい加工が観察されている．

所属不明のナイフ形石器片（11・20）

11のナイフ形石器は，基部の資料である．基部の両側縁に加工がみられることから，第１類に属する可能性が高い．20のナイフ形石器は，先端部のみの資料であり，全体像はわからない．ただし，素材となる剥片は小型の横長剥片であり，特徴から判断すれば第２類のどれかに属するかもしれない．

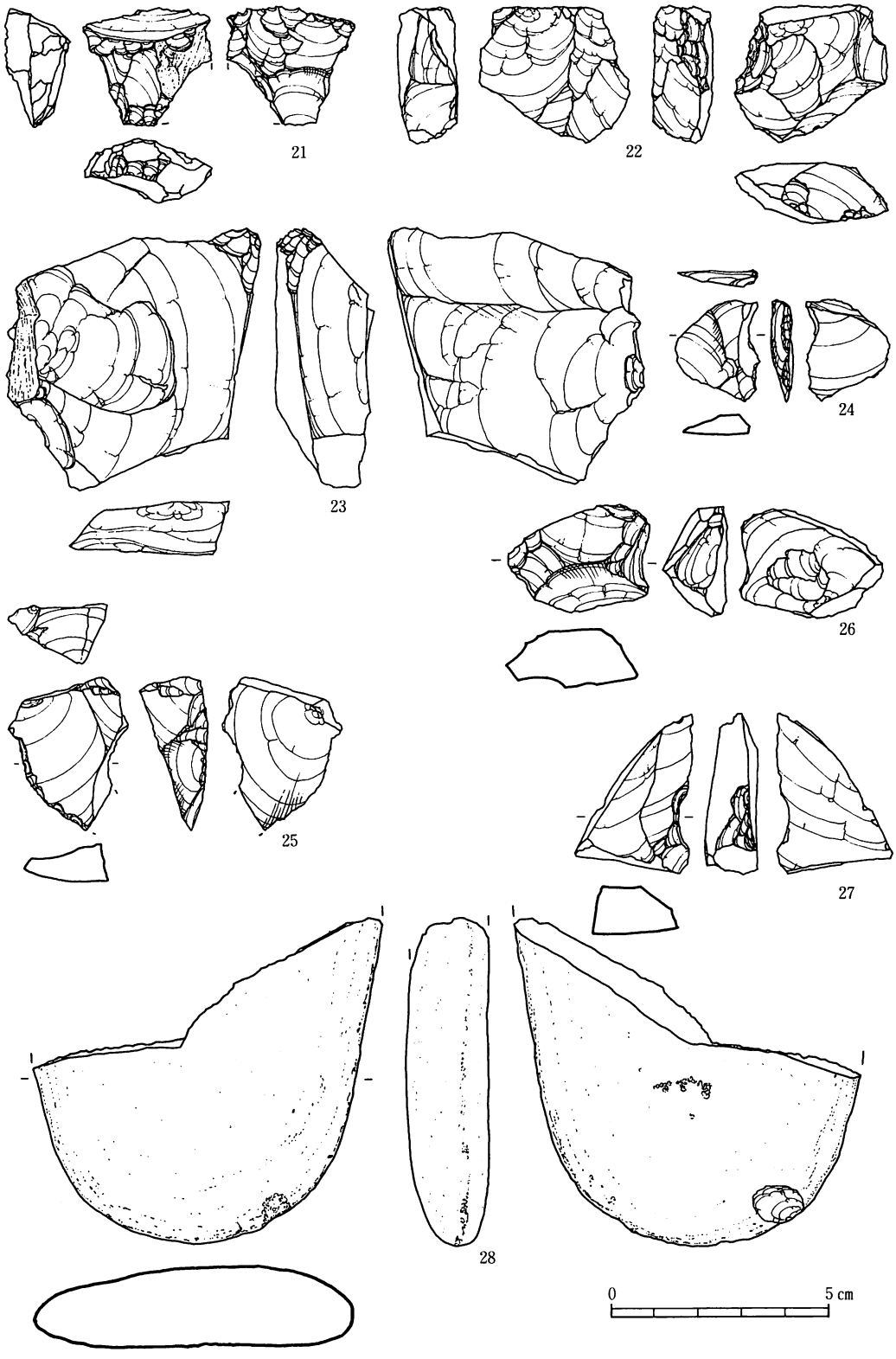
ナイフ形石器の製作

ナイフ形石器の製作について考えるだけの資料数がないため，久保遺跡での特徴を把握することはできない．従って，狸谷Ⅰとの比較を中心にして考えていきたい．

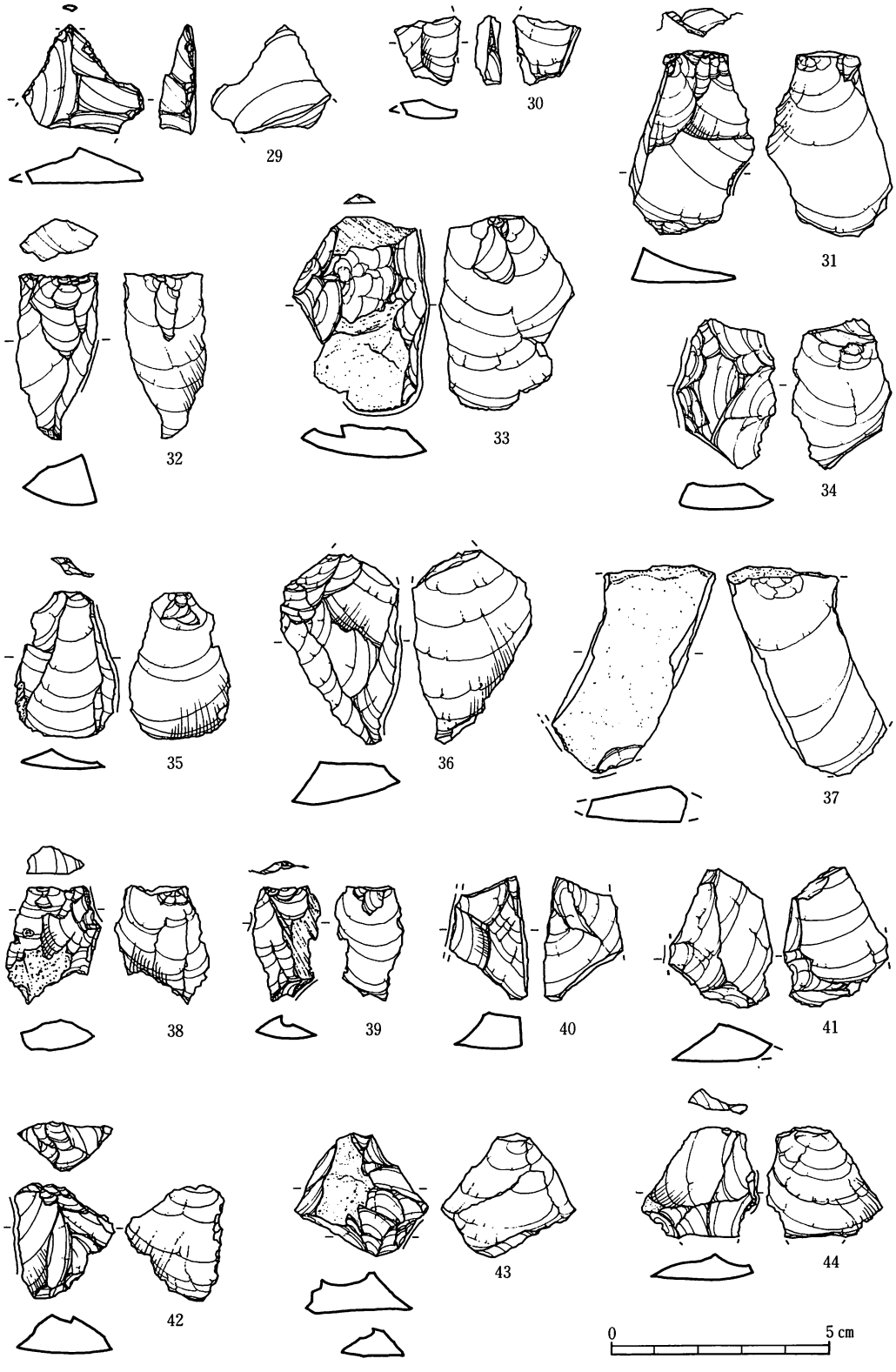
久保遺跡の第１ａ類ナイフ形石器の素材は，横長剥片１点（７）で，他はすべて縦長剥片である．ただし，縦長剥片では，刃器状剥片（２）は少なくて，寸詰まりで幅広の形状をとるものが多い．表面の剥離方向と裏面との関係では，同一方向のもの６点（１～３・５・７・８），対向するもの１点（４），45°の角度をもつもの１点（６）がある．

石器本体での剥片の打面の位置は，下位のもの３点（打面残置１例）（１・２・５），側縁上部左位２点（３・４），同右位１点（８），側縁中部左位１点（７），側縁下部左位１点（６）である．このことを石器と剥片の主軸の位置関係という観点から整理してみると，主軸どうしがほぼ重なるもの３点，やや傾斜するもの４点，直行するもの１点という素材利用の傾向が明らかとなる．

上記した傾向を観点別に狸谷Ⅰと比較してみよう．狸谷Ⅰの素材形状は，縦長剥片，しかも寸詰まりで横広の剥片が主で，横長剥片や刃器状剥片のものは少ない．久保遺跡と同様の傾向である．また石器と剥片の主軸の位置関係では，直行するものが少なく，重なるものがやや傾斜するものよりも多いとは言え，ほぼ同じ比率を占めている．これも久保遺跡と類似した傾向である．要するに，久保遺跡例と狸谷Ⅰとのナイフ形石器第１ａ類は，よく似た製作方法をとっているのである．



第８図　石器実測図



第９図　石器実測図

なお，１ｂ類と１ｃ類は，数が少なくて分析に耐えうる資料ではないので，詳細な検討は差し控えたい．また，第２類も同様の理由で検討から除外した．

【掻器】（第８図21）

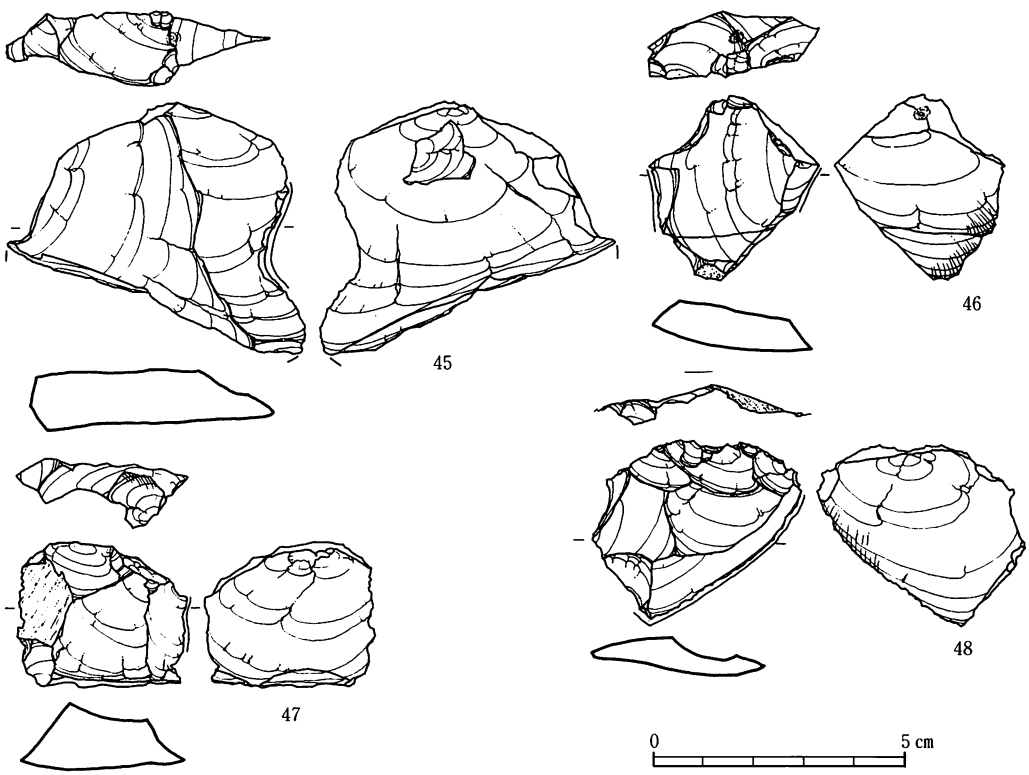
出土した掻器は，石核を転用した例である．刃部右側を欠損している．直線的な刃部を持ち，調整加工は側縁の一部から刃部にかけて観察される．出土点数は１点で，石器組成に占める割合は，２％である．

【削器】（第８図22）

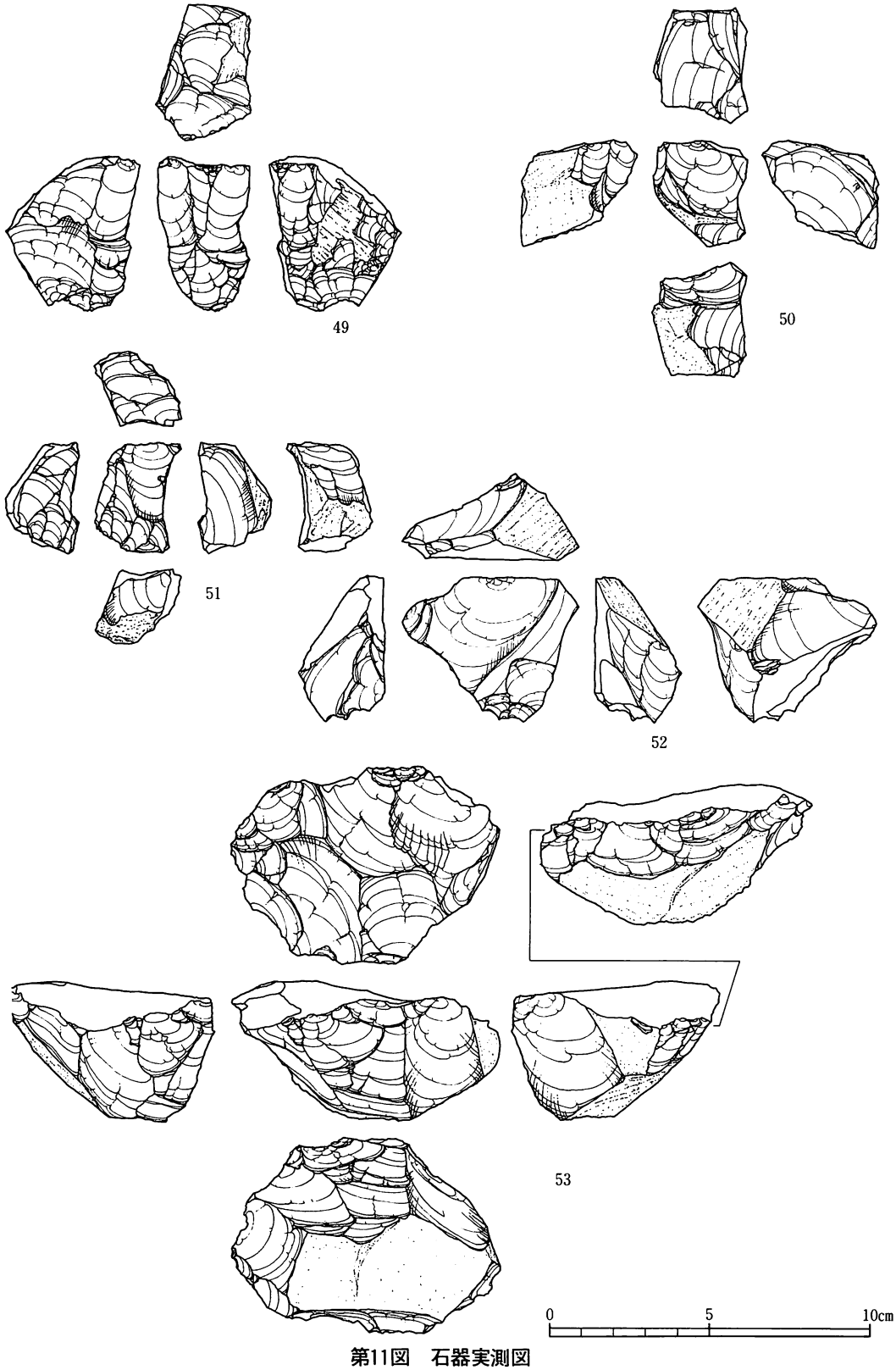
石核を転用した石器である．剥片を素材とした石核の裏面に急斜な調整加工をほどこしている．火を受けている．出土点数は１点で，石器組成に占める割合は，２％である．

【抉入石器】（第８図24～27）

剥片の縁辺の一部に抉入部を作って刃部とした石器である．４点出土している．石器組成に占める割合は，８％である．細かい剥離によって抉りをいれた例（24・27）と大きな剥離で加工した例(26・25）がある．また，25のように刃こぼれのある縁辺を併せ持つ例もある．抉入部の半径は，0.65cm，0.75cm，0.8cm，0.9cmである．



第10図　石器実測図



第11図　石器実測図

【彫器】（第8図23）

1点出土している．石器組成に占める割合は，2％である．大型で分厚く，寸詰まりで横広の縦長剥片を素材としている．剥片の打面を横位置に置き，その先端部を折り取って両側に角を作りだす．そして，その先端部左角の裏面側に5条の樋状剥離を加えて彫刀面を作り出している．彫刀面作出のための加撃打面は，剥片表面の剥離面である．

【敲石】（第8図28）

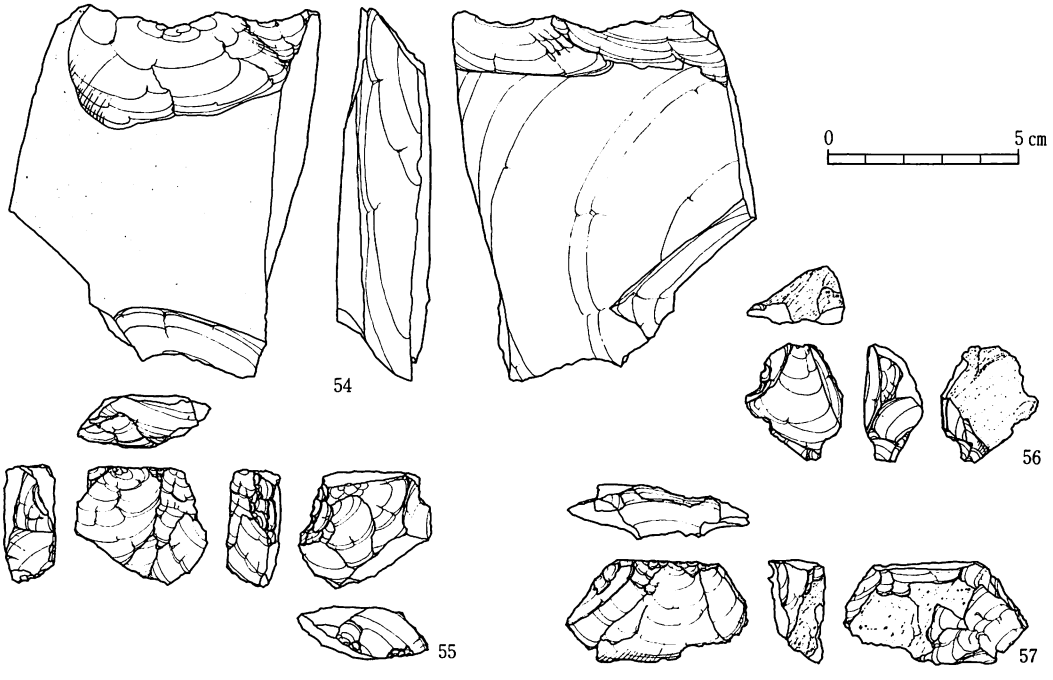
1点が出土した．石器組成の中では2％を占めている．楕円形の砂岩製円礫を使い，その縁辺および片側の面に敲打痕が観察されている．ただし，それほど激しい潰れの状態は，認められない．

【二次加工ある不定形石器】（第9図29・30）

久保遺跡で発見された石器の中には，これまで見てきたような定まった調整加工を持つ石器の他に，剥片の一部に連続しない二次加工が観察される石器がある．それを二次加工ある不定形石器として報告する．関係資料は2点で，石器組成中の4％を占めている．29は，揉錐器に分類できるかもしれないが，調整加工がそれほど連続もしないし顕著でもないためこの場で取り扱っている．30は，剥片の右側縁に調整加工が観察される．

【使用痕ある剥片】（第9図31～第10図48）

久保遺跡では，縁辺の一部に刃こぼれ状の微細な剥落が観察される剥片がある．これらを使用痕ある剥片として提示する．関係の資料は18点出土しているので，石器組成の中の38％を占



第12図　石器実測図

第3表　石器計測表

No.	器種	石質	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	登録番号
1	ナイフ形石器	黒曜石	1.8	0.7	3.8	kl 176	3.65
2	〃	チャート	1.2	0.55	1.8	kl 167 3／3	2.7
3	〃	〃	1.1	0.55	1.5	kl 242 1／5	2.85
4	〃	〃	1.15	0.4	1.2	kl 164 1／7	2.4
5	〃	黒曜石	1.1	0.65	1.4	kl 256 1／7	2.55
6	〃	〃	1.1	0.7	1.4	kl 168 1／2	2.35
7	〃	〃	1.4	1.0	1.9	kl 52 1／2	
8	〃	〃	0.9	0.4	0.6	表採	1.1
9	〃	〃	0.8	0.4	0.4	表採	1.3
10	〃	チャート	0.9	0.4	0.5	表採	1.1
11	〃	黒曜石	1.45	0.55	1.2	kl 147	1.4
12	〃	〃	1.2	0.5	1.2	kl 207 2／4	2.0
13	〃	チャート	2.1	0.75	5.0	kl 147	2.9
14	〃	黒曜石	1.55	0.7	2.4	kl 126 1／2	2.85
15	〃	チャート	1.3	0.5	1.6	kl 195	2.6
16	〃	〃	1.2	0.5	1.2	表採	1.25
17	〃	黒曜石	1.55	0.45	0.9	kl 140	1.5
18	〃	〃	1.75	0.8	1.8	kl 142 1／2	1.4
19	〃	チャート	1.35	0.6	0.7	kl 245 1／2	1.3
20	〃	〃	0.75	0.6	0.5	kl 164 2／7	1.15
21	掻器	黒曜石	2.95	1.5	7.8	kl 167	2.7
22	削器	〃	3.5	1.4	14.6	kl 232	3.1
23	彫器	頁岩	5.9	2.3	85.2	kl 219	6.0
24	抉入石器	チャート	1.9	0.5	2.0	表採	2.3
25	〃	〃	2.75	1.55	9.8	A-1 kl4	3.5
26	〃	黒曜石	3.25	1.45	11.4	kl 37 1／3	2.5
27	〃	頁岩	7.5	1.1	10.9	kl 226 1／2	3.65
28	〃	砂岩	8.0	1.9	119.5	KL 231 1／2	7.5
30	〃	黒曜石	1.55	0.6	1.2	kl 45	1.55
31	使用痕ある剥片	頁岩	2.85	0.8	0.9	kl 227	4.2
32	〃	黒曜石	1.9	1.2	6.9	kl 250	3.75
33	〃	黒曜石	3.1	0.95	10.8	kl 185	4.45
34	〃	チャート	2.25	0.65	6.2	kl 197	3.45
35	〃	黒曜石	2.35	0.6	2.9	kl 249 1／2	3.3
36	〃	黒曜石	2.75	1.0	9.8	kl 22	4.35
37	〃	砂岩	3.7	0.85	13.9	kl 200	4.7
38	〃	黒曜石	2.2	0.75	3.8	kl 125	2.7
39	〃	黒曜石	1.6	0.55	1.9	kl 10	2.6
40	〃	黒曜石	1.8	0.8	4.1	kl 158	2.8
41	〃	黒曜石	2.4	0.9	6.3	kl 149 1／2	3.15
42							
43	〃	チャート	3.1	1.0	7.2	kl 196 2／5	2.85
44	〃	チャート	2.6	0.75	4.4	kl 229 2／2	2.55

No.	器	種	石　質	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	登録番号
45	〃		チャート	5.95	1.7	35.8	kl 22	5.05
46	〃		黒曜石	3.35	1.3	10.9	kl 19 kl 20	3.7
47	〃		黒曜石	3.4	1.5	14.3	kl 134 2／2	2.9
48	〃		頁岩	4.15	0.95	9.1	kl 7	3.55
49	石	核	黒曜石	4.3	2.95	46.5	kl 114	4.75
50	〃		黒曜石	3.65	2.9	29.2	kl 17 1／2	3.3
51	〃		黒曜石	2.3	2.3	16.5	kl 135 1／15	3.45
52	〃		頁岩	5.55	2.7	43.0	kl 2	4.5
53	〃		頁岩	8.45	4.3	200.0	kl 86	6.1
54	〃		砂岩	8.15	2.5	240.1	kl 50	9.6
55	〃		黒曜石	3.5	1.4	14.6	kl 232	3.1
56	〃		黒曜石	2.55	1.5	8.7	kl 155	3.0
57	〃		黒曜石	4.8	1.5	15.0	kl 132	2.7

めている．剥片の形状には，31～40のような縦長剥片と41～48のような寸詰まりで幅広ないし横広の剥片があり，横長剥片は使用されていなかった．石材別の内訳は，黒曜石10点，チャート５点，頁２点，砂岩１点である．

【石核】（第11図49～第12図57）

９点が出土している．出土資料総数 417点に占める割合は，２％である．，石材ごとの内訳は，黒曜石６点，頁岩２点，砂岩１点である．資料数が少ないため，久保遺跡独自での分類作業は不可能であり，狸谷Ｉの分類基準に乗せた形で整理してみよう．

第１類（49）

第１類は，縦長剥片を剥離した石核である．狸谷Ｉのものはすべて小型のものであったが，久保遺跡では49のように大きめのものが出土している．打面は単設であるが，両側面には下の方から加撃された剥離面がみられる．ただし，この剥離は，剥片剥離に伴うものでなくて，側面の調整加工であろう．剥離される剥片は刃器状剥片で，狸谷Ｉにはみられない石核の一つである．打面は，剥離面である．

第２類（50～57）

幅広の縦長剥片から横広の剥片までを剥出している石核である．久保遺跡の中でもっとも多く出土している石核である．狸谷Ｉではこの種の石核をさらに５種類に細分して報告されているが，久保遺跡にはそれをすべて満たすだけの種類は無い．ただ，ここでは，先に示しておいた分類基準の問題もあり，５種類の石核をすべて提示しながら説明をおこなう．しかし，久保遺跡に該当する石核が無い場合には項目を表記するに止める．

２ａ類

該当する石核は，出土していない．

２ｂ類（50～52）

打面を頻繁に転移しながら，剥片剥離作業が進行していく多面体形の石核である．その転移の仕方では，上下両端に打面があるもの(51)と他方向のもの（50・52）がある．

２ｃ類

該当する石核は，出土していない．

２ｄ類（55～57）

剥片を素材とする偏平な石核である．作業面は，平坦な剥片の主要剥離面にあり，剥離作業が進行しても作業面に変更はない．打面は，固定されるものと上下両面にある場合があるが，久保遺跡では固定打面のものだけであった．

２ｅ類（53）

２ｅ類は，打面の位置が石核の縁にそって回りながら移動していくものである．53は，剥片を素材として，その主要剥離面側に求心的な剥片剥離をおこなった後，作業面を剥片の表面に移した資料である．剥片表面での剥離作業は，剥片そのものが厚くて，求心的な作業が表面全面に及んでいなかった．

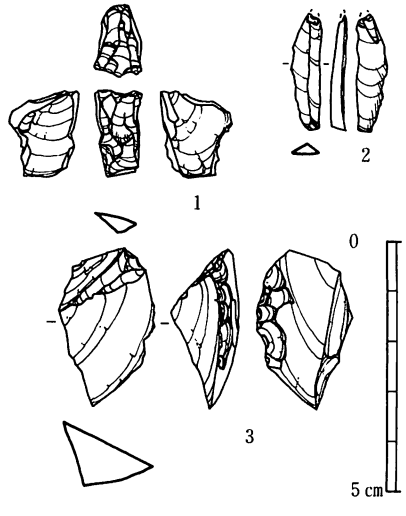
３類（54）

３類は，両刃礫器の刃部作出に似た剥片剥離をする石核である．大型で厚手の剥片の一縁辺だけで剥片剥離作業がおこなわれている．

２　久保Ⅱ石器文化の遺物

久保遺跡からは，細石器関係の遺物が出土した．いずれも一括資料の中にあったために出土層位は不明であるが，縄文時代早期の包含層がⅢ層にあたっているので，その下のⅣａ層の可能性が高い．細石核１点，細刃器１点，彫器１点である．

細石核（１）は，黒曜石製である．分割された礫を素材として，側面に調整加工を施すことなく，細刃器剥出作業をおこなっている．打面は，調整打面である．細刃器（２）は黒曜石製で，頭部をわずかに欠いている．彫器（３）は，チャート製である．剥片の主要剥離面を打面にて３条の樋状剥離を加えて彫刀面となしている．



第13図　石器実測図

第4表　石器計測表

No.	器種	石質	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	登録番号
1	細石核	黒曜石	1.4	0.95	2.2	表採	1.7
2	細刃器	黒曜石	0.6	0.3	0.3	表採	2.3
3	彫器	チャート	1.9	1.35	5.0	A-3　8	3.2

3　まとめ

久保遺跡では先土器時代の遺物を検出することができた．それは，ＡＴ下位に出土層位がある久保Ⅰ石器文化とＡＴ上位で細石器文化に属する久保Ⅱ石器文化の二つの石器文化である．

久保Ⅰ石器文化は，ナイフ形石器を主体として，それに掻器，削器，抉入石器，彫器，敲石，二次加工ある不定形石器，使用痕ある剥片を加える石器組成である．使用される石材は，チャート，黒曜石，安山岩，砂岩である．

ナイフ形石器の形態組成は，茂呂（九州）型とよばれる二側縁加工のもの，切出状のもの，台形石器，それに部分加工が加わって構成されている．この特徴は，狸谷Ⅰ石器文化に類似するもので，九州ナイフ形石器文化の編年にあっては第Ⅱ期（木崎1988）に相当しよう．ただし，台形石器の存在や剥片剥離技術の中に刃器技法に類似したものがわずかに含まれるなど，狸谷Ⅰの特徴に完全に合致するものではない．でも，石器に使用される素材には刃器状剥片がほとんど見られないので，大分県駒方古屋石器文化と同一のものではない．やはり，狸谷Ⅰ石器文化の範囲の中で捉えられると判断される．

今回の調査の中での成果の一つに，台形石器の検出が挙げられる．台形石器の出現は，九州ナイフ形石器文化第Ⅰ期にまで遡る．曲野石器文化がその代表例である．ところがその次の第Ⅱ期になると存在が確認されなくなり，九州から台形石器が無くなってしまったかのようである．しかし，次の第Ⅲ期では台形石器が再び登場してくるわけで，その系統関係が問題となるはずである．こうした現状から考えて，今回の発見は，第Ⅰ期と第Ⅲ期との台形石器を系統的につなぐ資料を，九州の先土器時代研究に提出したとして大きく評価できそうである．また，今後の資料増加を助長する効果もあり，注目に値する成果となろう．

久保Ⅱ石器文化は，細石器文化に属する遺物を指標とする．出土石器には，細石核と細刃器と彫器がある．出土資料も少なく，出土層位もはっきりしないので，その編年的な位置付けを問題にすることはできない．ここでは，久保遺跡の他の場所にこの石器文化の資料が存在する可能性を指摘するに止めておきたい．

第２節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺物は，第Ⅱａ層から第Ⅱｂ層そして第Ⅲ層にかけて包含されていた．すなわち，アカホヤ火山灰は第Ⅱｂ層で，そのすぐ上の層から下の層までまんべんなく遺物が出土していることになる．残念ながら，アカホヤ火山灰をもとにした層位的な調査がなされていなかったので，ここでの報告は，縄文時代を時期ごとに限定せずに一括した形で記述していくスタイルを採らざるをえなかった．

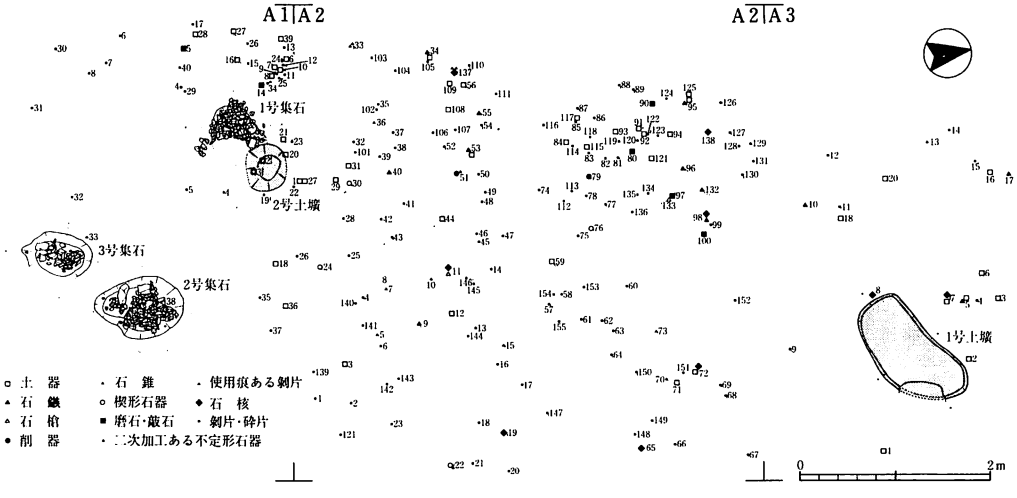
確認された遺構には，集石３基ある．いずれも第Ⅲ層を遺構面としているので，縄文時代早期に属するものである．出土遺物には，土器47点，石器類233点があったが，その土器型式の多様さからは相当の時期幅を考えなければならない．これについては，２項（出土遺物）の所で詳述したい．

１　遺構とその位置

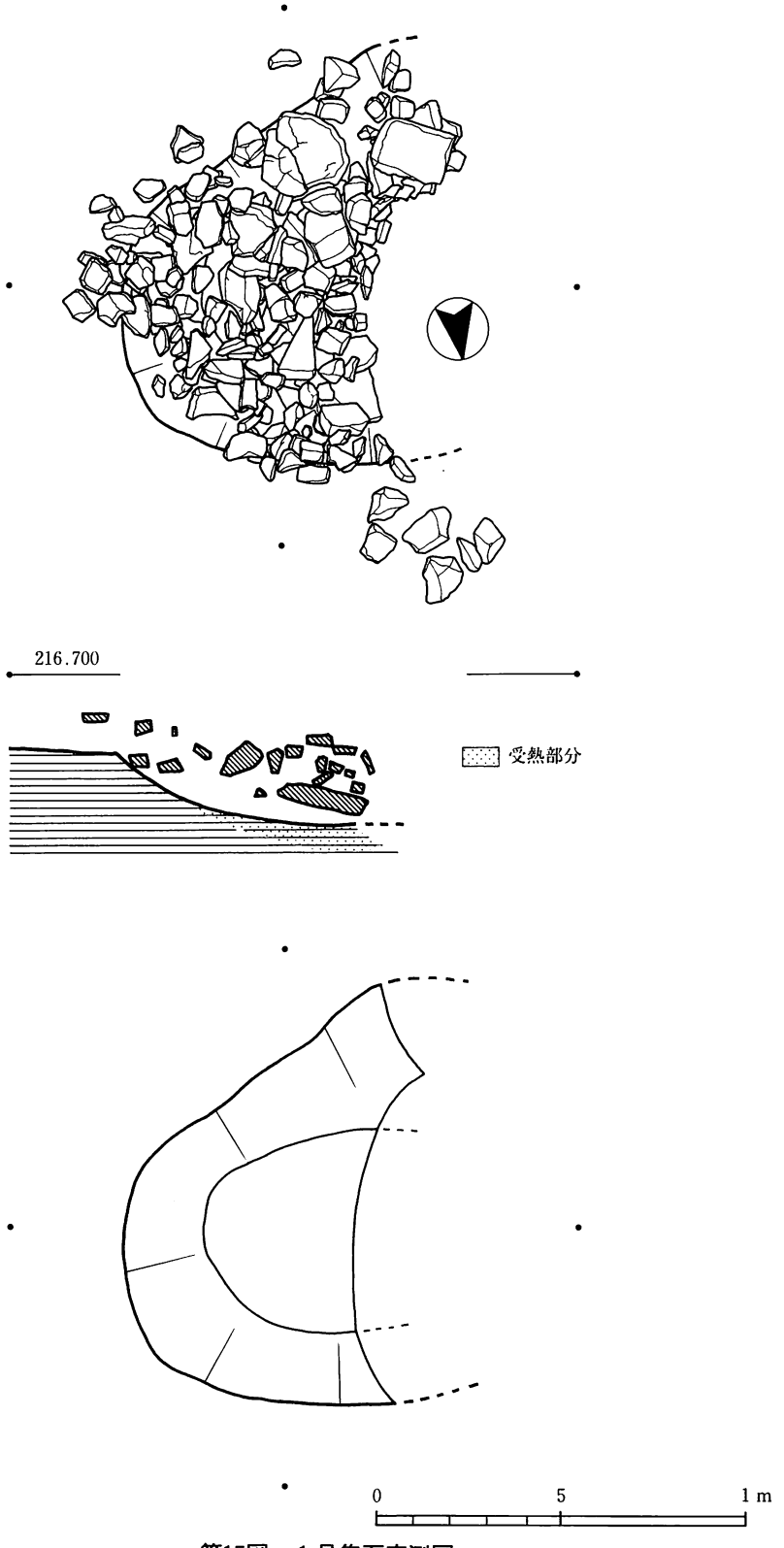
縄文時代の遺構として確認したのは，集石である．いずれも調査区の南側にあるＡ－１区で確認された（第14図）．時期は，アカホヤ火山灰の直下にある第Ⅲ層が遺構面なので，層位的な事実から縄文時代早期にあたると考えられる．遺跡の中での遺構の位置は，遺物分布からするとやや南にはずれた所にある（第14図）．

１号集石（第15図）

１号集石は，Ａ－１区の南西隅に位置している．遺構のほぼ半分は，近年掘られたイモ穴と中世の墓壙によって破壊されている．構成礫は，25cm角前後の偏平礫や15cm大から握り拳大までの破砕礫であった．すべて火を受けて赤化していた．大型の偏平礫は土坑の底面近くにあり，



第14図　遺構配置・遺物分布図

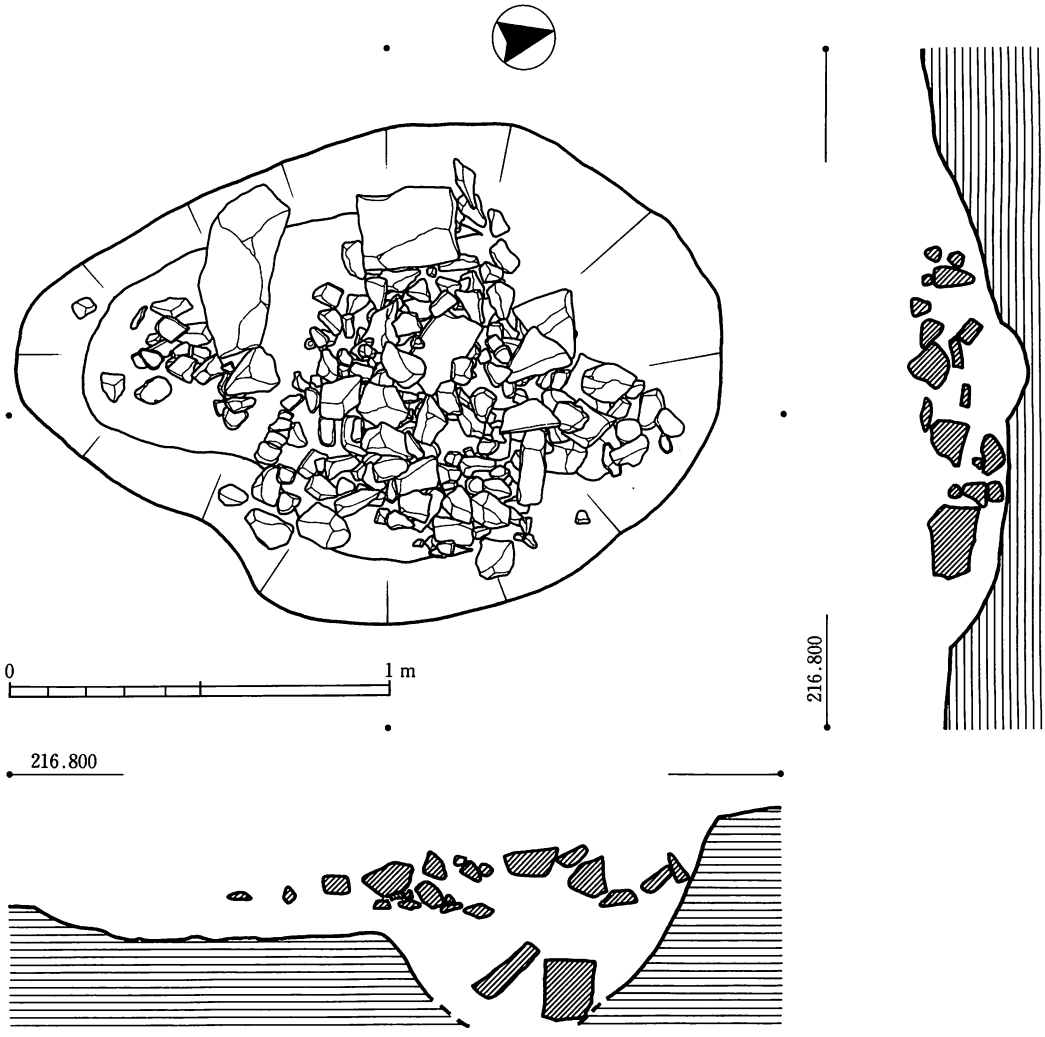


第15図　１号集石実測図

この遺構が元々は石組炉として使われていた可能性が高いそうである．下部構造は，土坑である．土坑は，不整の楕円形で，規模は，破壊を受けているのでわからないが，長軸約1.4 m前後，短軸1.1m前後と推定される．現状での最深値は，礫の上面から測って25mである．
土坑の底面は，熱を受けた範囲が変色するなど土質が変質している．その変質の深さは，土坑底面の中央部で約10cmであった．

2号集石（第16図）

2号集石は，A－1区のほぼ中央に位置している（第14図）．構成礫は，250個を数え，人頭大以上の大型礫と15cm大から握り拳大までの中・小型礫であった．礫のほとんどは，角がとれた完形の自然礫である．礫の赤化が認められず，ほとんどの礫が熱を受けている1号集石とは性格を異にした遺構かもしれない．下部構造は，卵の形をした不整の楕円形土坑である．長

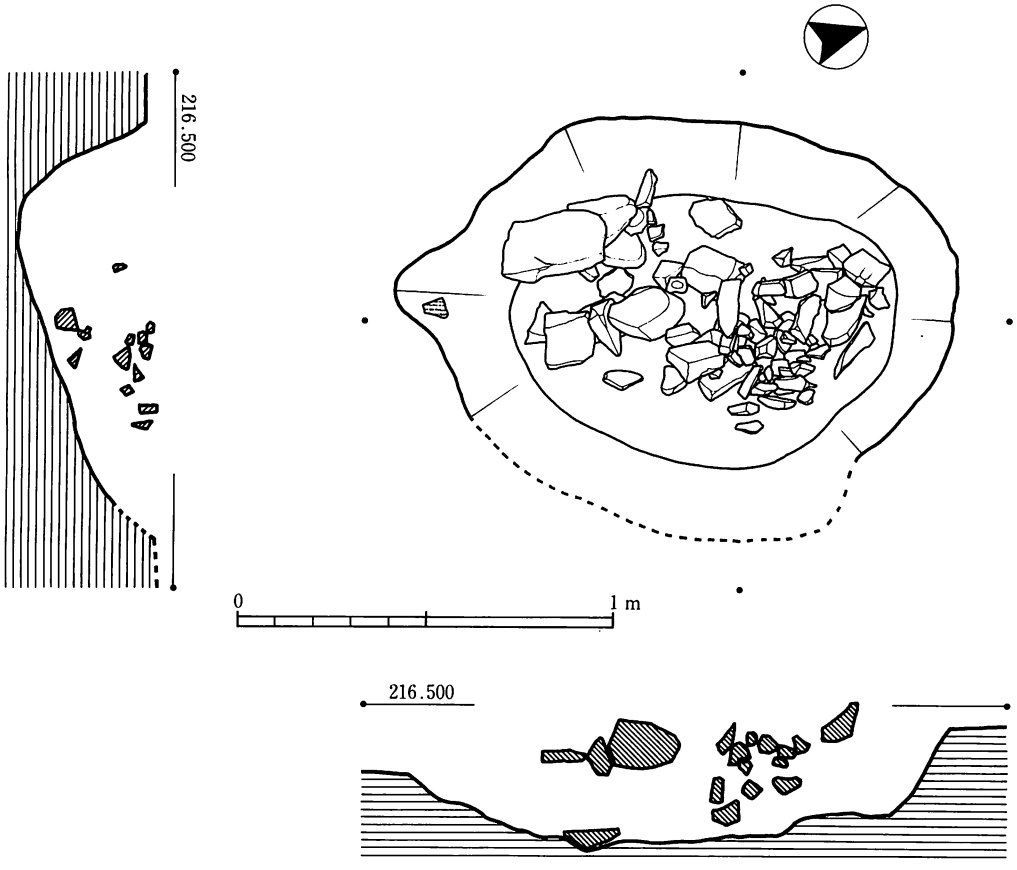


第16図　2号集石実測図

軸1.9m，短軸1.3mを測る．土坑には２段の底面がある．下位の底面は完掘されておらず，はっきりした深さがわからないため，上位面と下位面との比高は，20cm以上としか言いようがない．礫は，断面を観察すると，上位と下位にそれぞれ面をもって出土している．このように，高低２段の底面と上下２段の礫の出土状況を検討すると，この２号集石は，二つの集石が切り合って一つに見えている可能性も高そうである．

３号集石（第17図）

３号集石は，２号集石のすぐ南に位置している（第14図）．構成礫は，70個を数え，20cm～30cm角の偏平礫と15cm大から握り拳大までの中・小型礫であった．礫は完形の自然礫で，ほとんどのものが赤化を認められなかった．礫の状況からすると，２号集石と同じ性格を想定できそうだ．下部構造は，楕円形土坑である．長軸1.45m，短軸1.1mを測る．



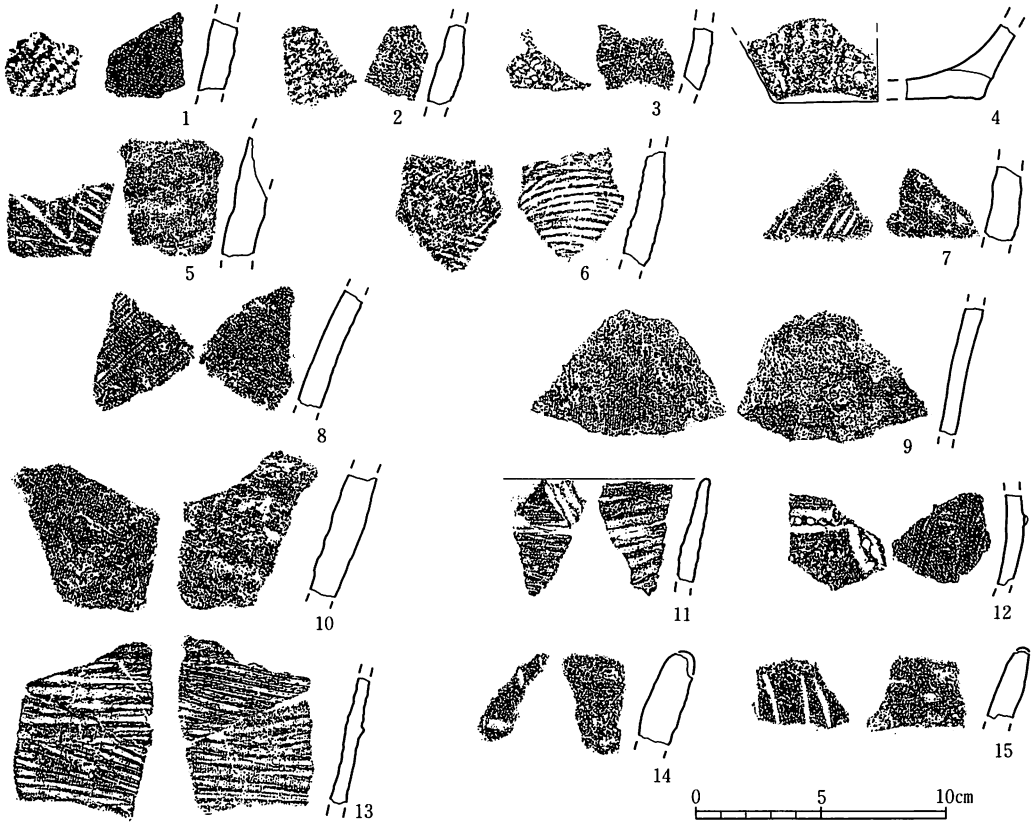
第17図　３号集石実測図

2　出土遺物

【出土状態】（第14図）

遺物は，第Ⅱａ層から第Ⅱｂ層そして第Ⅲ層にかけて包含されていた．アカホヤ火山灰が第Ⅱｂ層なので，そのすぐ上の層から下の層までまんべんなく遺物が含まれていたことになる．従って，アカホヤ火山灰を基準にした層位的出土状態ではなく，時期の異なる遺物が混在した状況をとっていると考えられる．

遺物は，大きなまとまりをもって検出されたが，調査区の中央にあるＡ－２区から多く出土し，Ａ－１区とＡ－３区では遺物分布の周辺部にあたっていて少なかった．時期を異にする遺物がほぼ同じ範囲で出土しているということは，生活の場が時期を越えてあまり変わらなかったことを反映しているともいえそうで，興味深い．ただ，当地は，前章でもふれたようにかなりの傾斜地にあり，その傾斜地の中でのわずかな面積の平坦面で遺物が出土しており，その地形的な特徴に大きく影響を受けた遺物分布なのかもしれない．



第18図　土番実測図

【土器】（第18図）

土器は，47点出土した．ほとんどが無文土器ないし土器の無文部であって型式的特徴を示すものは少なかった．従って，この報告ではある程度の型式認定ができる有文土器にかぎって取り扱うことにした．

１～８と10は，縄文時代早期に属すると考えられる土器群である．１～４は縄文土器で，すべて同一固体である．底部（４）は，平底である．縄文は，単位が大きめのＬＲの原体で施文されている．胎土は，１㎜大の砂粒をわずかに含んでいるが均質である．焼成は良好で，器面は硬い．この土器は，型式的な特徴から平栫式土器と認定される．６～８は，器面に調整痕である貝殻条痕が残されている土器で，各々異なった固体である．痕跡が表にだけ残されているもの（５・７・８）と表裏両面に残されているもの（６）がある．いずれも胎土は荒く，焼成も不良である．縄文時代早期の条痕土器と認定される．10は，表裏両面ともていねいに撫でられている土器の無文部である．器壁が厚く，ていねいな撫で調整が観察され，縄文時代早期に属する円筒形条痕土器であろう．

11～13は，縄文時代前期前半に編年される轟Ｂ式土器である．11と13は，同一固体である．いずれも表裏面に荒い貝殻条痕が残され，11では微隆線文が，12では竹管による刺突文を持つ微隆線文が付けられている．11は口縁部，12は頚部，13は胴部である．11と13は，宮本一夫氏がいうⅡb類で，12はⅢb類に相当しよう．

14と15は，縄文時代後期前半の土器である．いずれも口縁部の資料で，沈線文が施されている．文様は，弱くて浅い沈線によって施文されている．出水式系統の土器と理解できよう．胎土は荒くて，焼成は不良である．

９は，型式不明の土器である．遺跡では，この種の無文土器ないし土器の無文部が多く検出されている．こうした土器を除いて土器の時期を考えると，縄文時代早期がもっとも多くて，これに前期前半と後期前半の土器が入るという状況であった．縄文時代前期以降の遺物が見つかっていないことを考えると，久保遺跡は，縄文時代早期を主体的な時期にしているとみなすことができよう．

【石鏃】（第19図）

石鏃は，一括遺物も含めて24点が出土している．出土石器の43％を占めている．石材ごとの内訳は，黒曜石12点，チャート11点，安山岩１点であった（第５表）．残念ながらここでは，石器分類に耐えうるだけの資料点数ではないので，近くの遺跡の中でまとまって石鏃が出土している狸谷遺跡の分類基準（木﨑・隈1987）にあてはめて整理していこう．

狸谷遺跡では，石鏃を大きく三つに分類して報告されている．第１類は二等辺三角形，第２類は三角形，第３類は異形である．さらに前の二つは，基部の作り出し方によって平基のもの(a)と浅く抉れるもの（ｂ）とＶ字に抉れるもの（ｃ）およびＵ字状に抉れるもの（ｄ）の四

第5表　縄文時代石器組成表

器種	計（%）	チャート	黒曜石	安山岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩
石鏃	23 (43)	11 (46)	12 (50)	1 (4)	—	—	—
石槍	2 (4)	1 (50)	—	1 (50)	—	—	—
削器	3 (5)	3(100)	—	—	—	—	—
石錐	2 (4)	—	2(100)	—	—	—	—
楔形石器	4 (7)	3 (75)	1 (25)	—	—	—	—
磨製石斧	1 (2)	—	—	—	1(100)	—	—
磨石・敲石	5 (9)	—	—	—	4 (80)	1 (20)	—
二次加工ある不定形石器	7 (12)	3 (42)	2 (29)	2 (29)	—	—	—
使用痕ある剥片	8 (14)	2 (25)	5(62.5)	—	—	—	1 (12.5)
石器総計	45 (24)	23 (41)	22 (39)	4 (7)	5 (9)	1 (2)	1 (2)
石核	9 (4)	—	9(100)	—	—	—	—
原石	5 (2)	1 (20)	4 (80)	—	—	—	—
剥片・砕片	163 (70)	100 (61)	45 (28)	17(10.4)	1 (0.6)	—	—
総計	233	124 (53.2)	80 (34)	21 (9)	6 (3)	1 (0.4)	1 (0.4)

つに細分されている．以下，この分類にそって説明していこう．

第1ａ類

この類に入る石鏃は，出土していない．

第1ｂ類（1）

1ｂ類は，二等辺三角形で浅い抉り入りの凹基式石鏃である．調査では1例が出土している．1がそれで，小型である．

第1ｃ類（2～6）

1ｃ類は，二等辺三角形でＶ字の抉りが入る凹基式石鏃である．大きさの点で，2のように大型のものと3～6のような中・小型のものがある．

第1ｄ類（7～15）

1ｄ類は，二等辺三角形でＵ字形の抉りが入る凹基式石鏃である．7と15は大型品で，他は中・小型品である．

所属不明の第1類（16）

基部を欠損しているので類別の判断ができない．

第2ａ類（17）

2ａ類は，三角形で平基式石鏃である．資料は，17のみである．

第2ｂ類（18）

2ｂ類は，三角形で浅い抉りの凹基式石鏃である．資料は18のみで，小型品である．

第2ｃ類（19）

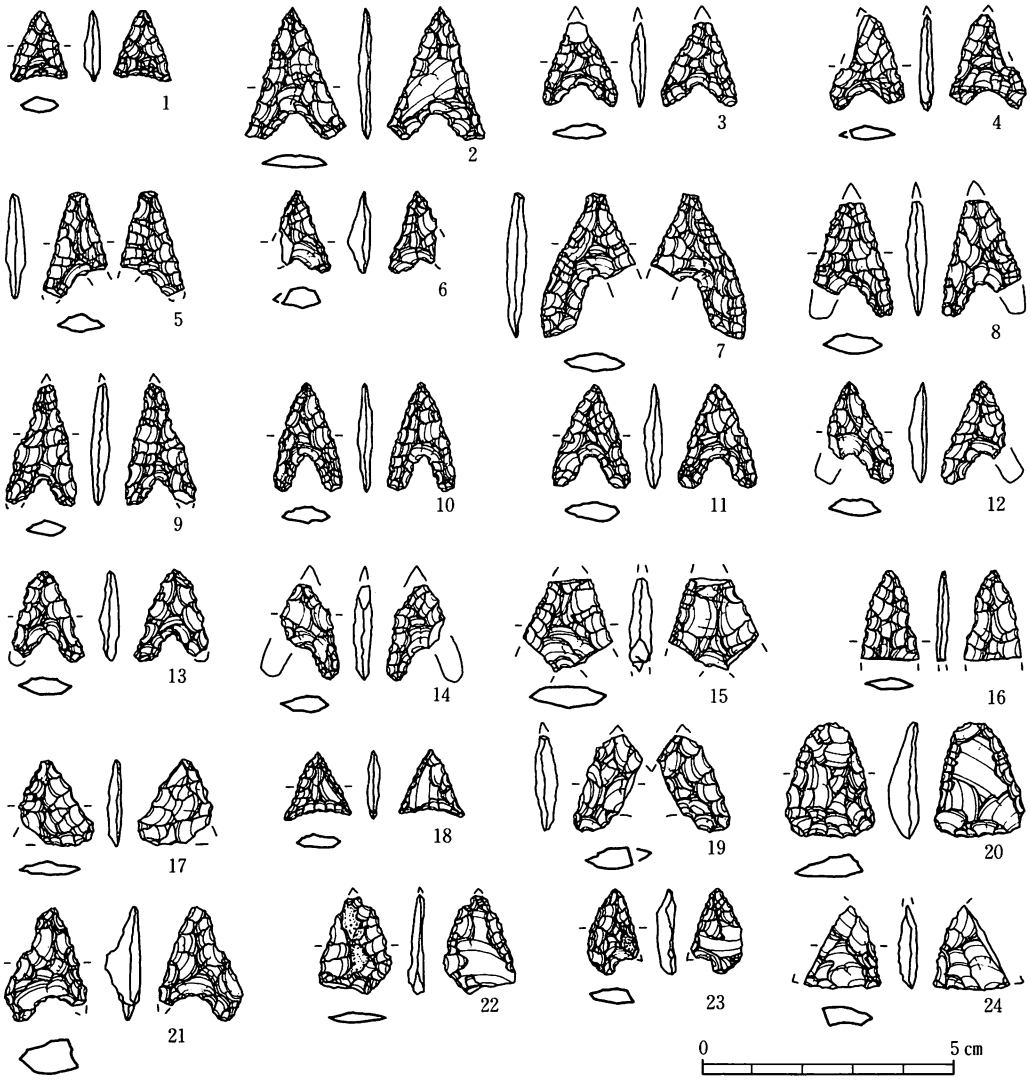
2ｃ類は，三角形でＶ字形の抉りが入る凹基式石鏃である．19がその資料である．

未加工品（20～24）

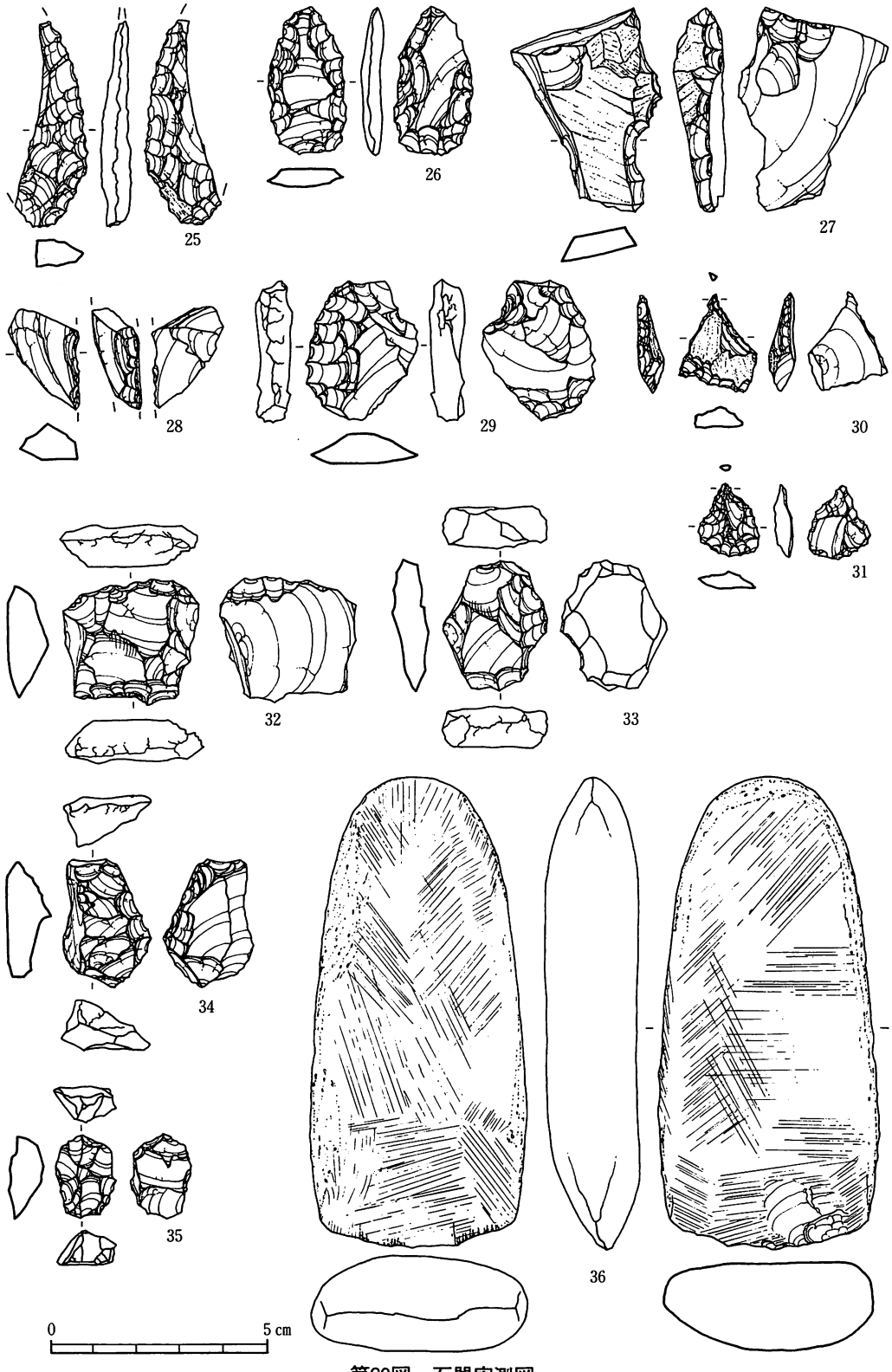
未加工品と考えられる資料がある．20は，表裏両面に素材となる剥片の剥離面が残っていて，先端部の尖鋭化が進んでいない資料である．21は，表面の調整剥離が蝶番剥離をおこしたために，石器製作を中断した資料である．22は，剥片の主要剥離面を大きくのこして製作を中断している．特に，基部周辺の調整が不備である．素材となる剥片が調整に耐えうるだけの厚みを持っていなかったためではなかろうか．23は，石錐かもしれないが，先端部の尖鋭化が弱いようである．未加工品であれば，基部側の調整に甘さがみられる．24は，製作途中で欠損したために製作を中断した資料と考えられる．全体的に調整が荒い．

【石槍】（第20図25・26）

石槍に分類される資料が２点出土している．出土石器に占める割合は，４％である．25は，



第19図　石器実測図



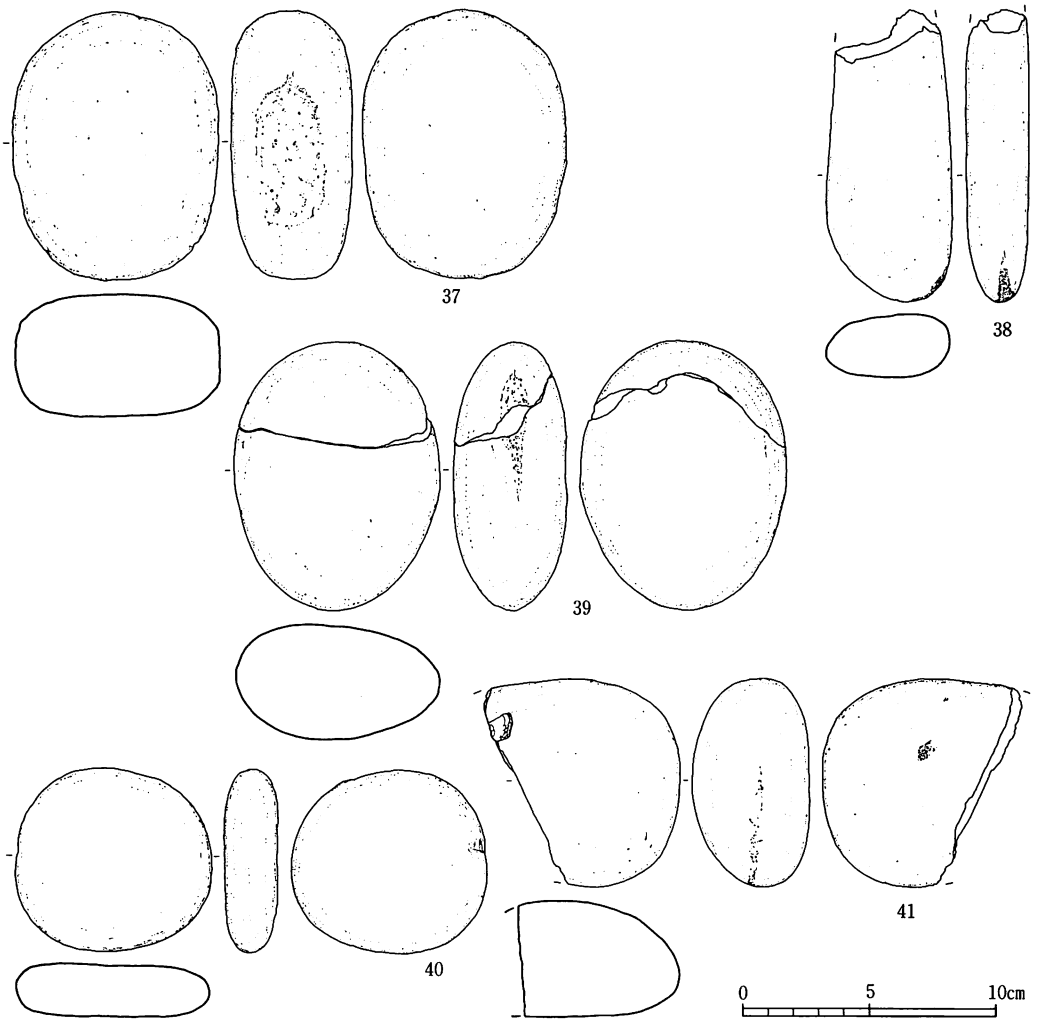
第20図　石器実測図

チャート製である．この石器の素材は，基部に素材となる剥片の打面を残しているので，縦長剥片であることがわかる．26は，石槍の未加工品であろう．素材である剥片の表裏剥離面を残している．安山岩製である．

【削器】（27～29）

削器は，３点が出土している．出土石器の５％を占める．27は，厚手で比較的大型の横長剥片を素材として，剥片の打面側に急斜で荒い加工を施して石器に仕上げている．刃部の縁辺は，やや抉り込まれた状態にある．チャート製である．28は，チャートの横長剥片を素材として，その末端部に急斜で細かい加工を施した削器である．29もチャート製である．寸詰まりの横広剥片を素材として，その左側縁に浅い加工を施している．

【石錐】（30・31）



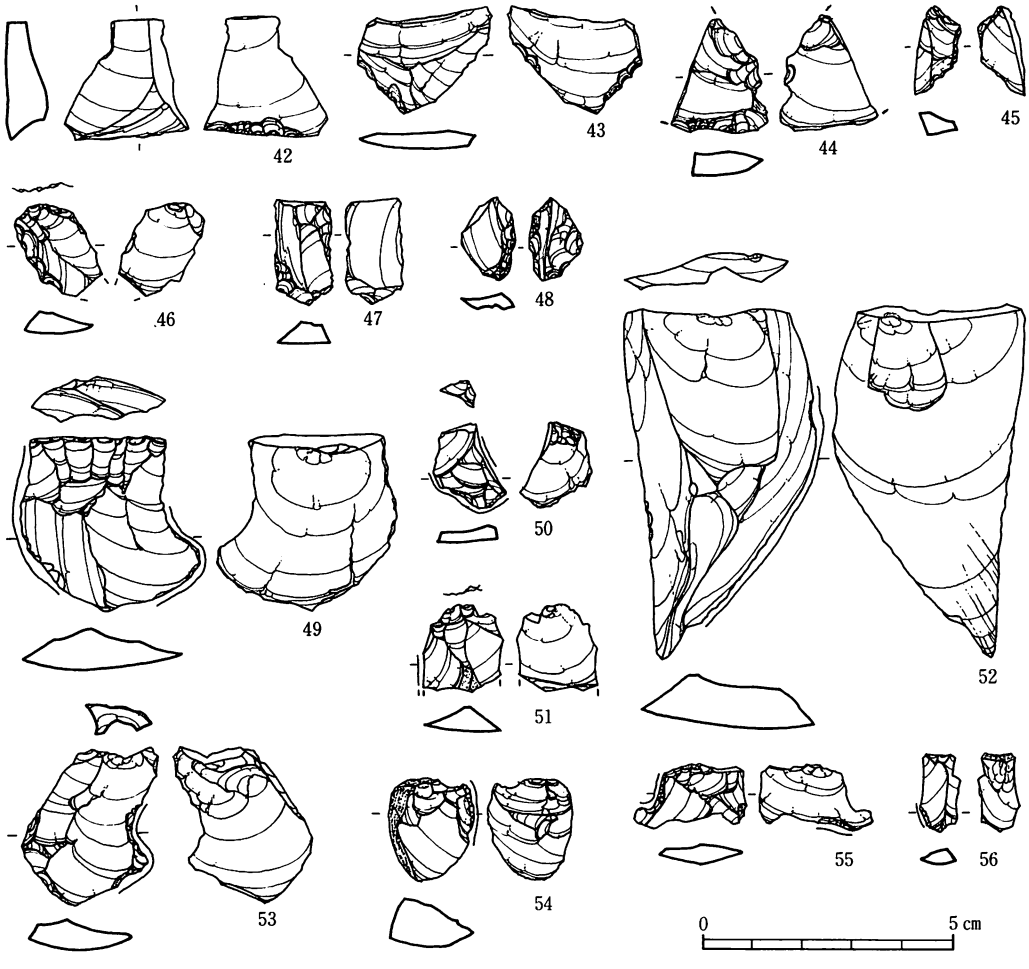
第21図　石器実測図

石錐は，２点検出された．出土石器の４％である．30は，黒曜石の幅広剥片製である．剥片の左側縁と先端部とに急斜な刃潰し加工状の調整を加えて，尖鋭化した刃部を作り出している．風化が激しくて，先土器時代の石器の可能性も高い．31は，黒曜石の横長剥片を素材としている．刃部は，特にていねいに作り出されており，尖鋭化している．

【楔形石器】（32～35）

楔形石器は，４点出土している．出土石器に占める割合は，７％である．32は，幅広剥片を素材として，その左右の側縁に細かい剥離痕が観察される．チャート製である．33は，チャート製の幅広剥片を素材として，その打面側と先端側に対向する微細な剥離が観察される．34もチャート製である．石器の左側縁に折れ面がみられる．35は，黒曜石製の厚手の剥片を素材としている．４点の楔形石器の中でもっとも小型の石器である．

【磨製石斧】（36）



第22図　石器実測図

１点が出土しているが，一括資料というだけでその出土状態はわからない．全体的にていねいな磨きが加えられており，その素材を特定することができない．刃部は，丸みをもった両刃である．斧の種類は，刃部が研ぎ直しを経ても左右対照をそのまま保持しているので，横斧と理解されよう．砂岩製である．

【磨石・敲石】（第21図37～41）

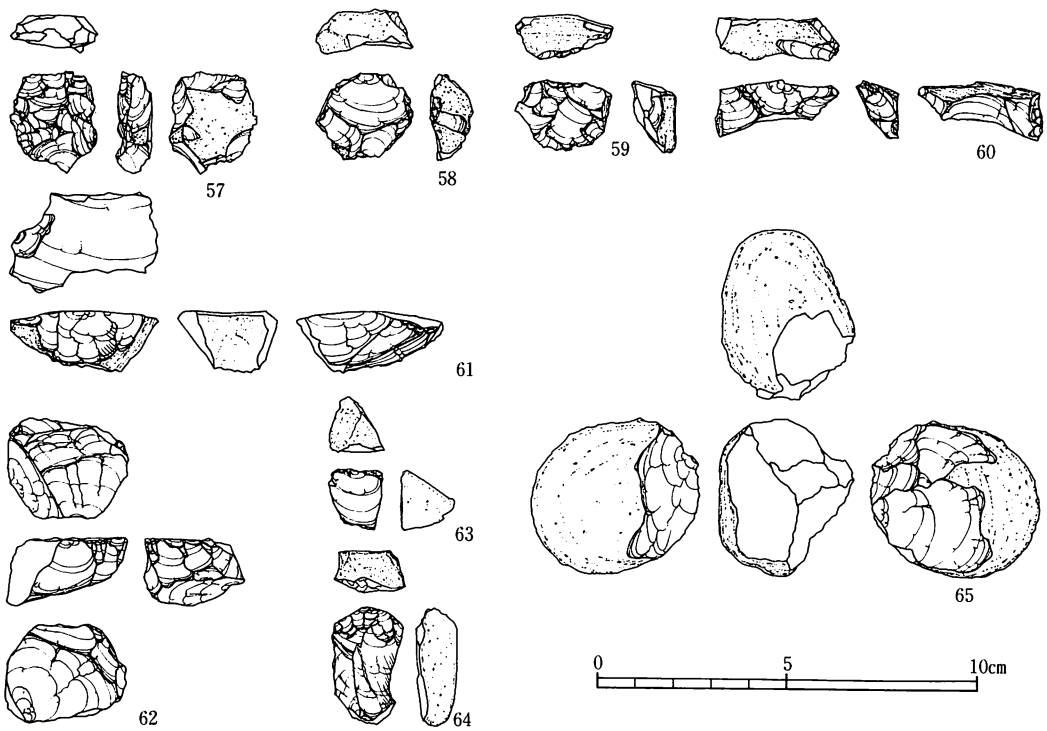
磨石・敲石は，５点出土した．石材別では，砂岩製４点と凝灰岩１点がある．その形状には，楕円形（37・39・41）と円形（40）および棒状（38）がある．敲打痕は，37のように両側面に広い範囲で観察されたり，39のように片方の側縁にわずかに観察されたり，41のように片方の側縁と表面の一部に観察されたりする．また，棒状の敲石には，その先端部に敲打痕が観察される．40は，表裏両面に磨れ痕跡が観察される．この痕跡が残っているものは，40のみである．

【二次加工ある不定形石器】（第22図42～48）

二次加工ある不定形石器は，７点が出土していて，出土石器の12％を占めている．石質では，チャート３点，黒曜石２点，安山岩２点である（第５表）．42と44と45および47は剥片の先端部に，43と46は剥片の左側縁に，48は剥片の打面側に二次加工が観察される．

【使用痕ある剥片】(49 ～56)

使用痕ある剥片は，８点が出土している．出土石器の14％である．52のように大型のものか



第23図　石器実測図

第6表　石器計測表

No.	器種	石質	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	登録番号
1	石鏃	黒曜石	1.1	0.3	0.5	表採	1.4
2	〃	チャート	2.0	0.25	0.8	A-3 5	2.6
3	〃	黒曜石	1.5	0.3	0.5	A-2 40	1.65
4	〃	チャート	1.5	0.3	0.7	表採	1.9
5	〃	〃	1.3	0.35	0.9	A-3 17	2.05
6	〃	黒曜石	1.0	0.4	0.6	A-2 98	1.6
7	〃	安山岩	1.9	0.35	1.3	A-3 10	2.85
8	〃	チャート	1.55	0.4	1.1	表採	2.25
9	〃	黒曜石	1.35	0.3	0.9	表採	2.4
10	〃	黒曜石	1.25	0.35	0.5	A-2 132	2.1
11	〃	黒曜石	1.6	0.4	0.6	A-2 9	2.05
12	〃	黒曜石	1.25	0.35	0.7	表採	2.0
13	〃	黒曜石	1.45	0.35	0.8	表採	1.8
14	〃	黒曜石	1.2	0.35	0.7	表採	1.85
15	〃	チャート	1.8	0.4	1.7	A-2 53	1.8
16	〃	〃	1.1	0.2	0.5	A-2 34	1.8
17	〃	〃	1.5	0.25	0.4	A-3 95	1.7
18	〃	〃	1.35	0.25	0.5	表採	1.35
19	〃	〃	1.4	0.45	0.8	A-2 55	1.9
20	〃	〃	1.75	0.5	2.4		2.3
21	〃	黒曜石	1.65	0.7	1.5		2.25
22	〃	〃	1.45	0.2	0.8		1.95
23	〃	〃	1.05	0.35			1.7
24	〃	チャート	1.5	0.35	0.7	A-2 96	1.65
25	石槍	〃	1.7	0.6	4.3	A-2 11	4.7
26	〃	安山岩	1.8	0.5	3.2	A-2 133	3.35
27	削器	チャート	345	1.15	14.8	A-2 51	4.65
28	〃	〃	1.65	1.1	3.1	A-2 79	2.3
29	〃	〃	2.6	0.85	6.6	A-2 46	3.2
30	石錐	黒曜石	1.8	0.45	1.9	A-1 33	2.25
31	石錐	黒曜石	145	0.4	0.8	A-2 52	1.65
32	楔形石器	チャート	3.15	0.95	9.4	A	2.9
33	〃	〃	2.45	0.95	7.7	A-2 22	3.0
34	〃	〃	2.0	1.15	6.0	A-2 30	2.95
35	〃	黒曜石	1.4	0.8	1.8	A-2 24	1.95
36	磨製石斧	砂岩	5.1	2.25	197.8		10.9
37	磨石・敲石	凝灰岩	8.2	4.8	664.7	A-2	10.6
38	〃	砂岩	5.0	2.5	219.3	A-1 5	11.5
39	〃	〃	8.2	4.6	580.6	A-2	10.6
40	〃	〃	7.8	2.1	203.1	A-2 100	7.25
41	〃	〃	7.9	4.6	413.0	A-1 14	8.25
42	二次加工ある不定形石器	安山岩	2.45	0.85	4.5	A-2 33	2.4
43	〃	チャート	2.7	0.35	1.9	A-2 15	2.15
44	〃	黒曜石	1.9	0.5	1.8	A-2 137	2.25
45	〃	チャート	0.95	0.5	0.7	A-2 22	1.8

No.	器種	石質	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	登録番号
46	〃	安山岩	1.75	0.5	1.4	A-2 5	1.8
47	〃	チャート	1.15	0.45	1.5	A-2 146	2.1
48	〃	黒曜石	1.1	0.3	0.4	A-2 13	1.15
49	使用痕ある剥片	チャート	3.6	0.9	10.0	A-2 10	3.45
50	〃	黒曜石	1.45	0.4	1.0	2号集石内	1.65
51	〃	〃	1.6	0.6	1.2	A-2 33	1.7
52	〃	流紋岩	3.85	1.2	25.9	A-2 137	8.0
53	〃	チャート	2.75	0.8	4.9	A-2 73	3.1
54	〃	黒曜石	1.7	1.0	2.5	A-2 51	2.05
55	〃	〃	2.25	0.4	0.9	A-2 36	1.3
56	〃	〃	0.8	0.4	0.3	A-2 7	1.55
57	石核	〃	2.25	0.95	5.1	A-3 7	2.65
58	〃	〃	2.5	1.1	5.2	A-2 19	2.25
59	〃	〃	2.55	1.15	4.6	A-2 98	0.35
60	〃	〃	3.25	1.1	3.6	A-1 11	1.5
61	石核	黒曜石	3.9	2.6	4.2	A-2 8	1.6
62	〃	〃	3.2	1.8	12.8	A-3 138	2.6
63	〃	〃	1.45	1.4	2.7	A-2 65	1.55
64	〃	〃	1.9	1.1	7.2	A-2 137	3.05
65	〃	〃	4.45	3.5	59.6	A-1 72	4.05

ら，49や53のように中型のもの，それ以外の小型のものがある．石質ごとの内訳は，黒曜石５点，チャート２点，流紋岩１点である．素材となる剥片には，52や56のような縦長剥片，49～54のような横広剥片，55のような横長剥片がある．

【石核】（第23図57～65）

石核は，９点出土している．全資料の中に占める割合は，４％である．いずれも小型の剥片が剥ぎ取られたもので，すべて黒曜石であった．狸谷遺跡の石核の傾向に類似しているので，その分類に従って説明していこう．

第１類（57・58）

剥片や分割礫を素材とした偏平な石核であるが，久保遺跡では剥片素材のもののみが出土している．剥片剥離は，打面を石核の縁辺に沿って回りながら転移されていくものである．その結果，石核の表面には求心的な剥離痕が残される．柏原型石核として呼称され，縄文時代早期の石核を代表する例である．

第２類（59～64）

偏平な石核である．素材には，剥片と原石と分割礫がある．剥片剥離は，打面の転移を頻繁におこなわないところに特徴がある．したがって，石核原型の形状は，良く保持される．

第３類（65）

３類は，両刃礫器の刃部作出剥離に似た状態で剥片剥離が進行していく石核である．原型は，

円礫である.

3　まとめ

久保遺跡では，縄文時代早期と前期前半と後期前半に位置付けられる土器が検出された．しかし，そのほとんどは，無文土器ないし土器の無文部であり，その時期決定が困難となっている．ただ，その資料も胎土や焼成の特徴からすると縄文時代早期の土器に相当しそうで，久保遺跡の主体を占める時期は早期でありそうだ.

縄文時代早期の土器は，平栫式土器と円筒形条痕土器および器面に成形痕としての貝殻条痕が残されている貝殻条痕土器である．そして，無文の土器のほとんどは，その特徴からこの中の円筒形条痕土器の破片であると考えられる．石器には，石鏃，石槍，削器，石錐，楔形石器，磨製石斧，磨石・敲石，二次加工ある不定形石器，使用痕ある剥片がある．石鏃の形状は，二等辺三角形を中心にして三角形が加わり，その基部は，浅い抉り入りやＶ字形・Ｕ字形の凹基式がほとんどである．中でも，二等辺三角形でＵ字形の凹基式石鏃がもっとも多く，未加工品を除いて基部を残す石鏃18点の中の半数をしめている．この石鏃は，縄文時代早期を特徴付けるものである．また，石鏃全体の様相も，山江村狸谷遺跡，大丸・藤ノ迫遺跡（木崎・隈・中原1976），人吉市天道ケ尾遺跡（西住1990）のそれに良く類似している．おそらく，石鏃のほとんどの資料が早期に属すると捉えることができそうである．石槍は，縄文時代早期の特徴的な石器である．また，磨製石斧も狸谷遺跡や大丸・藤ノ迫遺跡の例に近く，その型式的特徴から早期に属するものであろう．削器，石錐，楔形石器，磨石・敲石，二次加工ある不定形石器，使用痕ある剥片は，時期的に限定することはできない．しかし，土器や石鏃のほとんどが早期に入ることから考えると，この中のかなりの石器が土器や石鏃とほぼ同じ時期に属すると理解されよう.

早期の遺構には，集石３基がある．１号集石は，下部構造である土坑底面（シラス）が熱を受けて変色・変質しているので，明らかに炉として使用されていたようである．前項でも述べたように，石組炉が崩壊したものであろう．これに対して，２号と３号の集石は，土坑を下部構造にしているが，火や熱を受けた形跡が認められていない．また，集石の構成礫も角が取れた自然礫で，火を受けた形跡がない．時期的には，いずれの遺構面もアカホヤ火山灰よりも下の層にあたるので，どれもほぼ同時期の遺構とすることができる．そうであるならば，１号集石と２号・３号集石には，機能の違いがあるということになる．狸谷遺跡が確認された集石と配石土坑との関係に近いと理解できるかもしれない.

さて，遺物分布と遺構との位置関係にも注目できる．それは，遺物が分布する範囲の外に遺構が位置しているということである．生活空間の中での場の機能を伺わせて，とても興味深い

事実である．また，その位置関係では遺物群の南隣に集石が作られている．もしも，これに当時の住居跡の位置が判明すれば集落が営まれた季節まで類推できそうである．調査範囲がもう少し広ければ，狸谷遺跡で試みた集落の概念化が具体的にできるはずであった．

前期では，前半に位置付けられる轟Ｂ式土器が出土した．土器も２固体分と少なく，その全体像はわからないが，それぞれ宮本一夫氏のいうⅡｂ類（11・13）とⅢｂ類（12）に相当し，轟ｂ式土器の第２段階（宮本1990）に収められそうだ．アカホヤ火山灰との関係でその時間的な開きがどれほどのものなのかに興味を持つが，球磨・人吉地方では前期の遺跡としてはもっとも古い遺跡の一つとなろう．また，後期の資料も，少なくはあるが出土した．出水式系統の土器と考えられ，その前半期に位置付けられる土器である．資料としては少量なので多くは語れない．

第3節　中世の遺構と遺物

1　遺構と遺物

1号土壙（第24図）

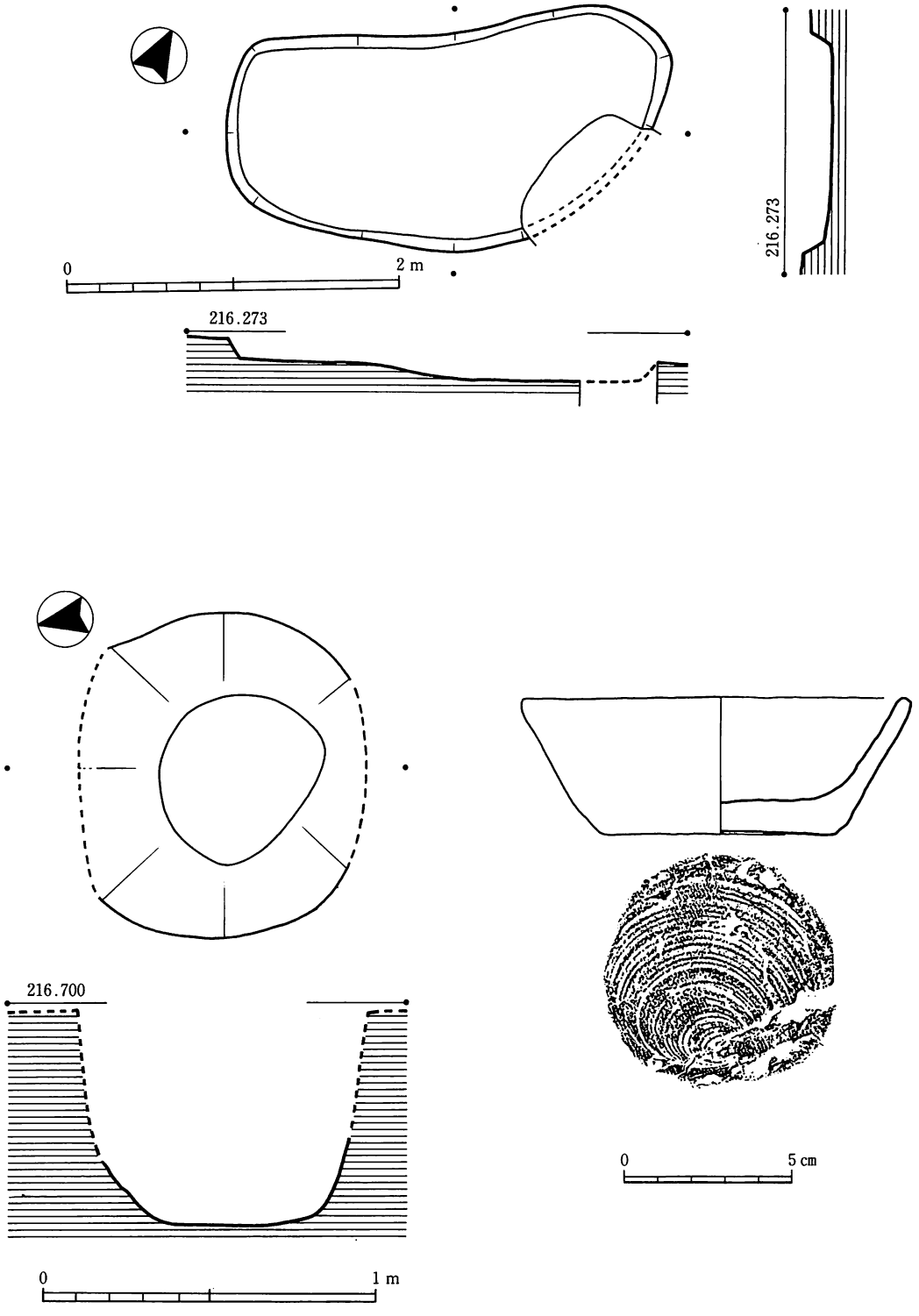
1号土壙は，A－3区にある（第14図）．一部，試掘坑によって壊されていた．土壙の埋土は，粘質を帯びる黒色土と，その下に薄く入り込む黒色土をブロックで混入する黄褐色土であった．平面形は，やや胴張りの長方形である．長辺2.7m，短辺1.3mで，深さは14cmを測る．遺跡が畑地化に伴って大きく削平を受けていたので，大型土壙のわりには浅かった．遺物は，何も出土しなかった．墓壙の可能性が高い．

2号土壙（第24図）

2号土壙は，A－1区にある．縄文時代早期の1号集石を切った状態で検出された．土壙は，イモ穴などの撹乱によって破壊されていて，約半分の上端しか残っていなかった．平面形は円形に近く，直径は0.95mを測る．土壙の残りは，削平の度合いが弱い地点に遺構があったために，1号に比べると良好であった．深さは，65cmである．出土遺物には，供献土器としての土師器が1点出土した．土師器の口径は11.7cm，底径は6cm，器高は4.1cmである．底部は，糸切り底でやや上げ底ぎみであった．墓壙であろう．

2　まとめ

調査によって2基の土壙を確認したことは，上記した．いずれも出土遺物が少ないか皆無のために，はっきりした年代を知ることは容易ではない．そこで，ここでは大まかな時代観を示しておくに止めておきたい．2号土壙から出土した土師器の坏は，上記した数値と底部の特徴を基にすれば，人吉市天道ケ尾遺跡のⅡa層内1号土壙出土土師器の坏A類（西住・本山・隈1989）に類似しているようだ．西住欣一郎氏が共伴遺物を勘案しての型式学的検討を経て，この土師器の年代を「13世紀前半の前後より後の段階」と理解した資料だ．これに従えば，凡そ鎌倉時代の時間幅の中で押さえておいて差し支えないであろう。ただし，1号土壙の年代は，わからない．それは，土壙の構造に違いがあり，2号土壙と同時期として扱うには少々無理があるからだ．それはともかくとして，今回の調査は，現在の大無田集落の成立を考える上でのかっこうの歴史資料を提供したと言えそうである．今後は，当時の集落の所在について追跡の調査が必要になると同時に，片城という字名から予想される中世城の所在確認も併せておこなう必要があろう．そのことを認識する上で，良い機会であった．



第24図　遺構・遺物実測図

第Ⅳ章　総括

久保遺跡では，先土器時代の二つの石器文化や縄文時代の早期・前期・後期の遺構と遺物，および鎌倉時代の遺構と遺物が検出された．調査成果の検討の結果，先土器時代や縄文時代の久保遺跡は集落遺跡として，鎌倉時代の久保遺跡は墓地遺跡として認定することができた．包含層は，縄文時代の第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけてとＡＴ下位のナイフ形石器文化の第Ⅳ層を認定できたが，その他に第Ⅰ層と第Ⅱ層との間に本来は介在していたはずの黒色土層（鎌倉時代）や細石器文化の層である第Ⅳ層を予想することができる．

ここに私たちは，久保遺跡を先土器時代・縄文時代・鎌倉時代という複数の時代の遺構や遺物が重なり合う複合開地遺跡として認識できるようになった．

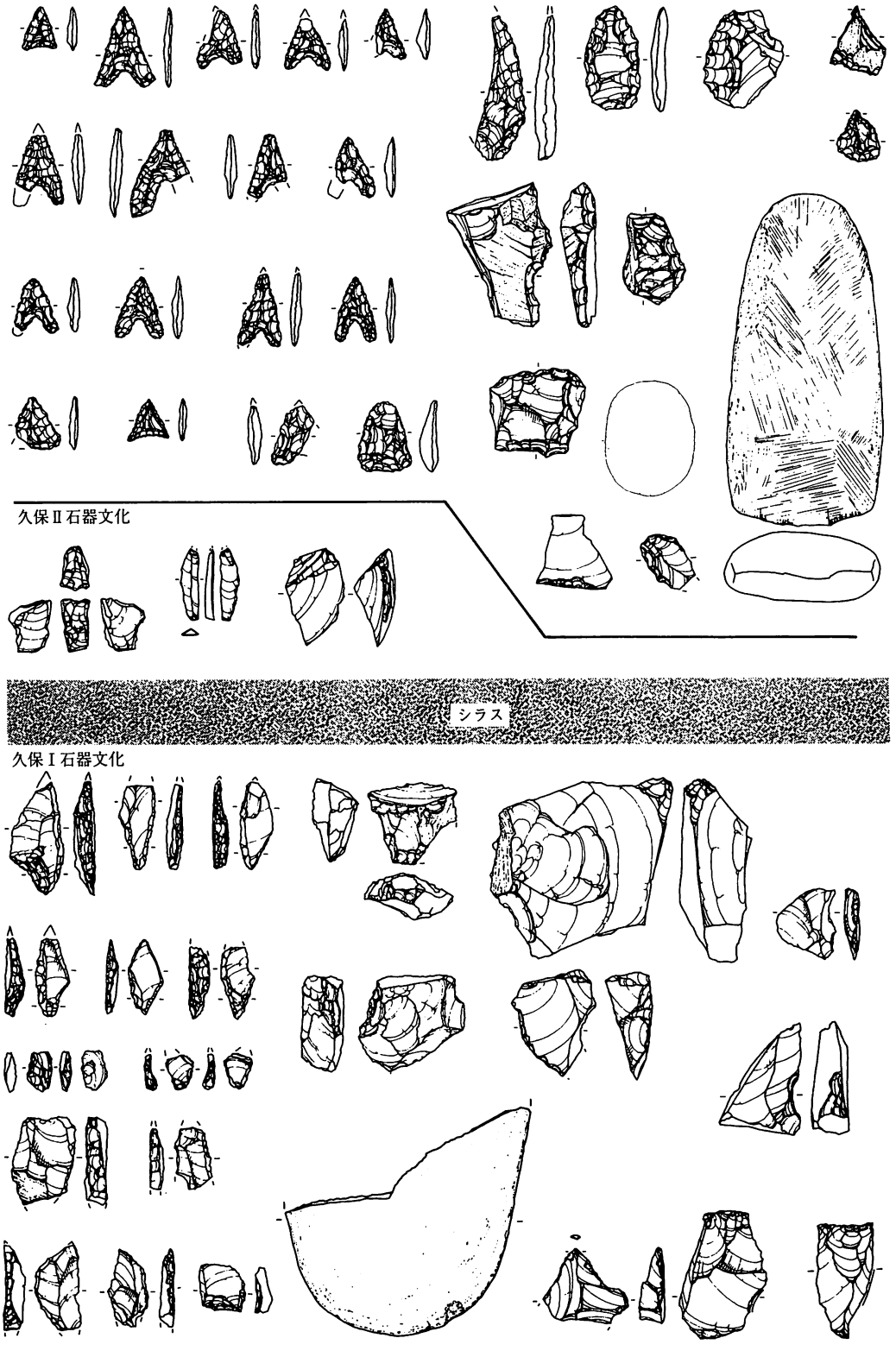
1　先土器時代の久保遺跡

先土器時代では，二つの石器文化を認定できた．一つはＡＴ下位のナイフ形石器文化にあたる石器文化で，もう一つは細石器文化に属する石器文化である．しかし，細石器文化の資料は極めて少なくて，ここでことさら詳述する必要はないと判断するので，ＡＴ下位の石器文化についてだけ整理を試みたい．

久保遺跡の調査で確認したＡＴ下位の石器文化を，久保Ⅰ石器文化と呼ぶ．出土遺物の総数は，417点で，その内訳は，石器48点（12％），石核９点（２％），剥片・砕片360点（86％）である．石材は，黒曜石264点（63％），チャート125点（30％），頁岩17点（４％），安山岩８点（２％），砂岩３点（１％）である．石器組成は，ナイフ形石器20点（42％），掻器１点（２％），削器１点（２％），抉入石器４点（８％），彫器１点（２％），敲石１点（２％），二次加工ある不定形石器２点（４％），使用痕ある剥片18点（38％）によって構成される．茂呂（九州）型ナイフ形石器と部分加工ナイフ形石器を形態組成の中心とする石器文化で，しかもＡＴ直下に出土層があるので，九州ナイフ形石器文化では第Ⅱ期（木崎1988）に相当すると考えられる．そこで，具体的にこの時期を代表する狸谷Ⅰ石器文化と比較検討をおこなって，久保石器文化の特徴を見出してみよう．

出土遺物の内訳は，狸谷Ⅰ石器文化では石器10％，石核２％，剥片・砕片88％である．ほぼ久保石器文化の数値に合致するもので，久保Ⅰ石器文化と狸谷Ⅱ石器文化とはほぼ同じ性格の石器文化であるようだ．

石材ごとでは，狸谷Ⅰ石器文化がチャート58％，黒曜石30％，安山岩９％，砂岩２％，頁岩１％と，久保Ⅰ石器文化とは少々様子が異なっている．つまり，久保Ⅰ石器文化では，黒曜石が63％でチャートが30％であるのに対して，狸谷Ⅰ石器文化では，チャートが58％で黒曜石が30％である．要するに，石材組成の比率の点で，チャートと黒曜石が入れ代わっているのがわかる．



第25図　編年図

それは，第２章第１節でもみたように，狸谷遺跡近くの山地にはチャートの岩脈があって，そこを流れる河川流域や礫層の中でチャートの転石を容易に見つけられるのに対して，久保Ⅰ石器文化の黒曜石の多くが遺跡近くにある白浜産を使用していることと，関連がありそうである．おそらく，各石器文化での石材組成の違いは，各石器文化が位置する地理的な環境に左右されてのこととみなせよう．

次に，石器組成を比較してみよう．狸谷Ⅰ石器文化対久保Ⅰ石器文化では，ナイフ形石器27％対42％，掻器４％対２％，削器６％対２％，抉入石器４％対４％，彫器0.55％対２％，揉錐器0.15％対０，礫器0.3％対０，磨石・敲石19％対２％，石皿・台石３％対０，二次加工ある不定型石器７％対４％，使用痕ある剥片29％対38％である．それぞれの石器が占める石器組成の位置には，それほどの違いがないことがわかる．ただし，その中で，ナイフ形石器の27％対42％と磨石・敲石の19％対２％は目立つ違いであろう．先に見た，石器と石核と剥片・砕片の比率の類似性と併せて，微妙な部分での違いが何を意味するのか今後の検討事項であろう．ただ，そうはいっても狸谷Ⅰ石器文化が384点なのに対して，久保Ⅰ石器文化は48点と検討資料が極端に少ない．資料点数において二つの石器文化の比較は容易ではない．

剥片剥離技法では，石核を問題としよう．前章では，狸谷Ⅰ石器文化で分類された第１類と第２類ａ～ｅに当てはめる形でその整理をしたが，その結果，久保Ⅰ石器文化には第１類，第２ｂ類，第２ｄ類，第２ｅ類と，狸谷Ⅰ石器文化にその片鱗をみせていた第３類が存在することがわかった．このように，二つの石器文化の中の石核には，その類型化でみる限り，特別大きな違いはなさそうである．ただし，久保Ⅰ石器文化の中には，第１類で分類した資料に刃器技法に似たものがみられている．その取扱には充分注意する必要があるが，石器素材の剥片の形状やその他の剥片の様子からみて，刃器技法の存在を積極的に主張するのは止めておこう．久保遺跡を特徴付ける剥片剥離技法は，狸谷Ⅰ石器文化のそれとほぼ同じで，縦長剥片から幅広の縦長剥片や横広の剥片を生産する技法である．

久保Ⅰ石器文化には，ナイフ形石器の形態組成の中に台形石器が入ることも狸谷Ⅰ石器文化と異なる様相である．そこで，ここではそのことについて考えてみたい．

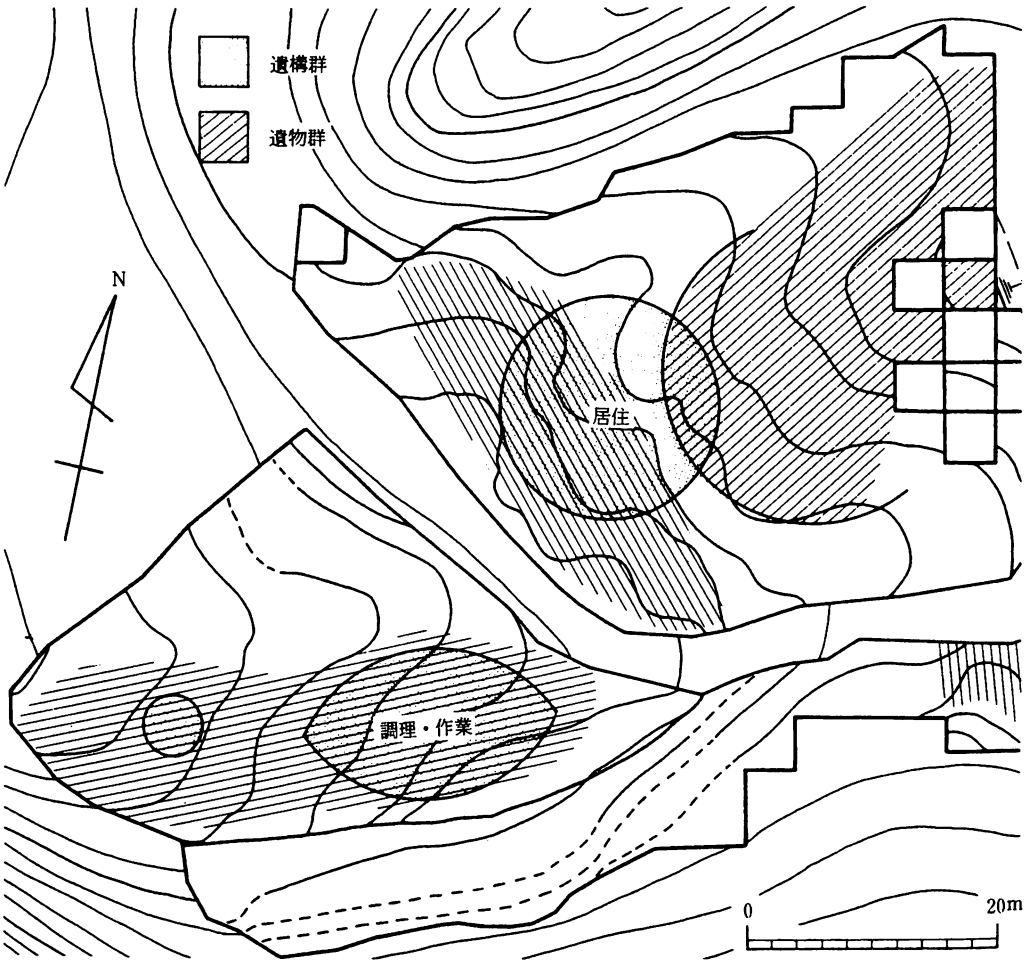
台形石器は，九州ナイフ形石器文化の第Ⅰ期にその存在が確認されている．その調整加工は，刃潰し加工だけではなくて，平坦加工も使われている．例えば，曲野石器文化がその代表例であろう．一方，第Ⅲ期の前半期でも台形石器が存在する．それは，刃潰し加工を駆使されるもので，百花台Ⅳ石器文化がその代表例であろう．ところが，この二つの時期に挟まれた第Ⅱ期の遺跡では，層位的出土例を見出せなかった．そのために，第Ⅰ期と第Ⅱ期前半の台形石器に系統関係を積極的に論ぜなかったのが今日までの現状である．確かに，その存在の可能性を指摘した意見（木崎1989，1991，1992）もあったが，実際にその資料の確認が無ければ，その二つの時期の台形石器が系統関係を辿るのか否かも不透明である．その意味でも，今回の発見は

一つの契機になることは確かであろうし，今後の資料増加の如何によってはより具体的に台形石器の型式変化を跡付けることができるかもしれない．

2　縄文時代の久保遺跡

久保遺跡では，縄文時代早期と前期前半と後期前半の土器が出土した．

早期では，平栫式土器や円筒形条痕土器や条痕土器がある．また，調査で出土した無文の土器のほとんどは，この時期に属するものである．遺構としては，3基の集石が検出された．その中の1基は，明らかに炉として使用された形跡が認められたが，残り2基は炉とは違った性格のものではないかと考えられた．こうした例は，狸谷遺跡でも確認されている事実であり，集落内での人間の活動を考える上で，かっこうの資料となる．また，遺構の位置が遺物の分布範囲とは少々ずれた所にあることも重要である．狸谷遺跡で確認した集落内での「居住域」と



第26図　狸谷遺跡早期集落概念図

「調理・作業域」，その間に挟まれた「広場のような空白部」，および「廃棄場」などの集落景観を，久保遺跡の中に予測することも充分に可能である．調査は，縄文時代早期の集落の一部が対象となっている．したがって，狸谷遺跡でおこなったような集落景観の復元作業は，無理ではあるが，一つの関連資料としての意味は大きい．

石器も多く出土した．石鏃，石槍，削器，石錐，楔形石器，磨製石斧，磨石・敲石，二次加工ある不定型石器，使用痕ある剥片がそれである．ほとんどは，やはり早期に属するものであろう．ところで，ここでの石材利用の仕方に少々おもしろい傾向が伺われる．それは，久保Ⅰ石器文化との比較結果である．久保Ⅰ石器文化では，黒曜石が石器では52%，遺物全体では63.3%と，高い割合を占めていて，二番目に多く使用されているチャート（28%と30%）を大きく引き離していた（第２表）．これは，黒曜石の原産地が近くにあるという，地理的な影響が色濃いのではないかと指摘していた．ところが，縄文時代になると，少々様子が違ってくる．石器での割合39%，すべての関係資料でも34%と，黒曜石が３～４割の利用率であるのに対して，チャートは石器で41%，関係資料で53.2%である．チャートは，黒曜石を凌ぐ割合で利用されているのである．この黒曜石の利用率の低下は，何を意味しているのであろうか．重要な問題ではあるが，やはり球磨・人吉地方での複数遺跡の検討を経る手順が必要である．石器ごとの石材利用の状況を含めて，久保遺跡が提起した課題と言えそうだ．

前期前半では轟Ｂ式土器が出土した．その型式的特徴から宮本一夫氏分類のⅡｂ類とⅢｂ類にあたり，その編年の第２段階に位置づけられそうである．すなわち，これらの土器は，アカホヤ火山灰降灰以後，球磨・人吉地方に現れた土器の中でもっとも古い段階の土器ということになる．また，後期前半の土器は，出水式系統の土器である．いずれもアカホヤ火山灰層中の出土遺物である．

球磨・人吉地方には，火砕流の直撃はなかったものの，大量のアカホヤ火山灰が降り積もった．その影響は，縄文時代だけでなく弥生時代以降にまで残っていることが論じられてもいる（木﨑1992）．影響の度合いを土層の堆積と文化遺物との関係で考えたものがそれである．今回の調査は，アカホヤ火山灰降灰直後の時期に関する資料を提供したわけで，どのような過程を経て人間が球磨・人吉地方に戻ってきたのかを考える資料の一つとなろう．少なくとも，降灰直後，それほど時間をおかずに人びとがこの地方に戻ってきたことは事実である．でも，それがどのような遺跡の規模を持っているのかは，まだまだ不明な部分が多い．久保遺跡を含めて，当該期の遺跡研究は，必要不可欠な作業となろう．

3　鎌倉時代の墓壙について

鎌倉時代ないし時期不明の墓壙２基もみつかった．１基は，確実に鎌倉時代のある時期になり，もう１基は，遺物が無くて時期不明の遺構である．構造上では，鎌倉時代のものは円形を

「調理・作業呈し，そうではないものはやや胴張りの長方形である．

さて，久保遺跡がある大無田は，古くからその村落の存在が確認されている．例えば，「球磨郡神社誌」では，大同2年（807）に大無田阿蘇神社が草創したという記載がある．この記載をそのまま信用はできないが，この大無田阿蘇神社が相良為続祈願によって文明3年(1471)に再興されている事実は，この神社が室町時代以前に廃絶したことを示すものであろう．また，天正2年（1574）6月2日銘の台座にのる木造地蔵菩薩像が大無田地蔵堂に残っており，室町時代の終末には大無田地蔵堂があったことは確実である．このように，大無田集落は，室町時代にまでその存在を遡らせることができる．

一方，「建久二年（1191）五月三日、良峯師高所領譲状案」という平安時代末から鎌倉時代初めにかけての様子がわかる平川家文書がある．これに，「渡之村」「尾瀬之村」「高野瀬之村」という球磨村内の地名が記載されている．残念ながら，この中に大無田の地名は表記されていないので，この当時に大無田集落の存在を知ることはできない．

このように，大無田集落の成立は，古文書や神社・仏像などの関連資料によって室町時代までは遡ることが明らかになった．そして，久保遺跡での鎌倉時代に属する可能性の高い墓壙の発見は，大無田集落成立の時期をさらに一時代遡らせることになった．今後は，当時の集落の所在についての追跡調査が必要になってこよう．

参考文献

赤瀬恵・椎葉文雄　1979　「村山遺跡調査報告書」　人吉市教育委員会　熊本県人吉
江本直　1983　「曲野遺跡　Ⅰ」　熊本県文化財調査報告　第61集　熊本
　　1985　「旧石器時代研究の現状と課題」『肥後考古』第５号　肥後考古学会　熊本
木崎康弘　1988　「九州ナイフ形石器文化の研究　－その編年と展開」『旧石器考古学』37　旧石器文化談話会　京都
―――　1989　「姶良Tn火山灰下位の九州ナイフ形石器文化」『九州旧石器』創刊号　九州旧石器文化研究会　福岡
―――　1991　「九州地方の様相」『石器文化研究』3　石器文化研究会　神奈川県平塚
―――　1992　「九州からみた白石編年と佐藤編年」『石器文化研究』4　石器文化研究会　神奈川県平塚
―――　1992　「アカホヤ火山灰が残したもの　－人吉盆地内における生活環境修復への過程」『人間・遺跡・遺物』　発掘者談話会　千葉
―――・隈昭志・中原由子 1986「大丸・藤ノ迫遺跡」熊本県文化財調査報 第80集　熊本
　　1987　「狸谷遺跡」　熊本県文化財調査報告　第90集　熊本
球磨村誌編さん委員会編　1987　「球磨村誌」　熊本県球磨
熊本県　1985　「球磨川流域環境利用ガイド」　熊本
熊本県企画開発部　1982　「土地分類基本調査」　熊本県
椎葉文雄・松舟博満・菖蒲和弘　1985　「アンモン山遺跡」　人吉市教育委員会　熊本県人吉
橋昌信　1985　「駒方古屋遺跡　発掘調査報告書」　別府大学付属博物館　大分県別府
鶴嶋俊彦　1988　「村山闇谷遺跡発掘調査報告書」　人吉市教育委員会　熊本県人吉
土壌調査研究会　1982　「あるいて見る　九州の土壌－土壌調査の方法と利活用」　福岡
西住欣一郎・隈昭志　1988　「鼓ケ峰遺跡」　熊本県文化財調査報告　第96集　熊本
―――　・本山千絵・隈昭志　1989　「天道ケ尾遺跡（Ⅰ）」　熊本県文化財調査報告　第103集　熊本
―――　・1990　「天道ケ尾遺跡（Ⅱ）」　熊本県文化財調査報告　第111集　熊本
人吉市教育委員会　1991　「人吉市遺跡地図」　熊本県人吉市
古森政次　1982　「熊本県下新発見の旧石器時代遺跡について」『旧石器考古学』24　旧石器文化談話会　京都
―――　1985　「中九州の火山灰」『考古学ジャーナル』242　ニューサイエンス社　東京
文化庁文化財保護部編　1981　「全国遺跡地図　43熊本県」　財団法人　国土地理協会　東京
松舟博満　1982　「永野の旧石器」『郷土』第10号　免田郷土研究会　熊本県免田
―――　1983　「消される遺跡地」『郷土』第11号　免田郷土研究会　熊本県免田
―――　1983　「シラスの下の文化層」『くまひと』第３号　熊本県人吉
―――・木崎康弘 1982「熊本県球磨・人吉地方の先土器時代資料について」『肥後考古』第２号　肥後考古学会　熊本
宮本一夫　1990　「轟Ｂ式土器の再検討－京都大学文学部博物館収蔵資料を中心に－」『肥後考古』第７号　肥後考古学会　熊本
山崎純男・小畑弘己　1983　「柏原遺跡群　Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告　第90集　福岡

報　告　書　抄　録

フリガナ	クボイセキ
書名	久保遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第125集
編著者	木﨑康弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年	1993年3月10日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
久保（クボ）	球磨郡（クマグン）球磨村（クマムラ）大字三ケ浦（サンガウラ）		70-19			H.1.3.6 ～ H.1.4.26	150㎡	農免農道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
久保	集落	先土器時代		ナイフ形石器，掻器，	九州でも調査例が少ないＡＴ下
		ナイフ形石		削器，彫器，抉入石器	位のナイフ形石器文化の調査で
		器文化		敲石	ある．約１ｍほどの無遺物層で
		細石器文化		細石核，細刃器，彫器	ある入戸火砕流に覆われた状態
	集落	縄文時代			での検出例は，山江村狸谷遺跡
		早期	集石	平栫式土器，	以来として注目される．
				石鏃，石槍，削器，石錐	
				磨製石斧，磨石・敲石	
		前期		轟Ａ式土器	
		後期		出水式土器	
	墓地	鎌倉時代	土壙	土師器坏	

CONTENTS

Preface

Introduction

I Outline of excavation

1 Preparatory operations

2 Process of investigation

II Outline of Kubo site

1 Environmental conditions

1 Geographical environment

2 Historical environment

2 Summary of the site

3 Stratigraphy

III Results of investigation

1 Palaeolithic artifacts

1 Kubo I lithic culture

2 Kubo II lithic culture

3 Summary

2 Jomon remains

1 Archaeological features

2 Artifacts

3 Summary

3 Kamakura remains

1 Archaeological Features and artifacts

2 Summary

IV Discussions based upon the investigation materials

1 Problems of the kubo Palaeolithic cultures

2 Problems of the Kubo Jomon cultures

3 Problems of the Midieval history concerning the Kuma and Hitoyoshi area

LISTS OF FIGURES

Fig.1 program of new agricultural road

Fig.2 Topographical map centering the Kubo site

Fig.3 Distribution map of the natural stone home in southern part of Kumamoto Prefecture

Fig.4 Distribution map of the selected Prehistorical and Historical remains

Fig.5 Transect

Fig.6 Statigraphy

Fig.7 Palaeolithic stone tools

Fig.8 Palaeolithic stone tools

Fig.9 Palaeolithic stone tools

Fig.10 Palaeolithic stone tools

Fig.11 Palaeolithic stone tools

Fig.12 Palaeolithic stone tools

Fig.13 Palaeolithic stone tools

Fig.14 Distribution map of artifacts and featuresd

Fig.15 Stone arrangement No.1

Fig.16 Stone arrangement No.2

Fig.17 Stone arrangement No.3

Fig.18 Jomon potteries

Fig.19 Jomon stone tools

Fig.20 Jomon stone tools

Fig.21 Jomon stone tools

Fig.22 Jomon stone tools

Fig.23 Jomon stone tools

Fig.24 Archaeological remains of Kamakura Age

Fig.25 Chronogical figure of the kubo I and II lithic cultures

Fig.26 Model of the Earliest Jomon settlement at Tanukidani

CHARTS AND TABLES

1 Inventory of Prehistoric and Historic Sites

2 Kubo I lithic assemblage

3 Statistics on Palaeolithic stone tools

4 Statistics on Palaeolithic stone tools

5 Kubo Jomon lithic assemblage

6 Statistics on the Jomon stone tools

SUMMARY

Kubo Site is located at Sangaura of Kuma Villege, the southern part of Kumamoto Prefecture, a central part of Kyushu Island. The site is situated on the projecting terrace with height of 210 to 220 meters, facing east along the U River (Unogou), a branch of the well-known Kuma River. The rescure excavation was made mainly by the kumamoto Prefectural Board of Education, because of the construction of the new aguricultural road by the Kumamoto Aguricaltural Administration Department. Many of the finding belonging to the Palaeolithic, Jomom and Medival Age were produced from Kubo Site through this investigation. Kubo Site has five natural stratigraphies as follows.

Layer Ⅰ : a black humus.

Layer Ⅱ : a yellowish brown soil, so-called Akahoya Volcanic Ashes (a 6300 years BP by 14C dating), subdivaded into two sub-layers

Ⅱa ; a secondary deposit of the Akahoya Volcanic Ashes

Ⅱb ; a primary deposit of the Akahoya Volcanic Ashes

Layer Ⅲ : a blackish brown soil.

Layer Ⅳ : a brown soil.

Layer Ⅴ : a secondary deposit of the Ito Pyroclastic Flow (21,000 years BP by 14C dating)

Layer Ⅵ : a dark brown clay.

1 Palaeolithic Age

The Palaeolithic artifacts produced from this Site could be subdivided into two different periods by typology and straigraphy. The artifacts belonging to Kubo I lithic culture are excavated in LayerⅥ, directry beneath the Ito Pyroclastic Flow. The artifacts are consist of 48 stone tools and 9 cores, as well as 360 flakes and chips with 20 knife blades (Fig. 7), 1 end scraper (Fig. 8-21), 1 side scraper (Fig. 8-22), 1 graver (Fig. 8-23), 4 notchedscrapers (Fig. 8-24～27), 1 hammer stone (Fig. 8-28), 2 retouched flakes (Fig. 9-29, 30) and 18 utilized flakes (Fig. 9-31～48).

20 Knife blades could be divided into three groups, the first is Knife blade with sharpen tips, both side retouched, and natural sharp edges on their top, the secound is knife

blade retouched on the a side or a part of the side, the third is trapeze. The other stone

tools excavated here are so small in number as could not be reflected the whole image of the assemblage.

On the bace of a technological and chronological point of view, Kubo I lithic culture is characterized by the typological assemblage of knife blade before the Ito Pyroclastic Flow accumulations, and could be deduced to the Stage II of the knife blade culture in Palaeolithic kushyu.

The artifacts belonging Kubo II lithic culture collected from surface survey consist of 3 stone tools, including 1 microcore, 1 microblade and 1 graver, and could be seemingly contained in Layer VI by the typological considerations.

2 Jomon Age

Layer III produced 3 stone arrangements dated back to the Earliest Jomon, whichmight be a hearth for the cooking or an any other use for kitchen .

70 pottery fragments and 233 stone tools are excavated from this layer.
Jomon type potteries unearthed here are as follows.

The Earliest Jomon Pottery

Hiragakoi type (Fig. 18-1~4), cylinderical shaped pottery with incised lines (Fig. 18-10), incised pottery by shell-edge (Fig . 18-10)

The Early Jomon Pottery

Todoroki A Type (Fig. 18-11~13)

The Late Jomon Pottery

Izumi type (Fig. 18-14.15)

233 stone tools could be classified 24 arrow heads (Fig. 19-1~24) , 2 spear heads (Fig. 20-25, 26), 2 side scrapers (Fig. 20-27~28), 2 hand drills (Fig. 20-29, 30), 4 piece esquillees (Fig. 20-31~34), 1 polished axe-like tool (Fig. 20-35), 5 cracking and/or hammer stones (Fig. 21-36 ~40), 7 retouched flakes (Fig. 22-41~47) and 8 utilized flakes (Fig. 22-48~55). Although these stone tools are found from Layer II a t o Layer III, with disturbed conditions, they may be dated bsck to the Earliest Jomon Period in typological assimilation.

3 Kamakura Age

2 pit graves belonging to Kamakura Age are excavated. Grave No 1 has a rectangle with four round corners and sides (Fig. -upper) and grave No. 2 has circlar shape in plan with Haji type pottery as grave goods (Fig. -lower).

These pit-burials may be considered as possible graves of Omuta settlement which could be traced back to Muromachi Age by the historical documents.
However, we need further archaeological and historical studies in this point.

1. 선토기시대

조사의 결과, 두가지의 특징적인 선토기시대의 석기문화가 구보유적에서 발견되었다. 우리는 이들 석기문화를 구보1석기문화, 구보2석기문화라고 부르고 있다.

구보1석기문화에 속하는 유물은, 입호화쇄류의 바로 아래인 제5층에서 발견되었다. 유물의 내용은 석기48점, 석핵9점, 그리고 박편·쇄편 360이다. 48점의 석기는 나이프형 석기 20점, 소기1점, 삭기1점, 조기1점, 결입석기4점, 고석1점, 2차가공한 부정형석기2점, 사용흔적이 있는 박편18점이다.

20점의 나이프형 석기에는 형태적으로 세가지의 종류가 있다. 뾰족한 선단부와 가공된 양측면, 그리고 측면상부의 한곳에는 자연적으로 이루어진 날카로운 면을 갖고 있는 나이프형 석기, 일측면 또는 측면의 일부에 가공되어진 나이프형 석기, 그리고 대형석기이다. 한편, 기타 석기는 조금밖에 발굴되지 않았기 때문에 이들 석기에 대해서는 상세한 설명을 할 수 없다.

요약하면, 구보1석기문화는 나이프형 석기의 형식조성과 유물의 출토층 위치에 의해 특징지어진다. 이 층위적 형식적인 관점에서, 나는 구보1석기문화가 구주 나이프형 석기문화의 제2기에 위치되어진다고 생각하고 있다.

구보2석기문화의 유물에는 세석핵1점과 세인기1점, 그리고 조기1점의 계 3점이 있다. 석기의 출토층위는 불명확하나, 제4층에 이들의 석기가 포함되어져 있으리라고 추정된다.

2. 죠몽시대

죠몽시대의 유구3기가 제3층에서 발견되었다. 이에, 나는 이들이 죠몽시대 조기의 유구라고 이해하고 있다. 유구는 모두가 집석이나, 그 유구에 의해 두종류의 기능이 있다고 생각되어 진다 하나의 기능은 조리용의 솥(그릇)이다. 1호 집석이 이에 해당한다. 두번째의 기능은 확실하지는 않으나, 솥이외의 조리시설의 일종이라고 생각되어 진다.

유물로서는 토기조각70점과 233점의 석기가 발견되어 졌다. 토기형식에는 평존식토기, 원봉형조흔토기, 패각조흔토기(이들은 죠몽시대 조기의 토기형식이다), 굉B식토기(죠몽시대 전기의 토기), 출수식토기(죠몽시대 후기의 토기)가 있다. 한편, 석기에는 석촉24점, 석창2점, 삭기2점, 석추2점, 계형석기4점, 마제석부1점, 마석 고석5점, 2차 가공된 부정형석기7점, 사용 흔적이 있는 박편8점이 있었다.

유물은 제2a층부터 제3층에 걸쳐의 토층부터 발견되어 지기 때문에, 시기가 다른 유물이 혼재한 상태로 발견되어 진다고 생각할 수 있다. 그러나, 유적에서 출토된 대부분의 토기와 석기는 죠몽시대 조기의 유물의 특징을 갖추고 있다. 이러한 점으로 부터, 이들의 대부분은 죠몽시대 조기의 유물이라고 이해할 수 있다.

3. 카마쿠라시대

카마쿠라시대의 유구2기도 발견되었다. 묘광이다. 1호 토광의 평면형은 네 귀퉁이와 네변이 둥근 모양을 가진 장방형이다. 2호 토광은 원형으로 토사기가 바쳐지고 있다.

금회의 조사는 구보유적의 근처에 있는 대무전집락의 성립을 생각할 수 있는 것으로 좋은 기회였다. 왜냐하면, 우리들은 이 집락이 무로마치시대에 이미 성립되어 있던 것으로 알고 있던 것이었으나, 이 발견으로 이 집락의 성립이 카마쿠라시대에 거슬러 올라가는 것을 우리들은 알게 되었기 때문이다. 금후로도 조사가 계속되기를 희망한다.

— 요약 —

구보유적은 큐슈섬의 중앙부인 쿠마모토현 구마군 구마촌 산가우라에 있다. 표고는 ２１０～２２０ｍ이다. 유적은 구마천 (川) 의 지류인 우노고우의 서쪽 구릉의 선단부에 위치한다. 발굴조사는 쿠마모토현 농정부의 농로건설에 수반되어 쿠마모토현 교육위원회가 행했다. 조사의 결과, 구석기시대, 죠몽시대, 카마쿠라시대의 유구와 유물이 발견되었다.

유적의 퇴적물은 다섯 층으로 나누어 진다.

제１층　흑색매몰토

제２층　황갈색토. 아카호야화산석회 (Ｃ－１４년대에서 약 ６，３００년전) 의 층으로 두개의 층으로 나누어 진다.

제２-1층　아카호야화산석회의 2차 퇴적층

제２-2층　아카호야화산석회의 1차 퇴적층

제３층　흑갈색토

제４층　갈색토

제５층　입호화쇄류 (Ｃ－１４년대에서 약２１，０００년대) 에서, 그 2차 퇴적물

제６층　암갈색 점질토

写　真　図　版

図版１　遠望・近景

１．遠望

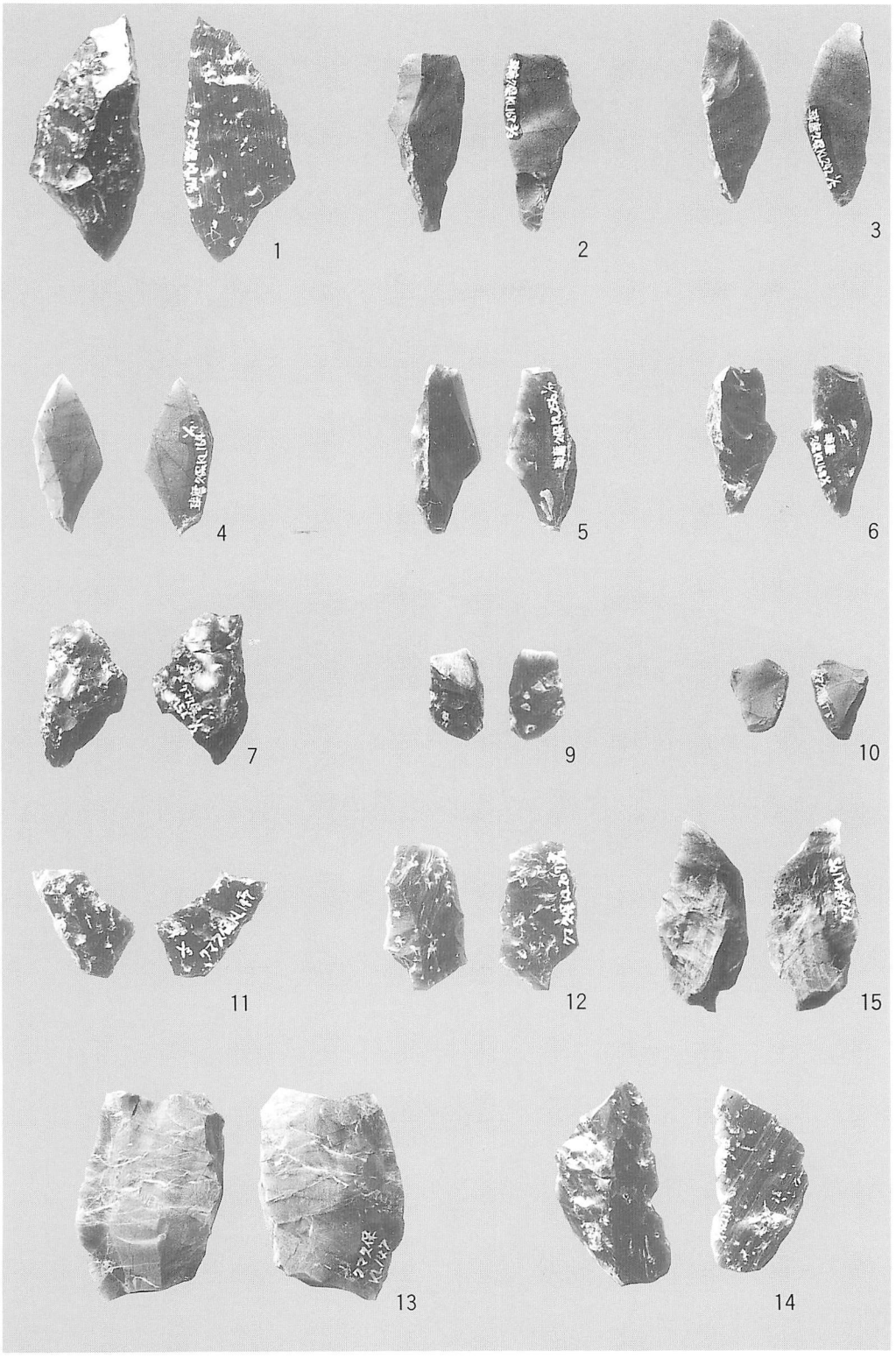
２．近景（自動車付近）

図版２　近景

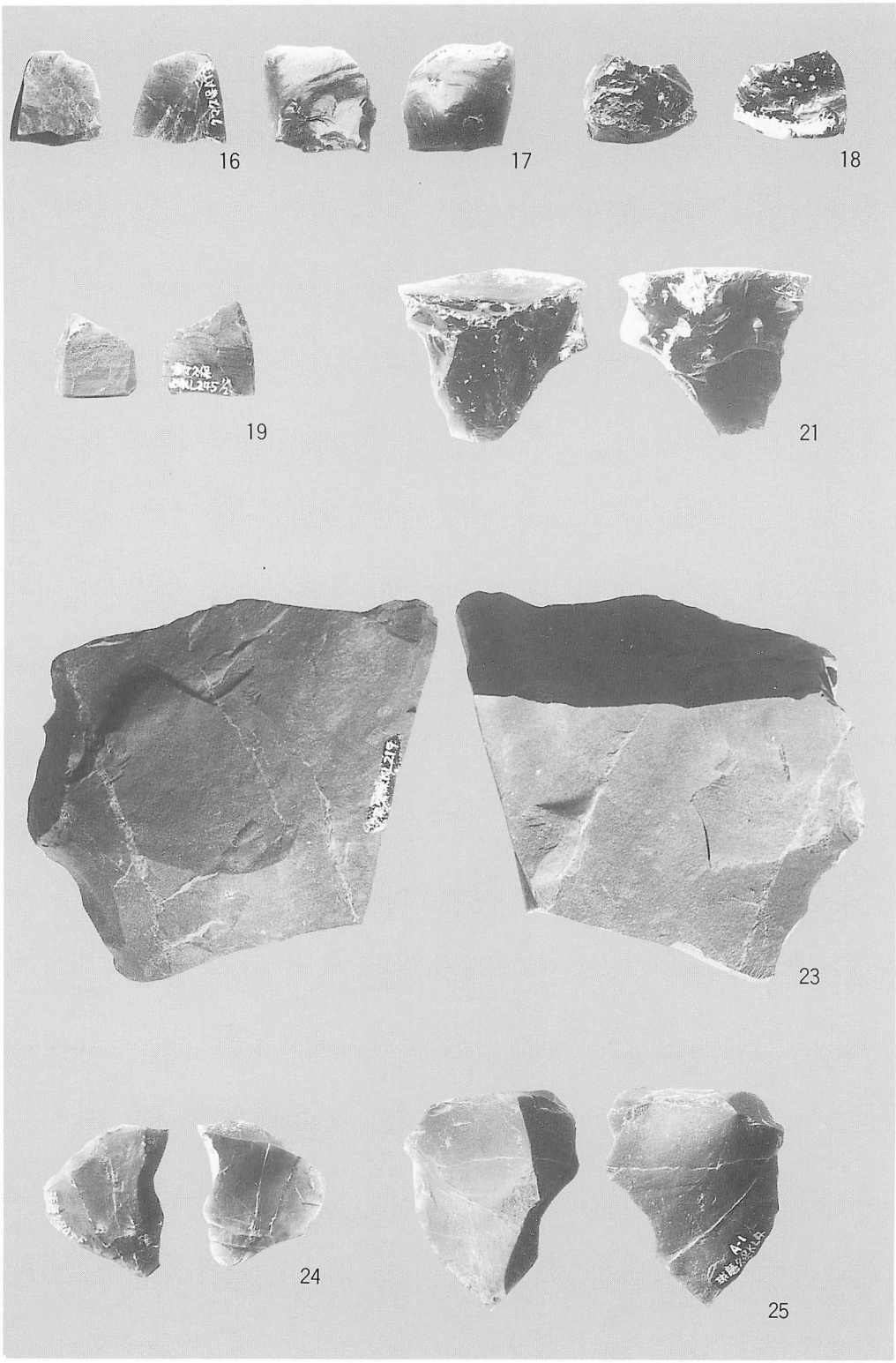
１．近景

２．近景

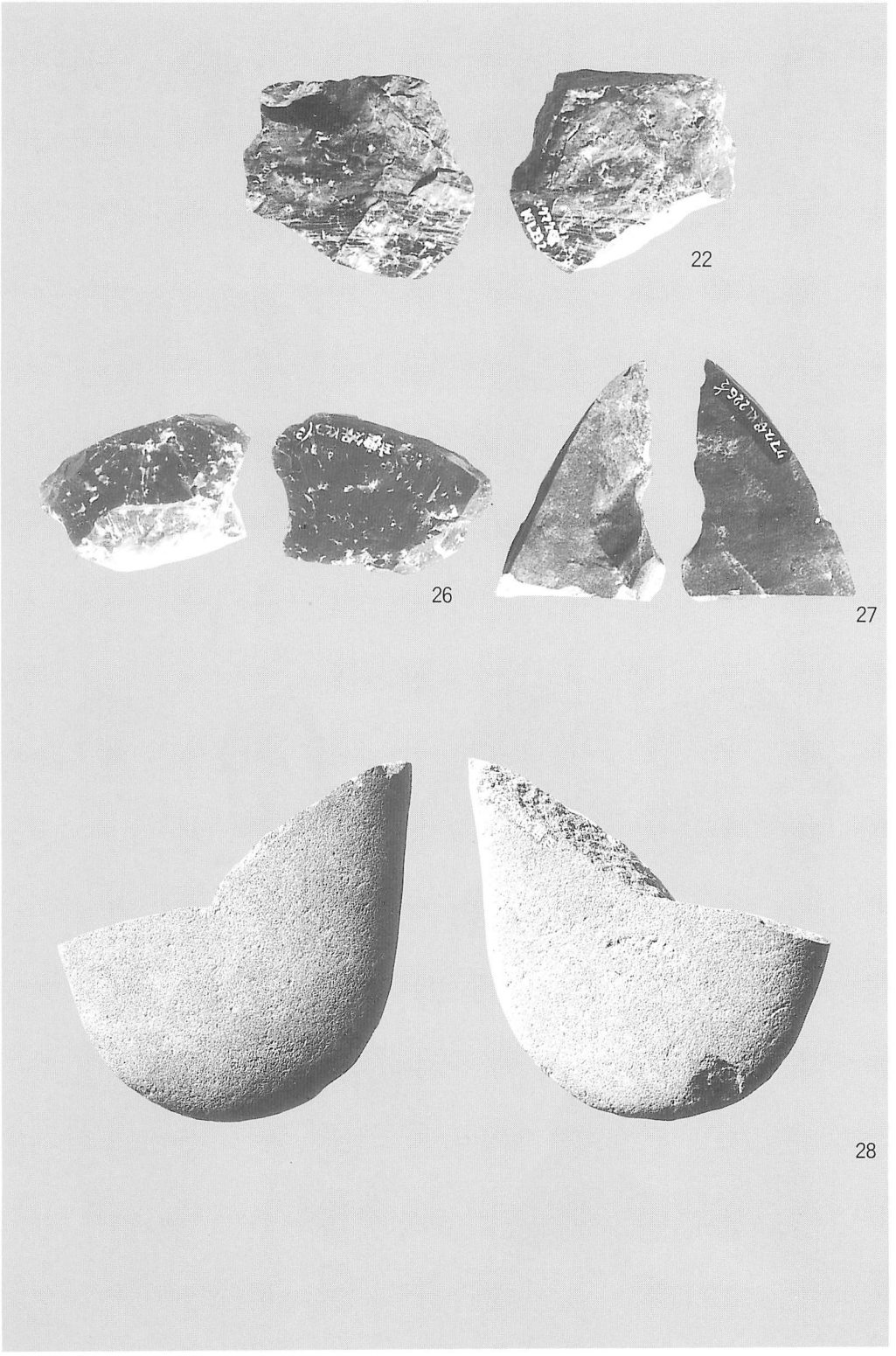
図版３　久保Ⅰ石器文化の石器（ｓ＝1／1）



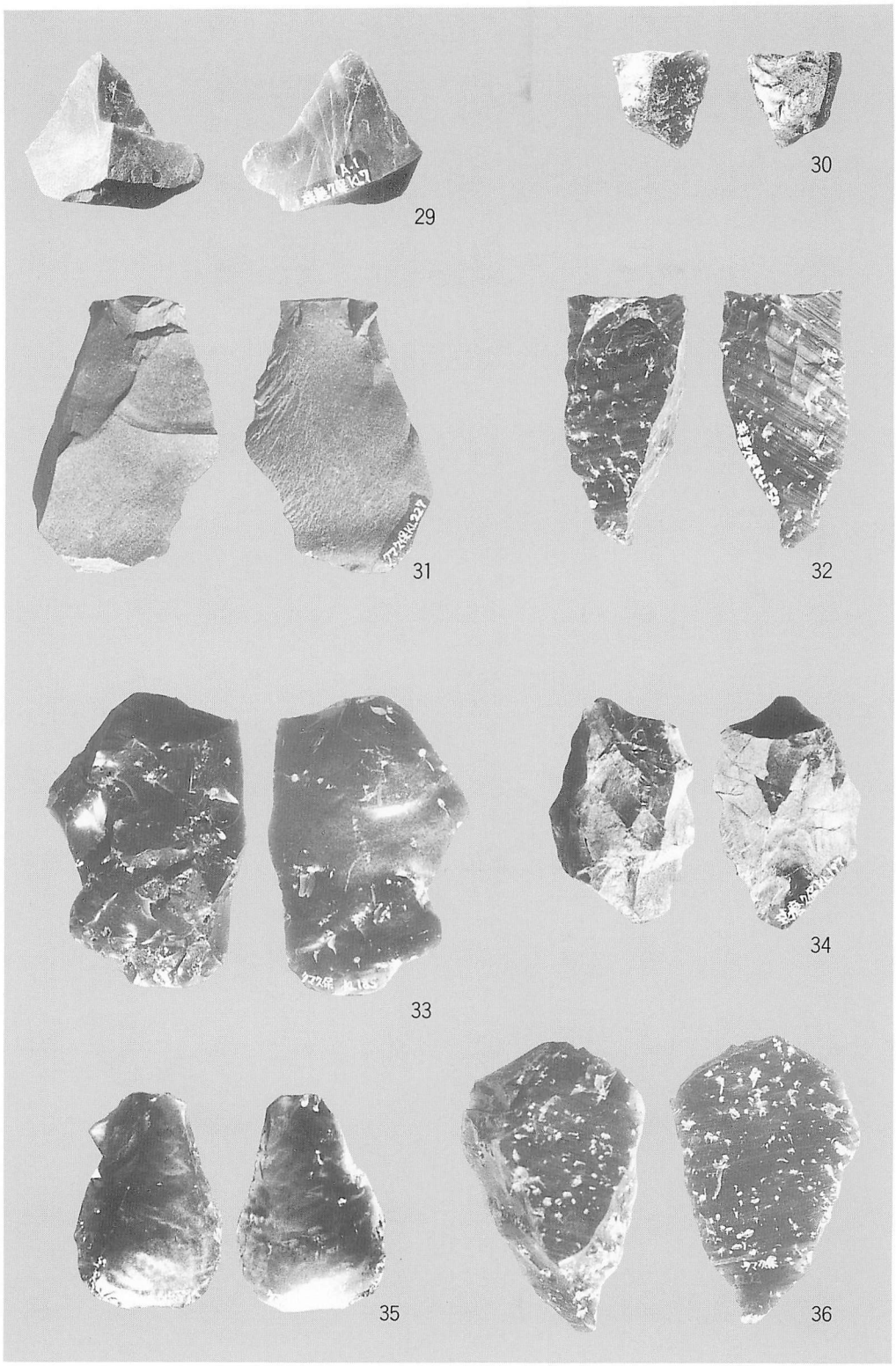
図版４　久保Ⅰ石器文化の石器（ｓ＝1／1）



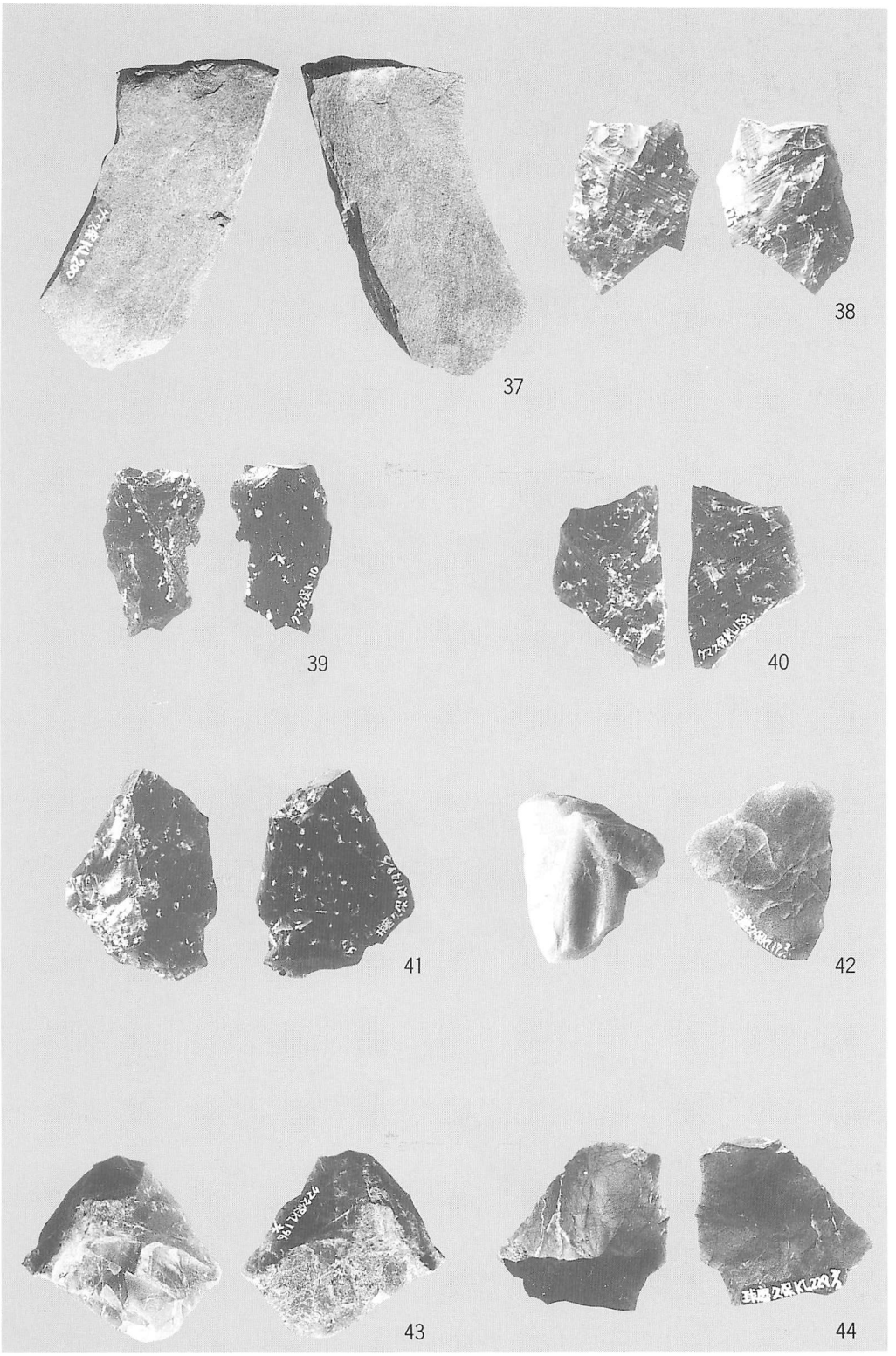
図版５　久保Ⅰ石器文化の石器（28は2／3で他は1／1）



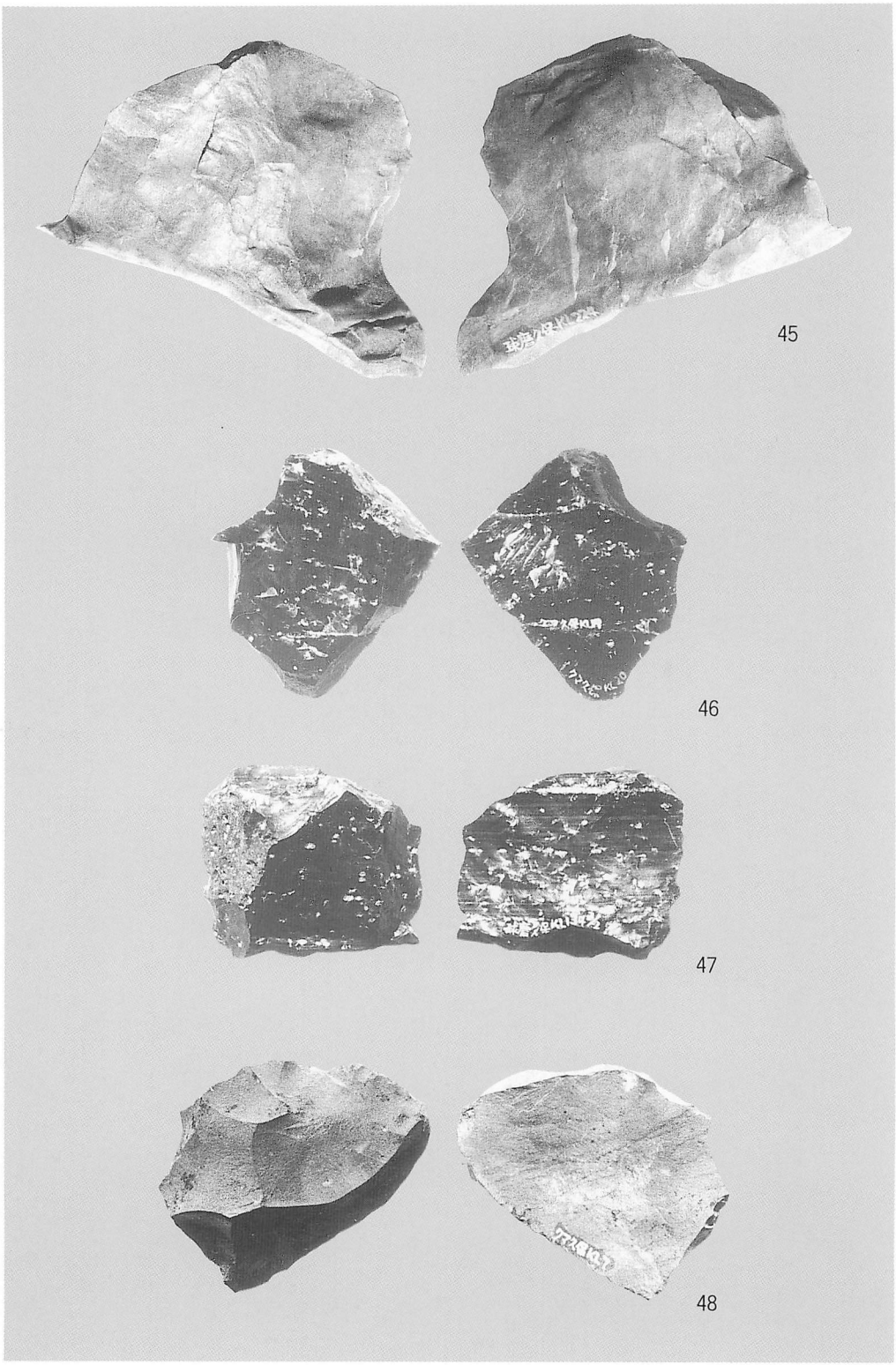
図版６　久保Ⅰ石器文化の石器（Ｓ＝1／1）



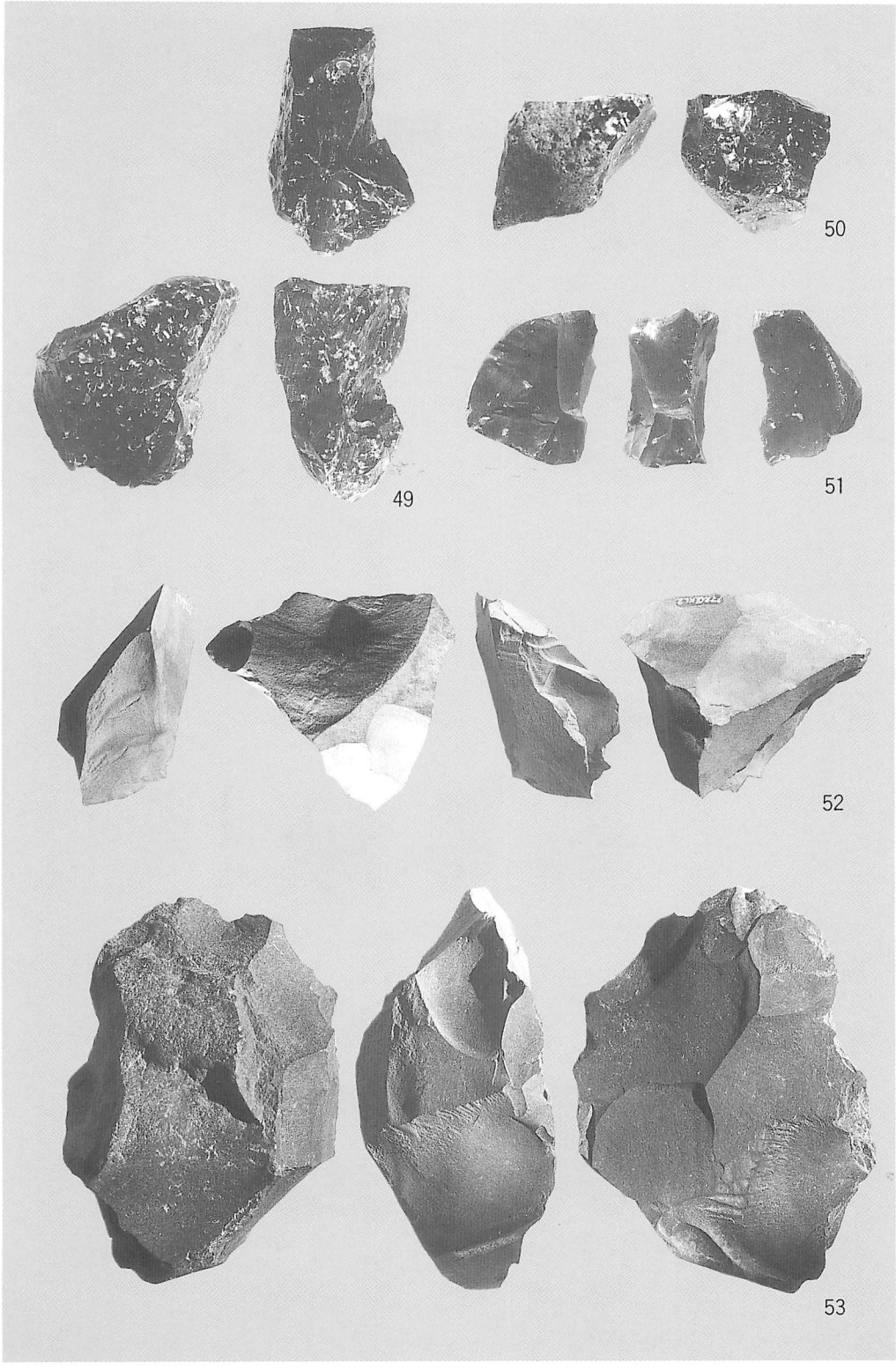
図版７　久保Ⅰ石器文化の石器（Ｓ＝1／1）



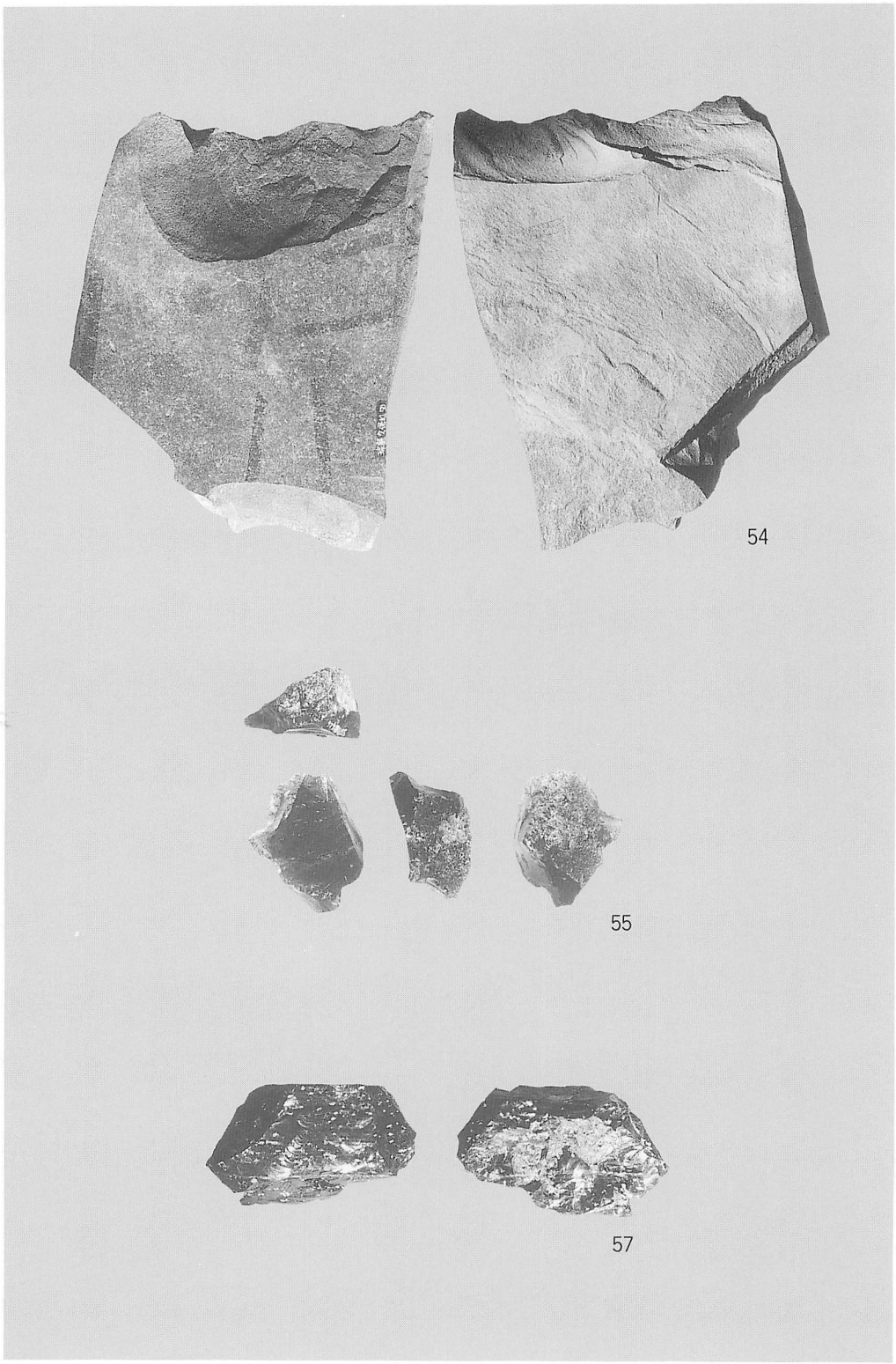
図版８　久保Ⅰ石器文化の石器（Ｓ＝1／1）



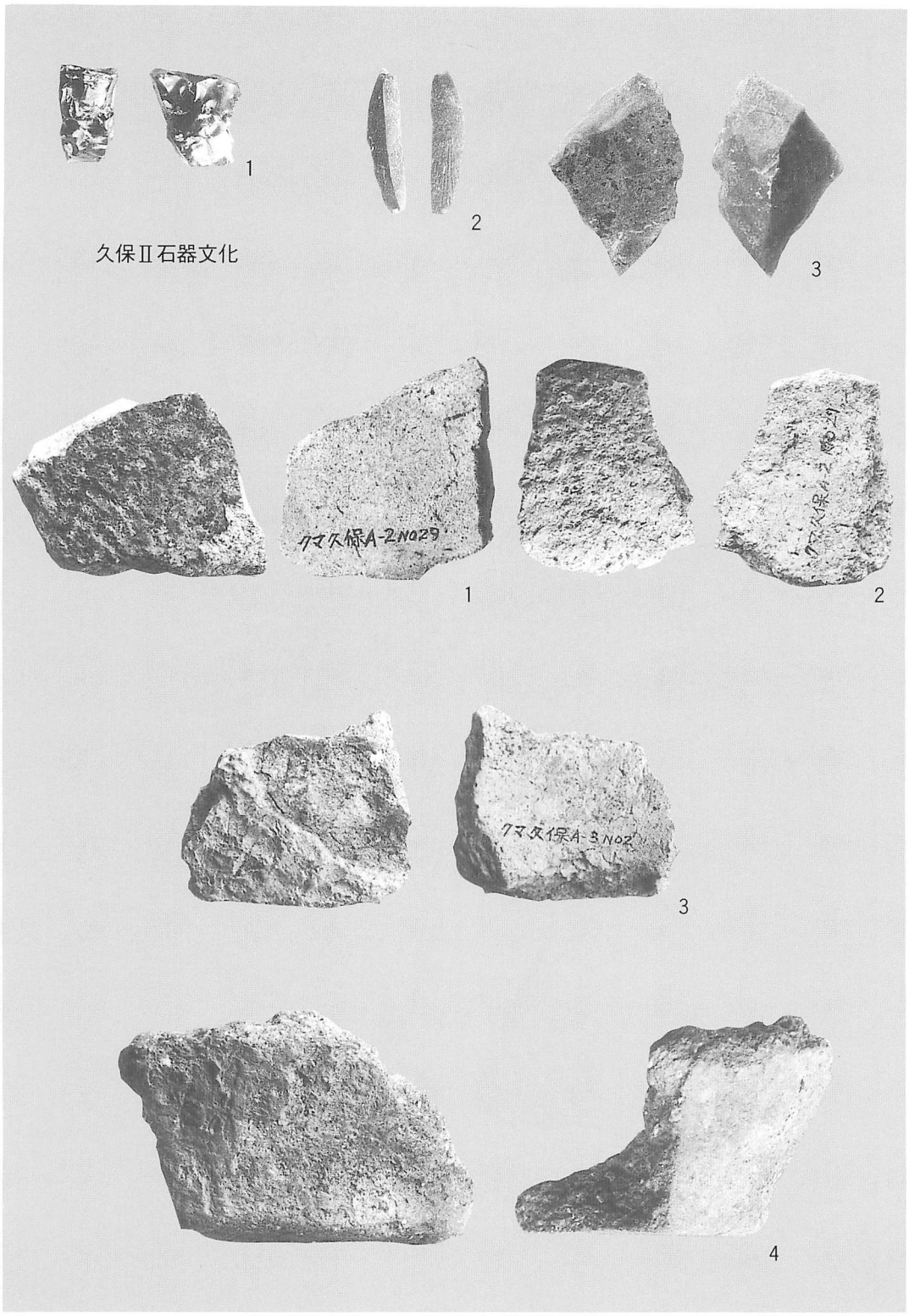
図版９　久保Ⅰ石器文化の石器（Ｓ＝2／3）



図版10　久保Ⅰ石器文化の石器（Ｓ＝2／3）

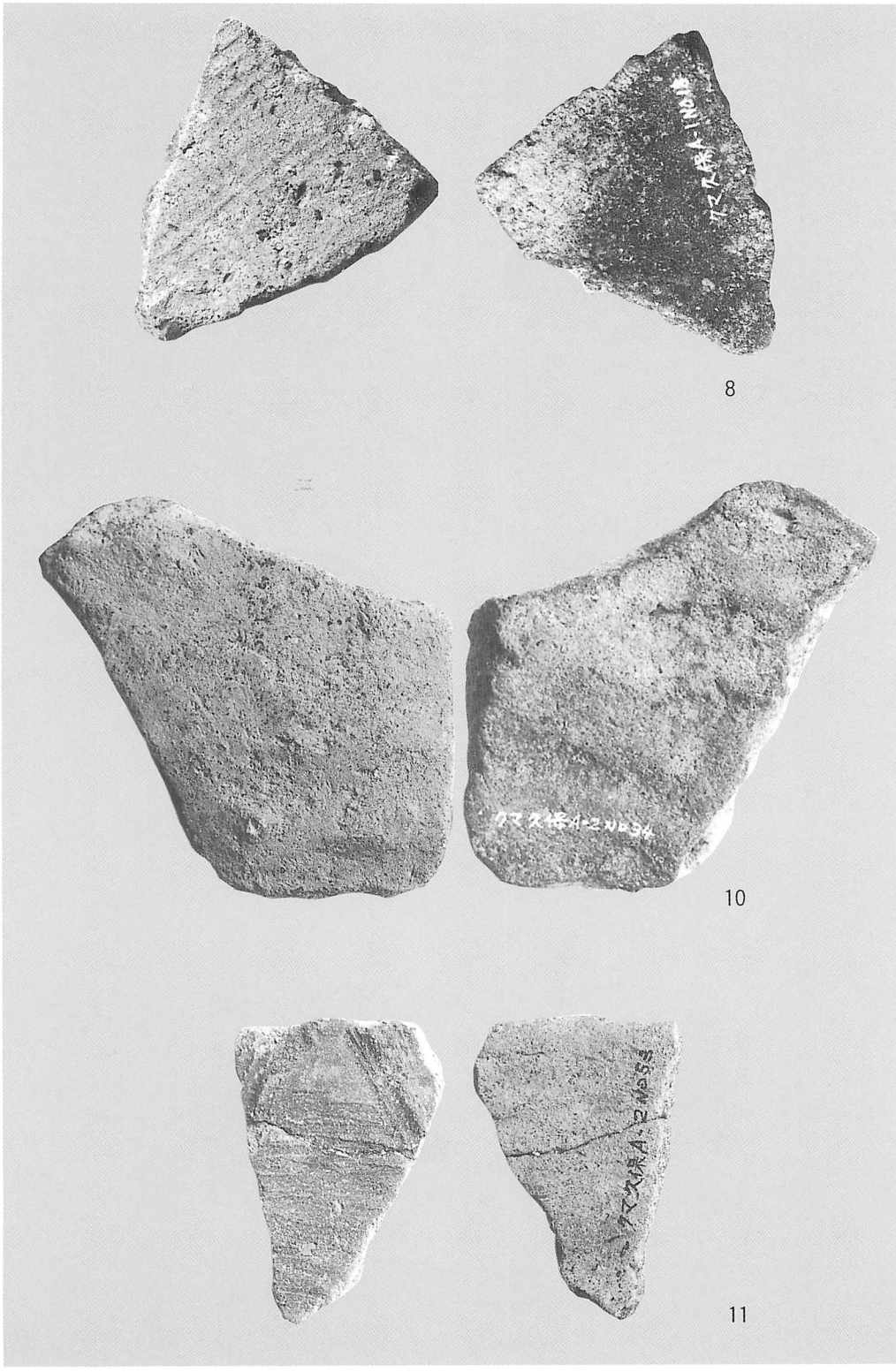


図版11　久保Ⅱ石器文化・縄文時代の遺物（Ｓ＝1／1）

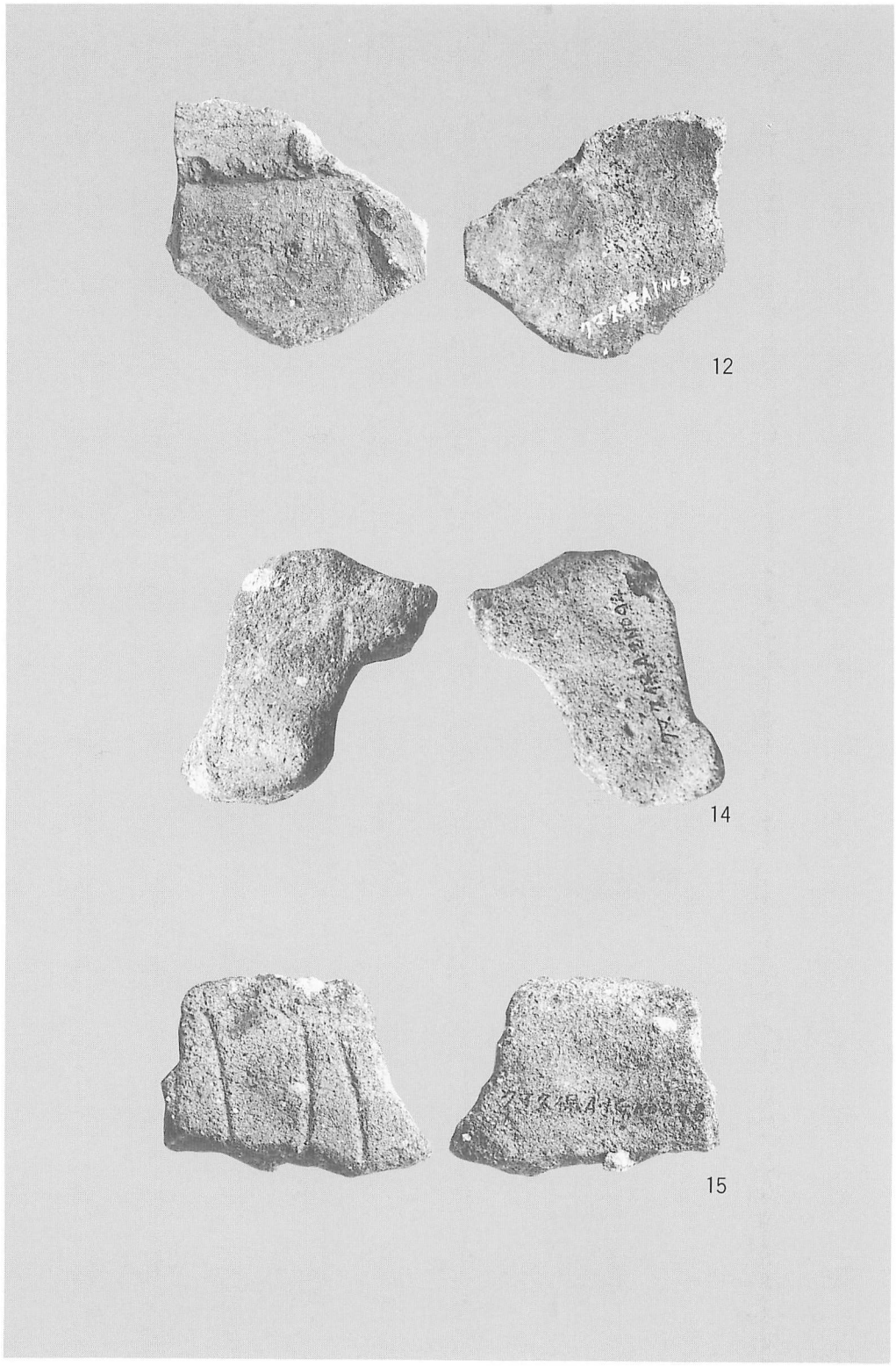


図版12　縄文時代の土器（S＝1／1）

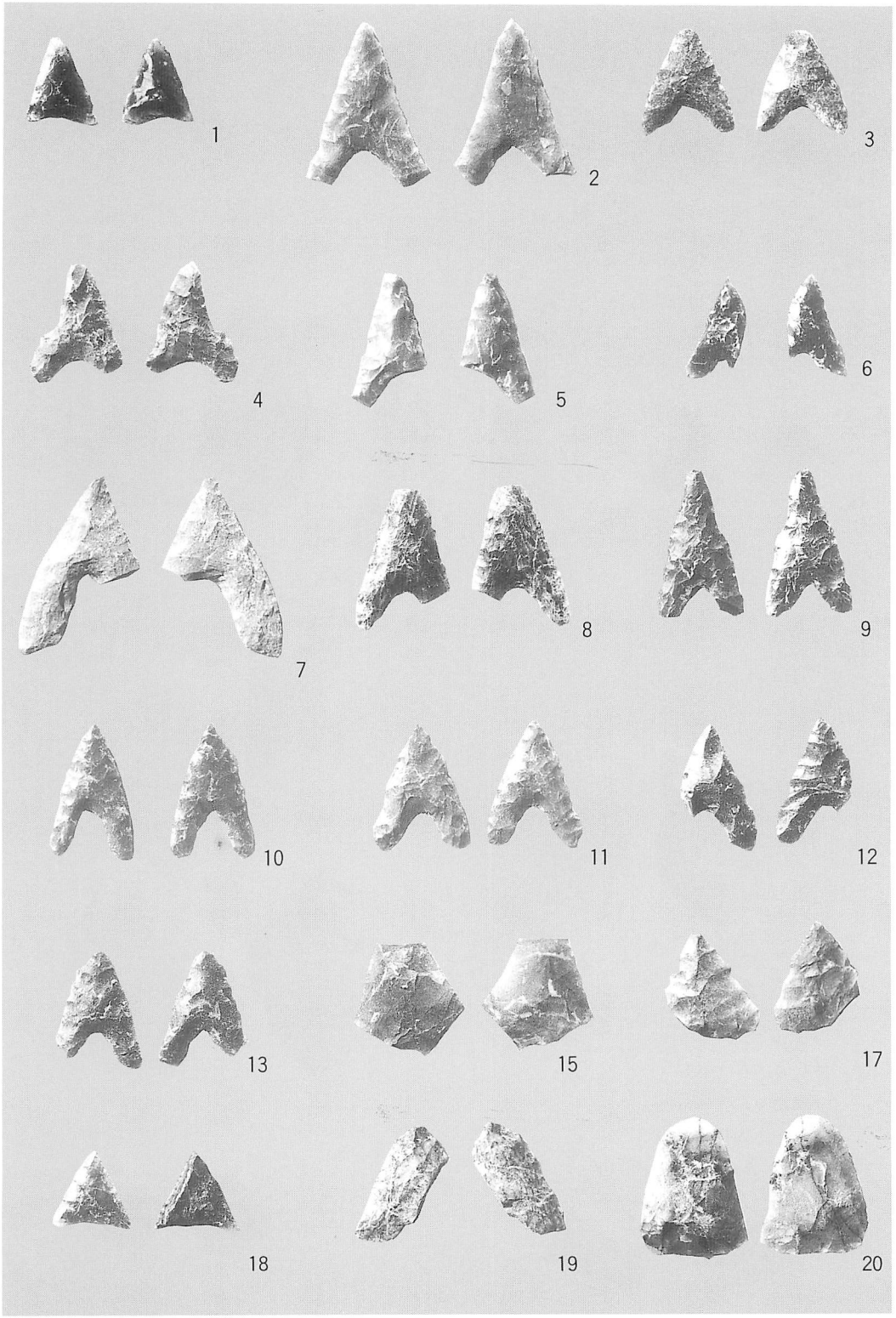
図版13　縄文時代の土器（Ｓ＝1／1）



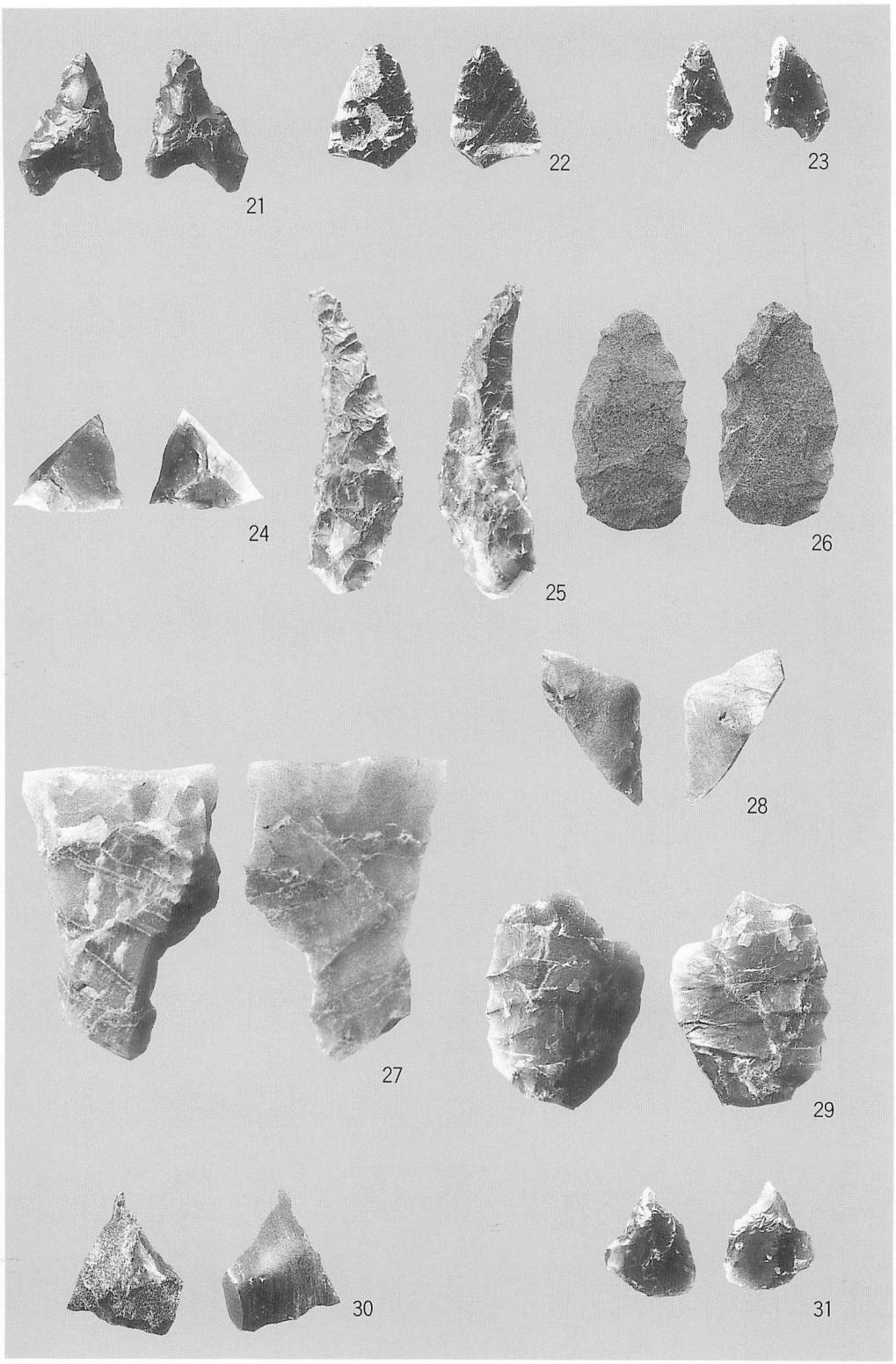
図版14　縄文時代の土器（S＝1／1）



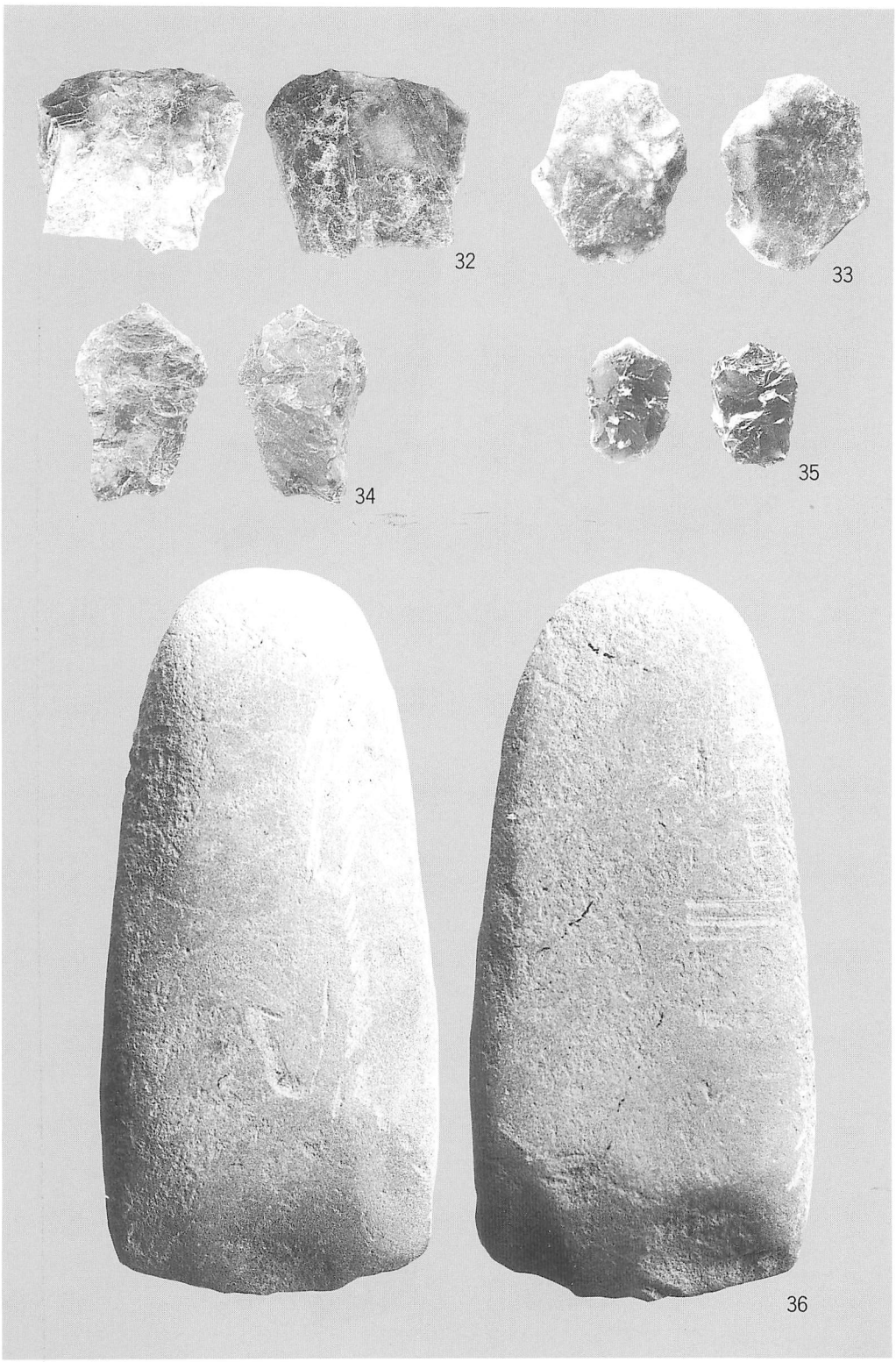
図版15　縄文時代の石器（Ｓ＝1／1）



図版16　縄文時代の石器（Ｓ＝1／1）

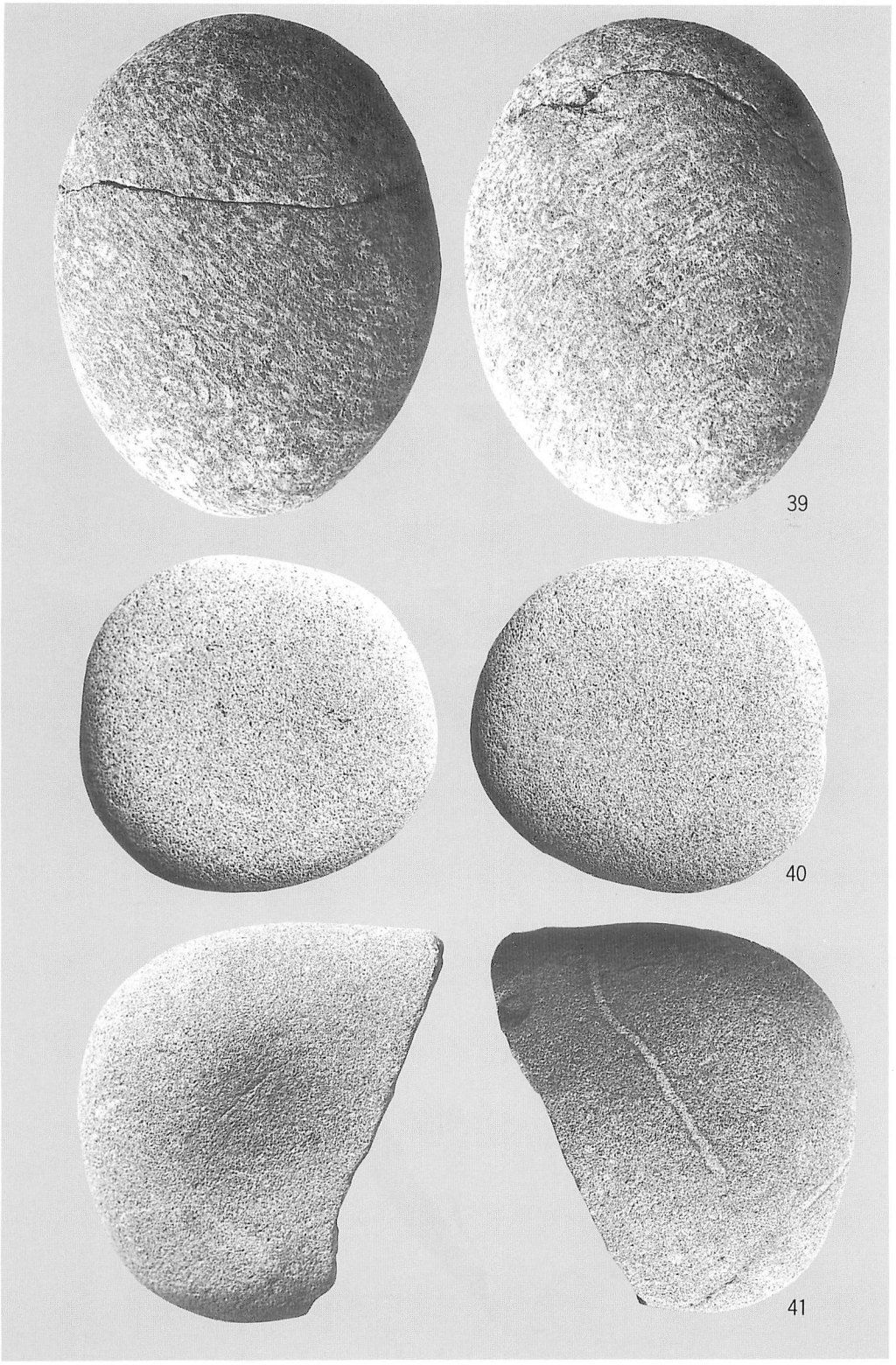


図版17　縄文時代の石器（Ｓ＝1／1）

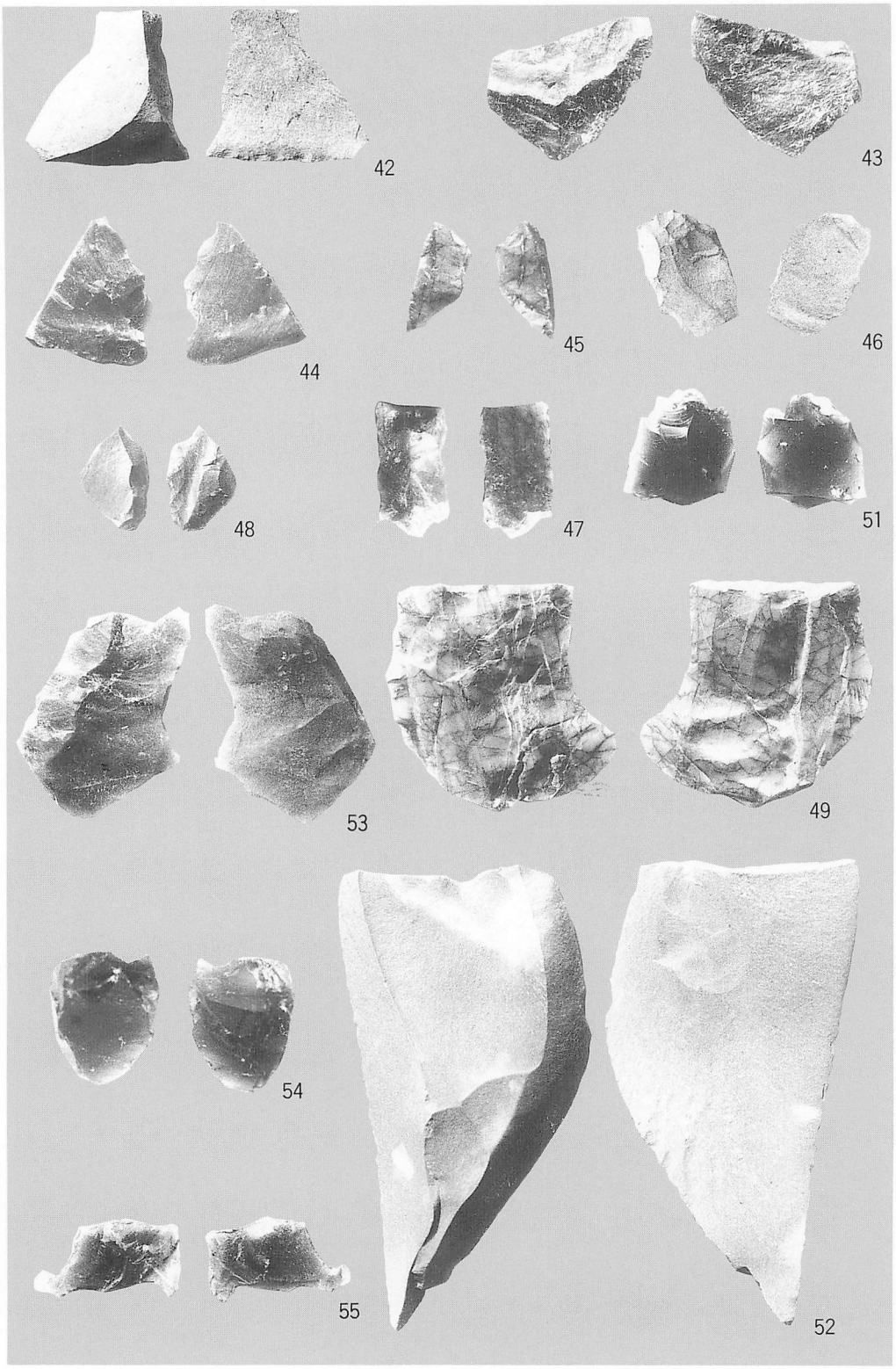


図版18　縄文時代の石器（S＝2／3）

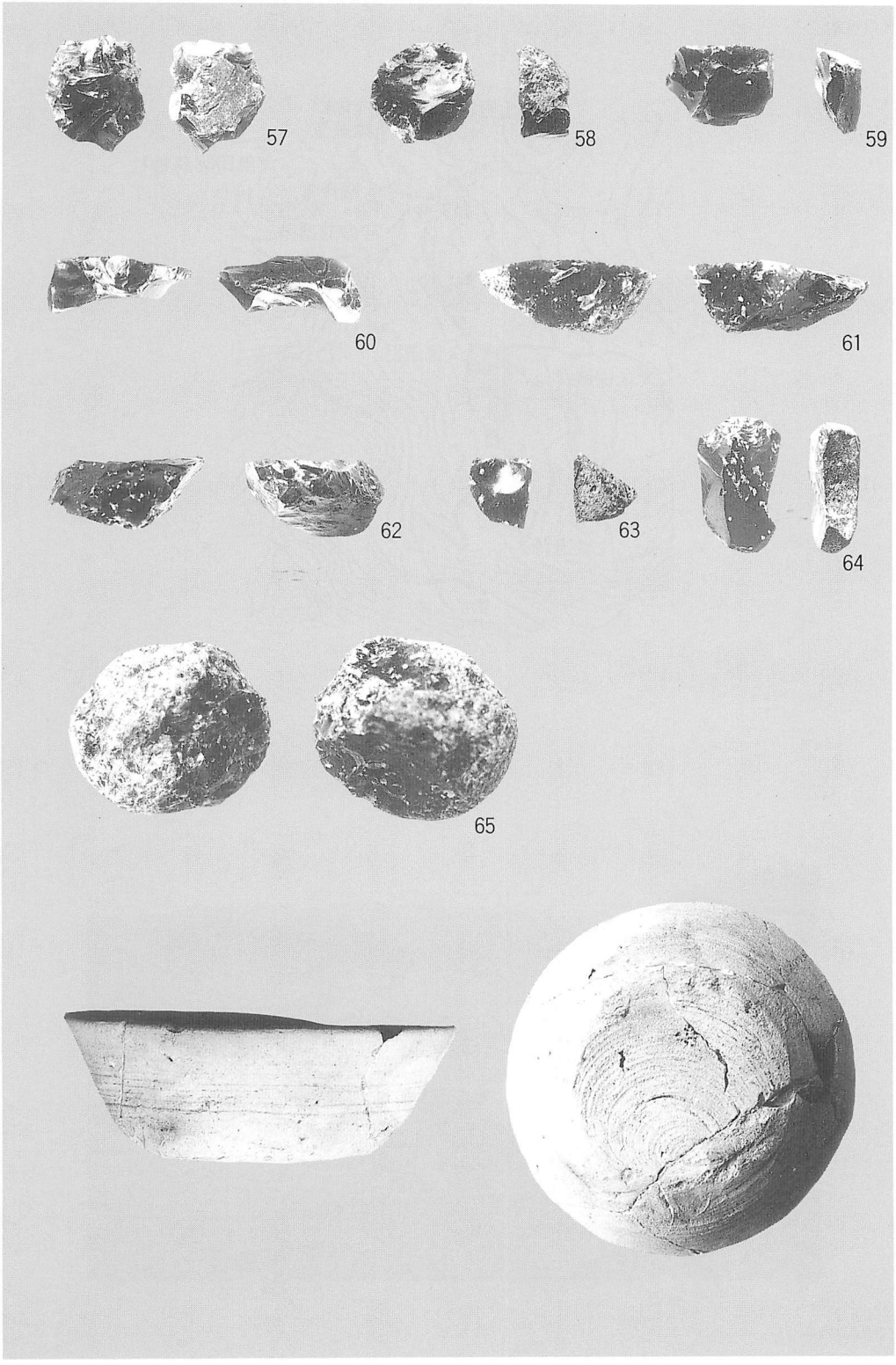
図版19　縄文時代の石器（Ｓ＝2／3）



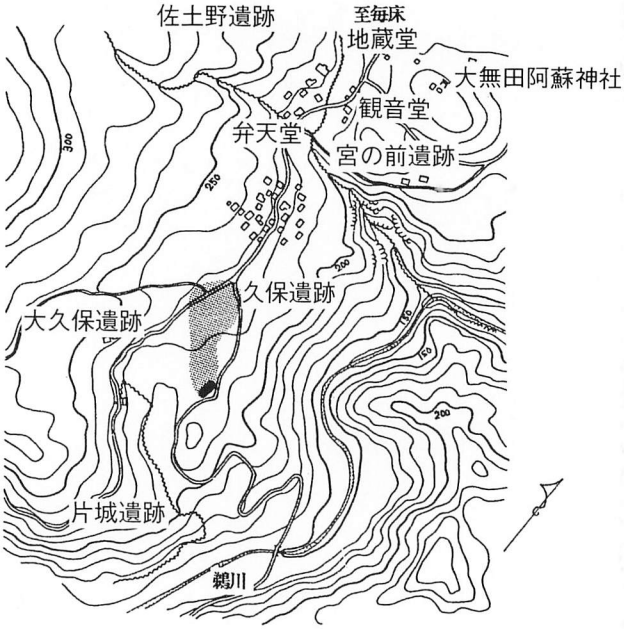
図版20　縄文時代の石器（Ｓ＝1／1）



図版21　縄文時代の石器・中世の土器（S＝2／3）

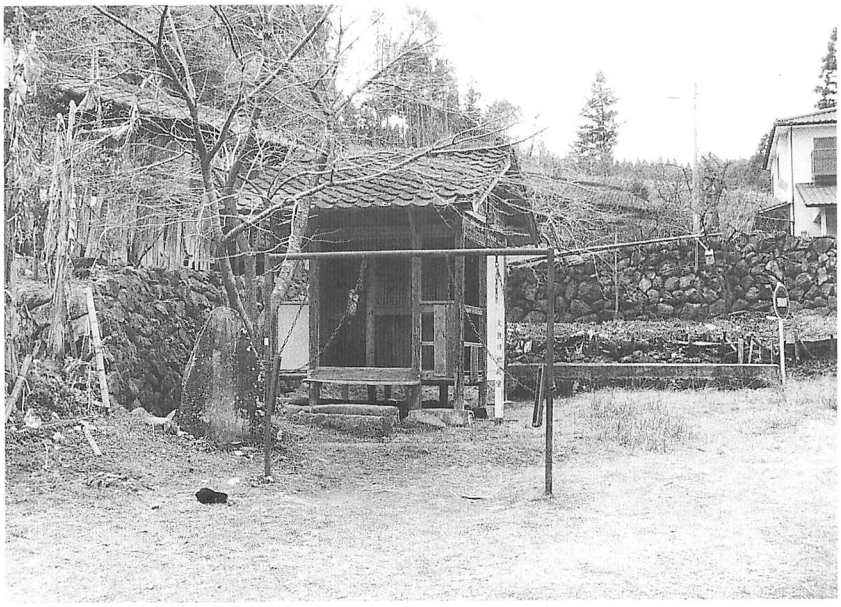


図版22　遺跡の周辺


佐土野遺跡
至毎床
地蔵堂
大無田阿蘇神社
観音堂
弁天堂
宮の前遺跡
久保遺跡
大久保遺跡
片城遺跡
鵜川
300
250
200
150
100

図版23　遺跡の周辺

1．観音堂



2．地蔵堂

図版24　遺跡の周辺

1．弁天堂

2．大無田阿蘇神社

図版25　周辺遺跡の遺物

1．宮の前遺跡

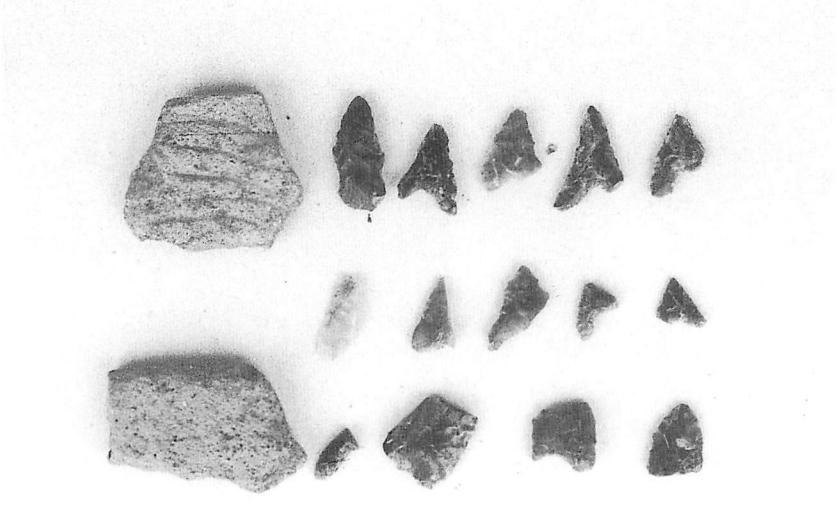
2．宮の前遺跡

図版26　周辺遺跡の遺物

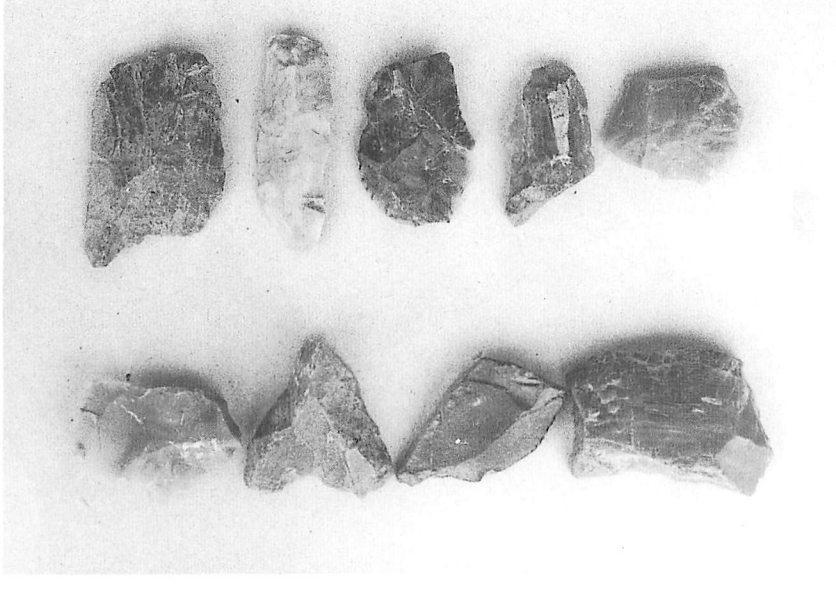
1．宮の前遺跡

2．宮の前遺跡

図版27　周辺遺跡の遺物

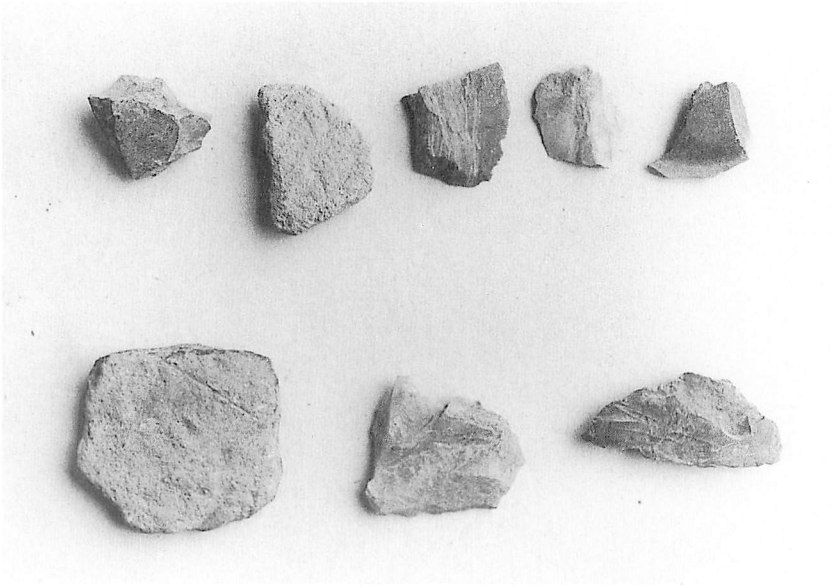


1．片城遺跡

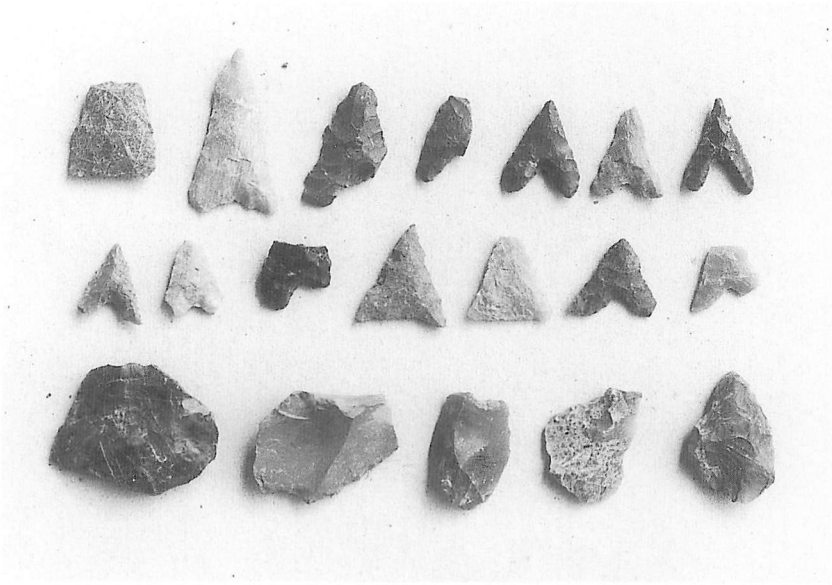


2．片城遺跡

図版28　周辺遺跡の遺物

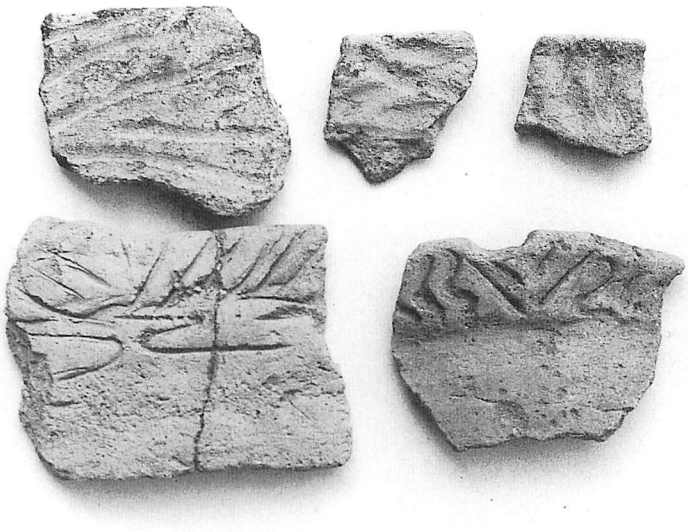


1．佐土野遺跡



2．タブノキ遺跡

図版29　周辺遺跡の遺物



1．長迫遺跡

2．長迫遺跡

おわりに

久保遺跡の調査報告書の刊行をようやくみました．調査が1989年なので，その間４年の歳月が流れたことになります．

この遺跡の調査は，今は小学校の先生として頑張っておられる中原幸博さんが直接携わりました．先土器時代の研究としては，ほとんど素人同然の中原さんが，何と先土器時代の遺跡を掘り当てられたのです．しかも，シラスという厚い無遺物層をぶち抜いての業績です．彼のヴァイタリティーの証明でした．当時，「シラスの下を掘ってやろう」と思っていたかどうかはわかりませんし，もしかしたらシラスをアカホヤと誤解していたのかもしれませんが，そんなことは関係ありません．ただひとつ，彼の遺跡に対する情熱（粘着力）がそうした結果を生んだものと関心すること仕切りです．

今回，報告書を担当することになりましたが，こうした中原さんの情熱までは報告書の中に注入できたかどうか不安です．中原さんがこの報告書を担当したら，もしかしたらもっと迫力のあるものになったのかもしれません．もしも迫力が欠けているとしたら，それは私の力不足からくるものであり，今後の研究においてそれを補っていきたいと思います．皆さんのご教示をお願いいます．

最後にはなりましたが，この報告書を作成する際に，多くの人びとからさまざまなご協力を受けました．あつくお礼を申し上げます．　（き）

熊本県文化財調査報告　第125集

久　保　遺　跡

平成５年３月10日

編集
発行　熊　本　県　教　育　委　員　会

〒860 熊本市水前寺６丁目18番１号

印刷　大　和　印　刷　所

KUBO SITE

—— Archaeological Monographs, Kumamoto Prefecture ——

NO.125

1993

Kumamoto Prefectural Board of Education

04	教委	教文
②	002	

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 125 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：久保遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/